

訂正再版

持28
703

帝國及列國海軍

海軍大佐小栗孝三郎著

東京 丸善株式會社

明治
42 7 13
丙寅

明治四十二年

緒言

一、本書著述の旨趣 開國進取の洪謨に依り上下一致して益々帝國の隆昌を圖るの時に方り國防の第一線たる海軍と帝國々民との間に所謂他人行儀なる痕跡なきに非るは著者の久しく憾みとする所なりき、蓋し民間有爲の士が思ひを國防に潜め列強海軍の現状及び將來の趨勢を調査し觀察せんとするに際し適切なる材料に乏しき事之か因を爲すの一にして國民一般の海軍思想未だ相當の域に達せざる事亦他の一因たらずとせんや

我が盟邦たる英國を顧るに同國が其國是として優勢なる海軍力の維持に力むること終始一貫敢て渝るなきは同國

民の歴史上感得したる深き信念と朝野名士の眼識とに基
くこと勿論なりと雖とも一は豫後備役に在る海軍將校の
言文所論が有益なる政策の参考となり又民間海軍思想の
涵養に貢献する所大なるにも依らずんはあらす今や帝國
の地位責任彌々高且大を加へ適當なる海軍勢力の維持は
國防上極めて重視せざるべからざる時運に際會せるに拘
はらず前記の如き關係を今日の儘に放委するは悔を永遠
に貽すものと謂はざるべからず是れ不肖敢て自ら揣らず
茲に本書を公にする所以なり

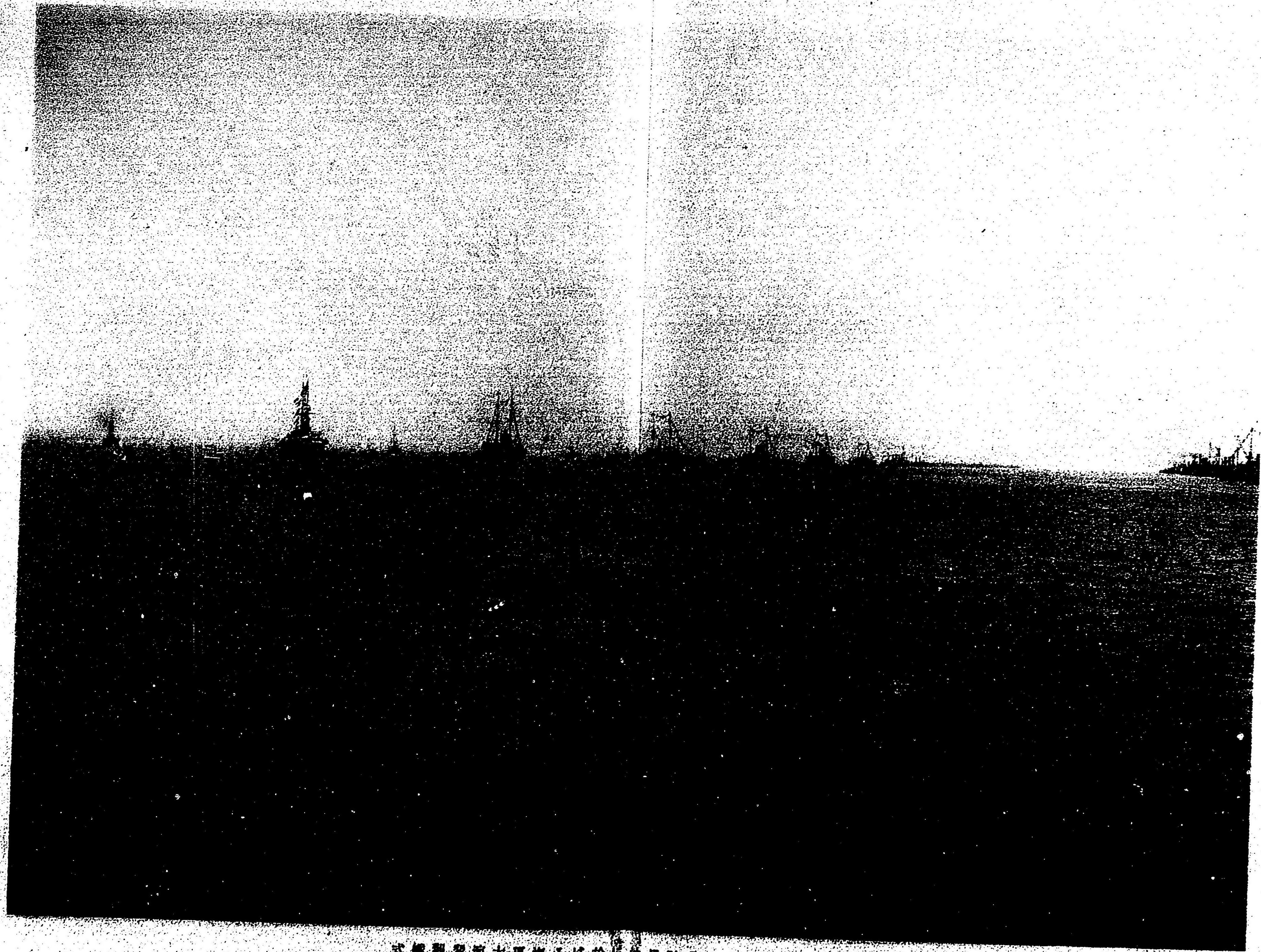
二、本書叙事の方針 本書事を叙する帝國及び列強海軍の現
狀を研め其趨く所を察するを主眼とす往々歴史沿革を説
き又は將來に對する意見希望を述ふる所なきにあらざれ

ども要は上記目的を達するの一助となすに外ならざるな
り

三、本書に就ての希望 本書は如上の旨趣方針を以て成れり
只た著者の淺學寡聞なる固とより彼のフレッサー、ジェーン
等諸名家の作の如き大成のものには企及すべき所にあら
ずと雖とも而も我國現下の須要に應ぜんが爲めには此小
著亦採るべき所あらん乎冀くは民間有爲者の參考資料た
るを得且つは一般國民海軍思想の發展に裨益する所あら
は獨り著者の幸のみにあらざるなり

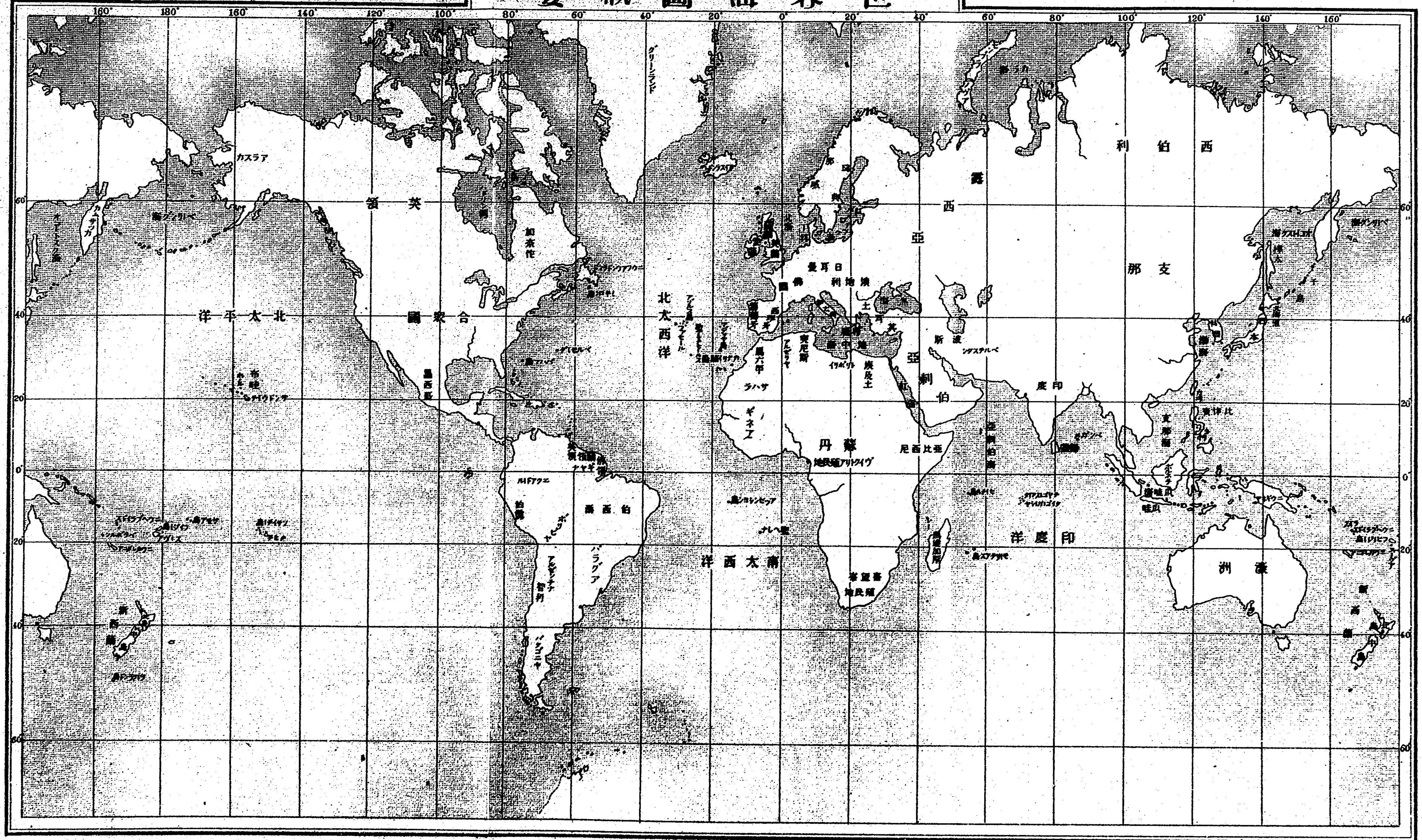
明治四十二年三月

小栗孝三郎識

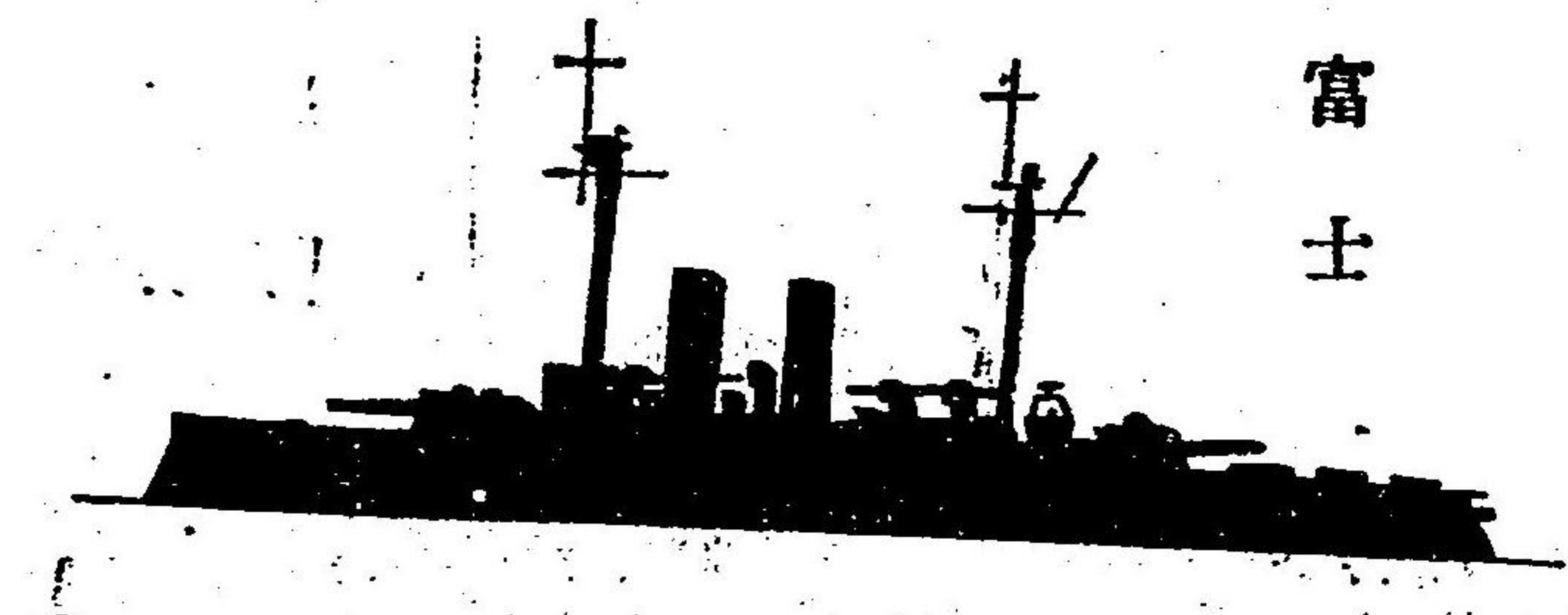


式禮觀習演大軍海名村於 日十月一十年一十四治明

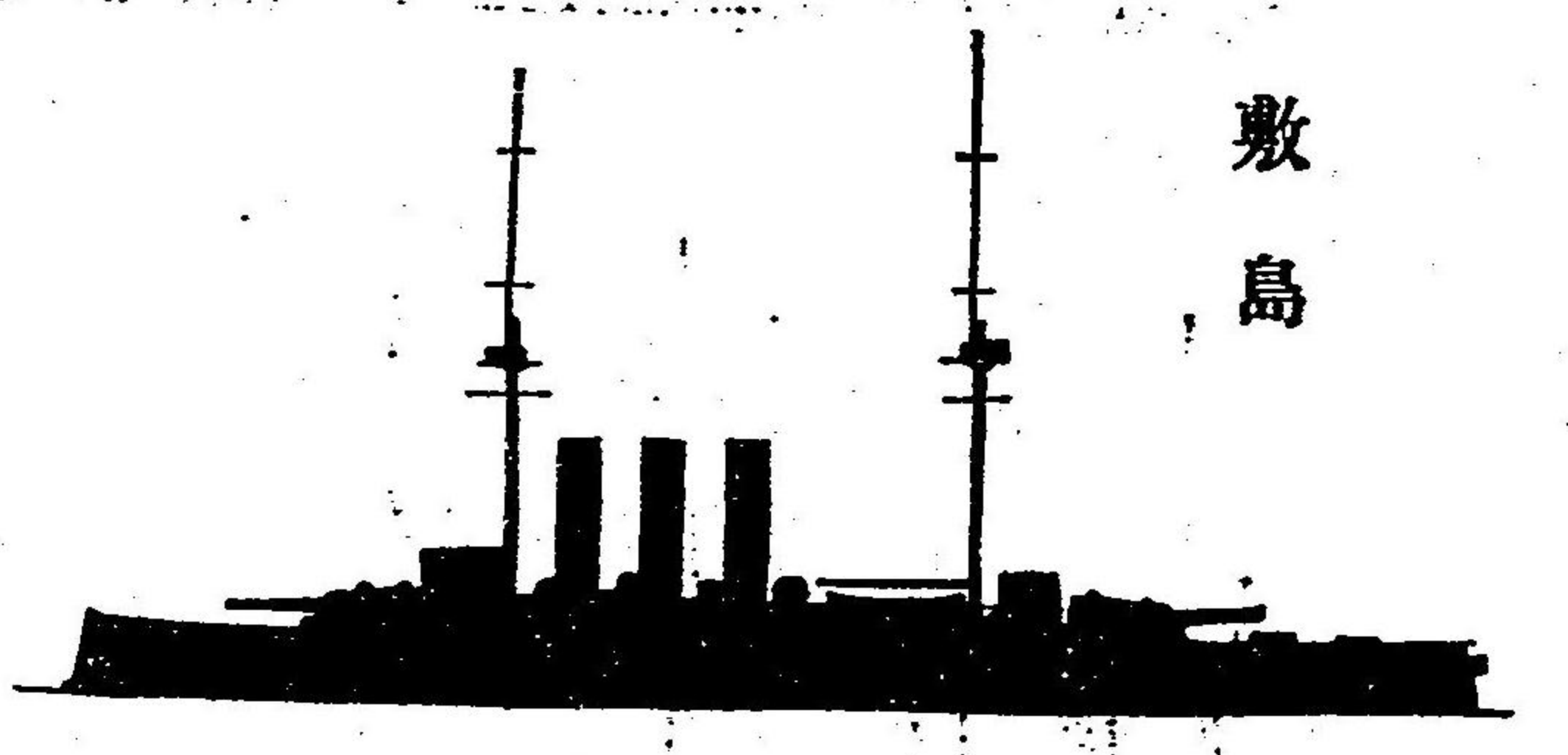
世界海圖概要



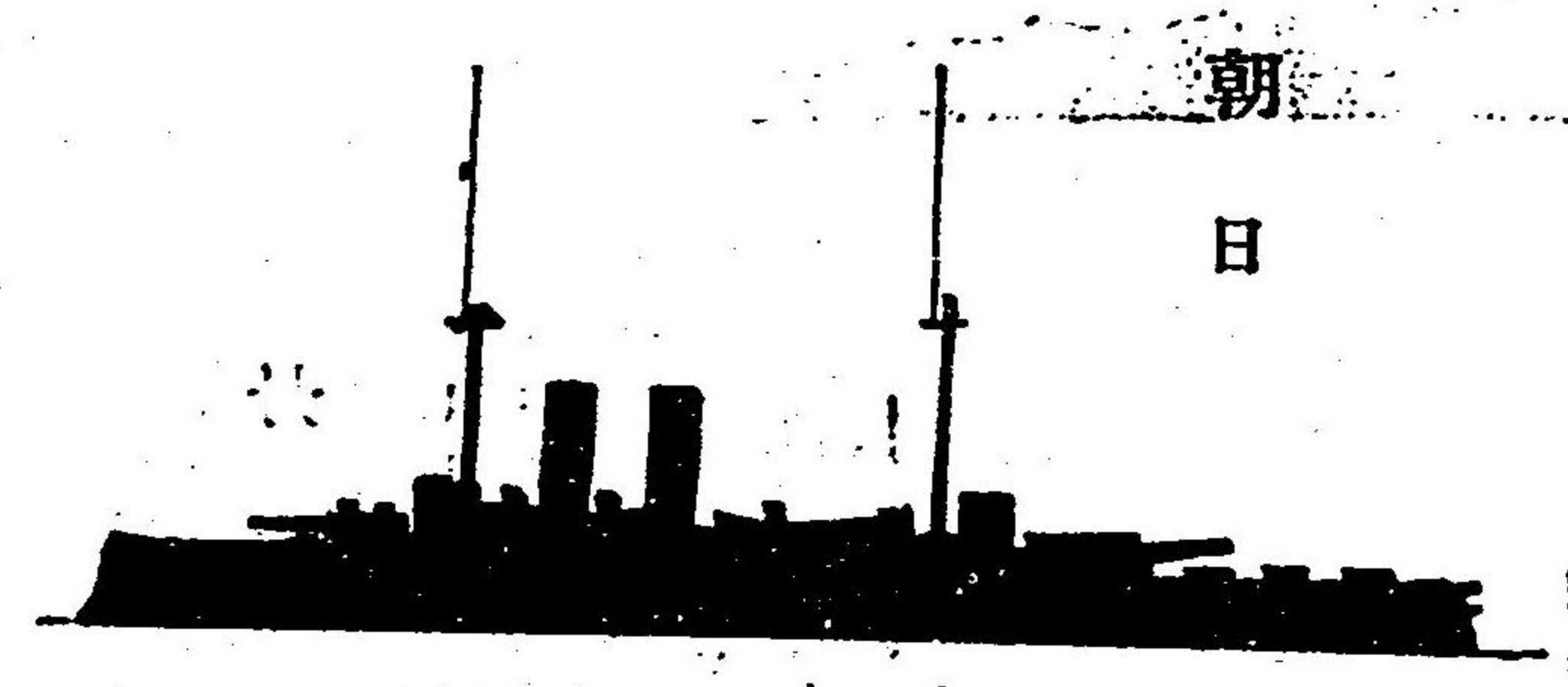
帝國軍艦の遠望



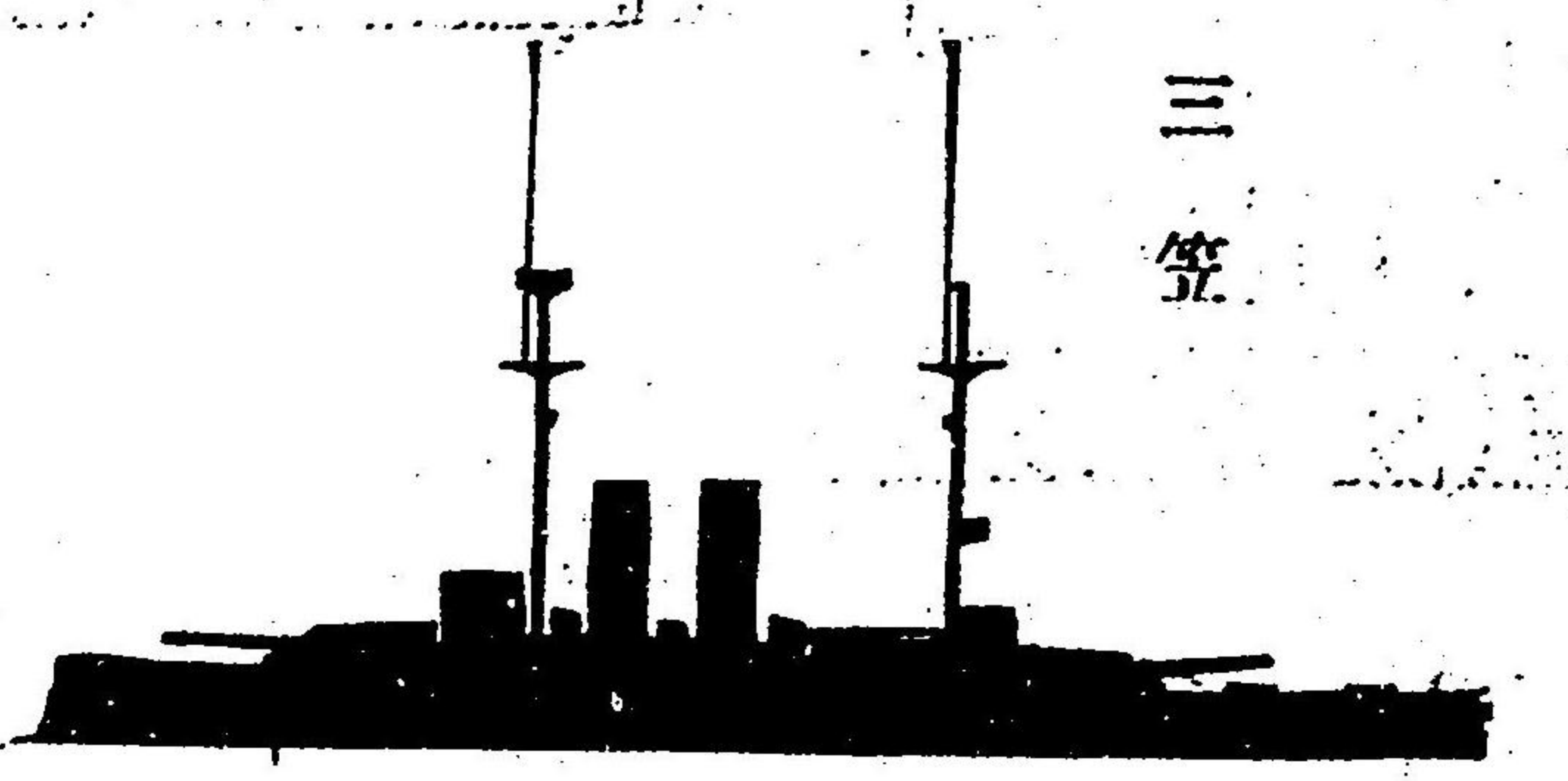
富士



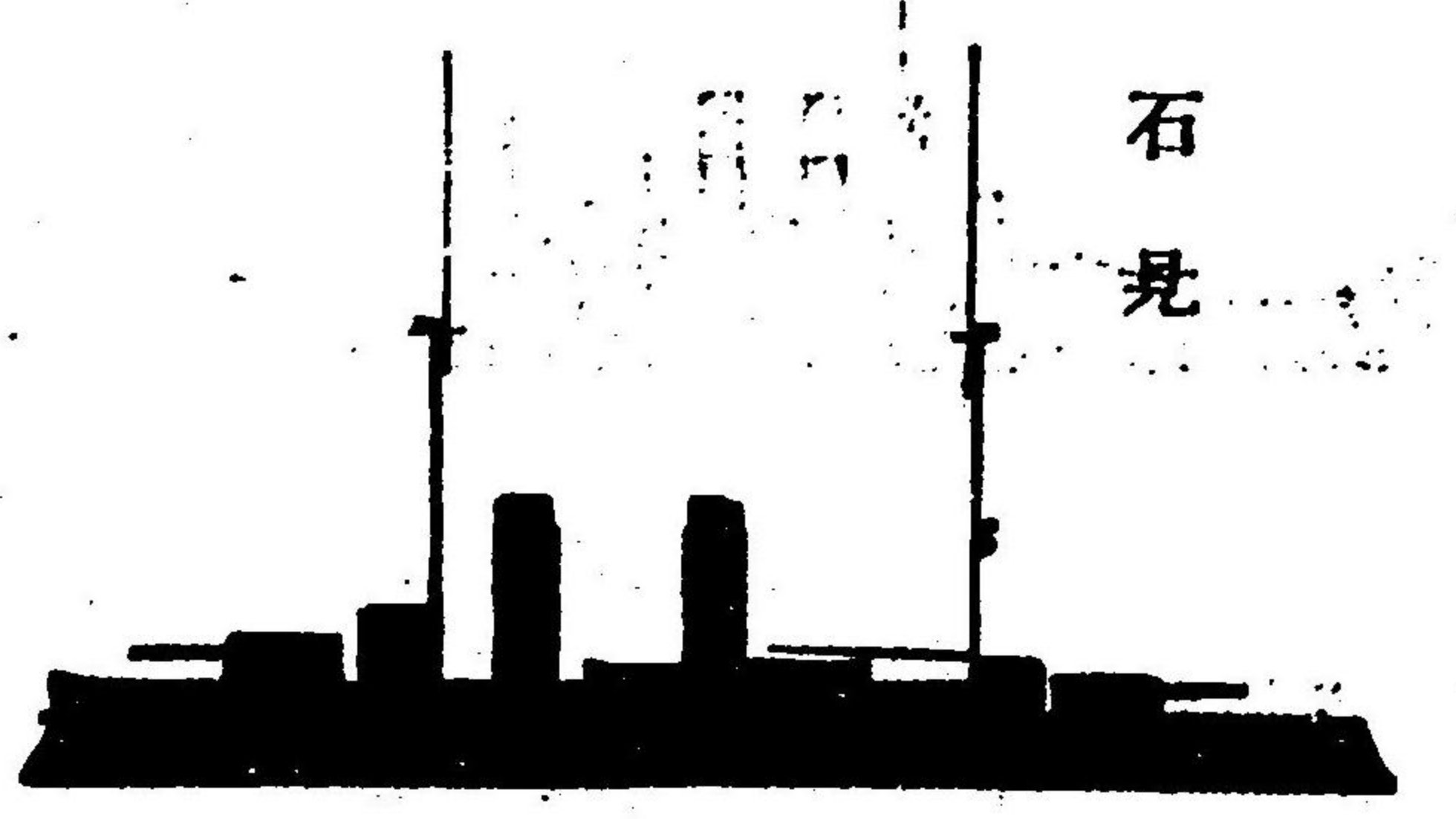
敷島



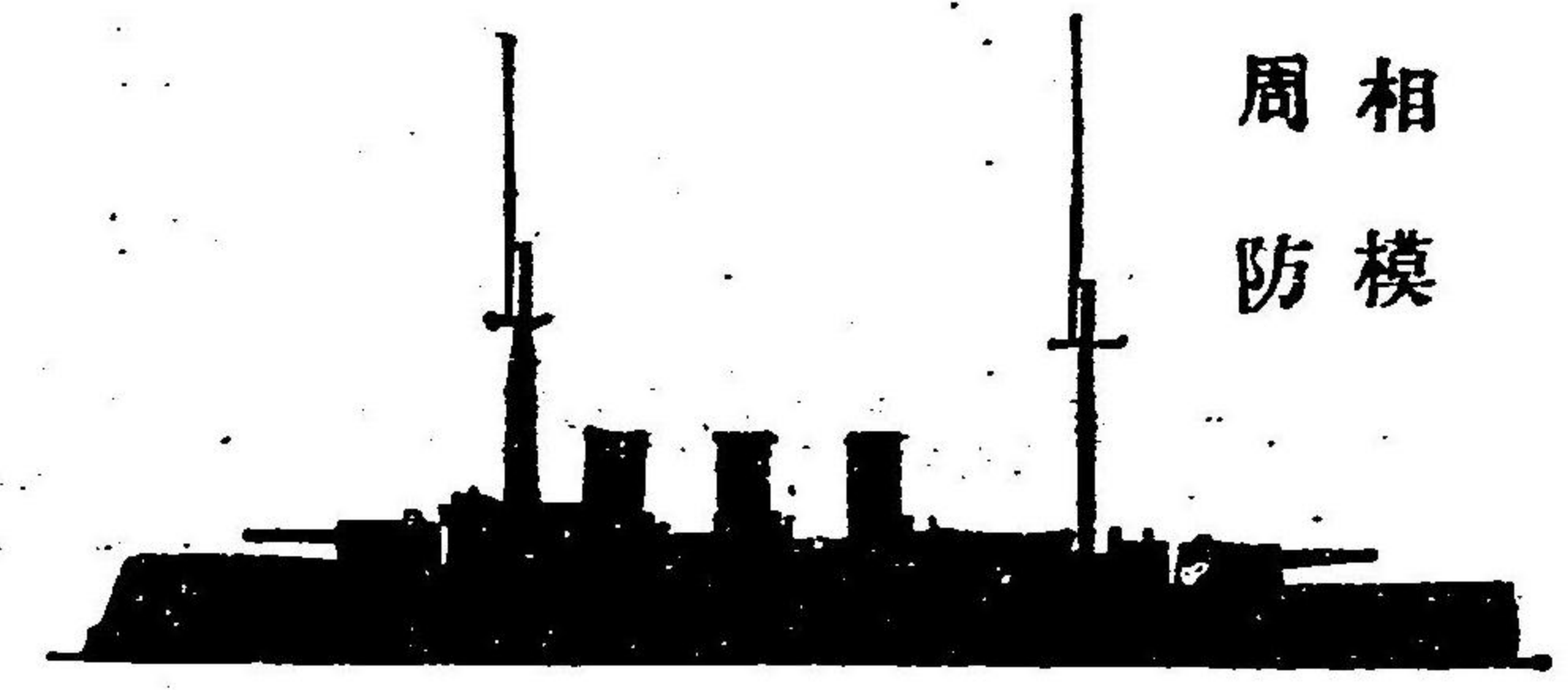
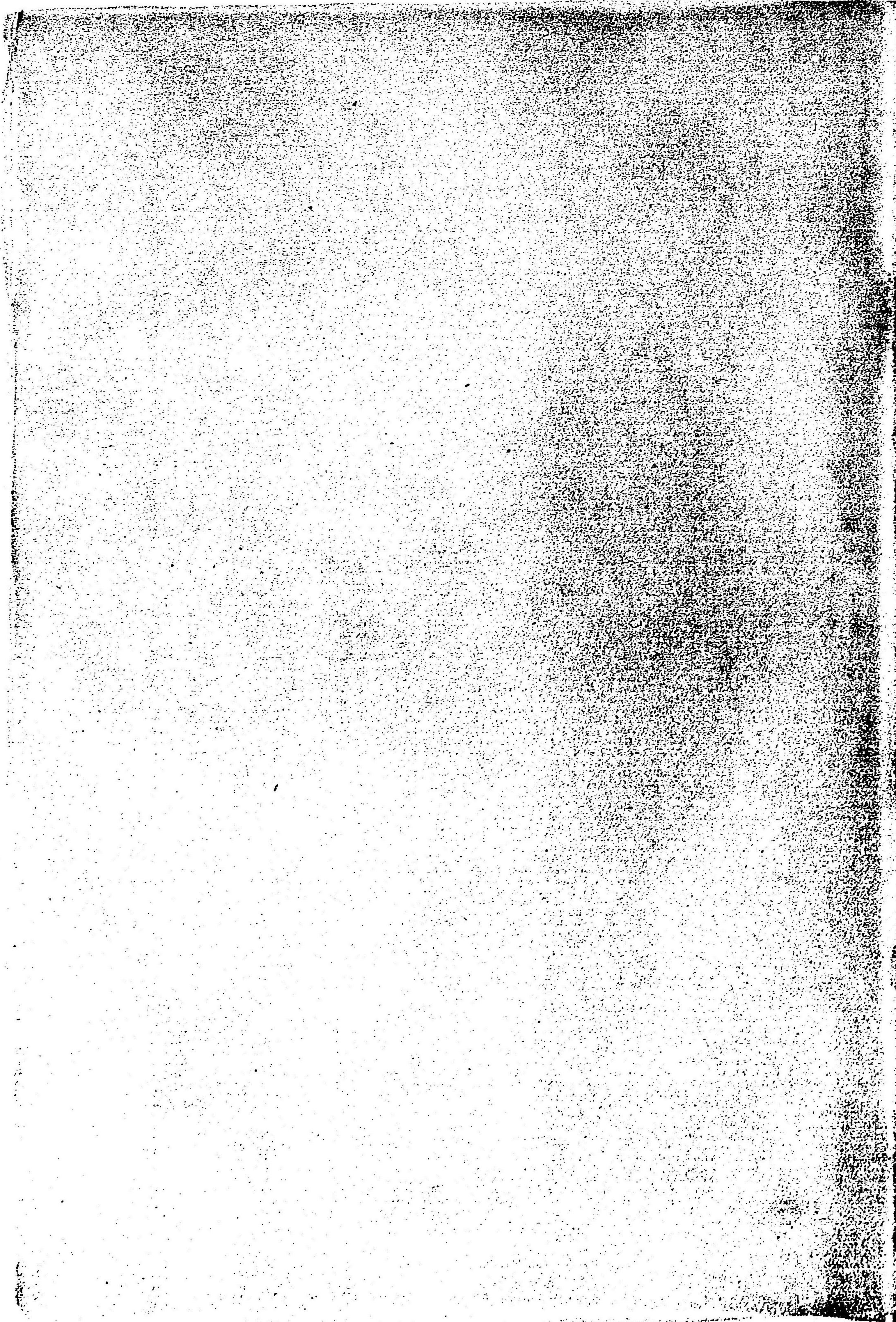
朝日



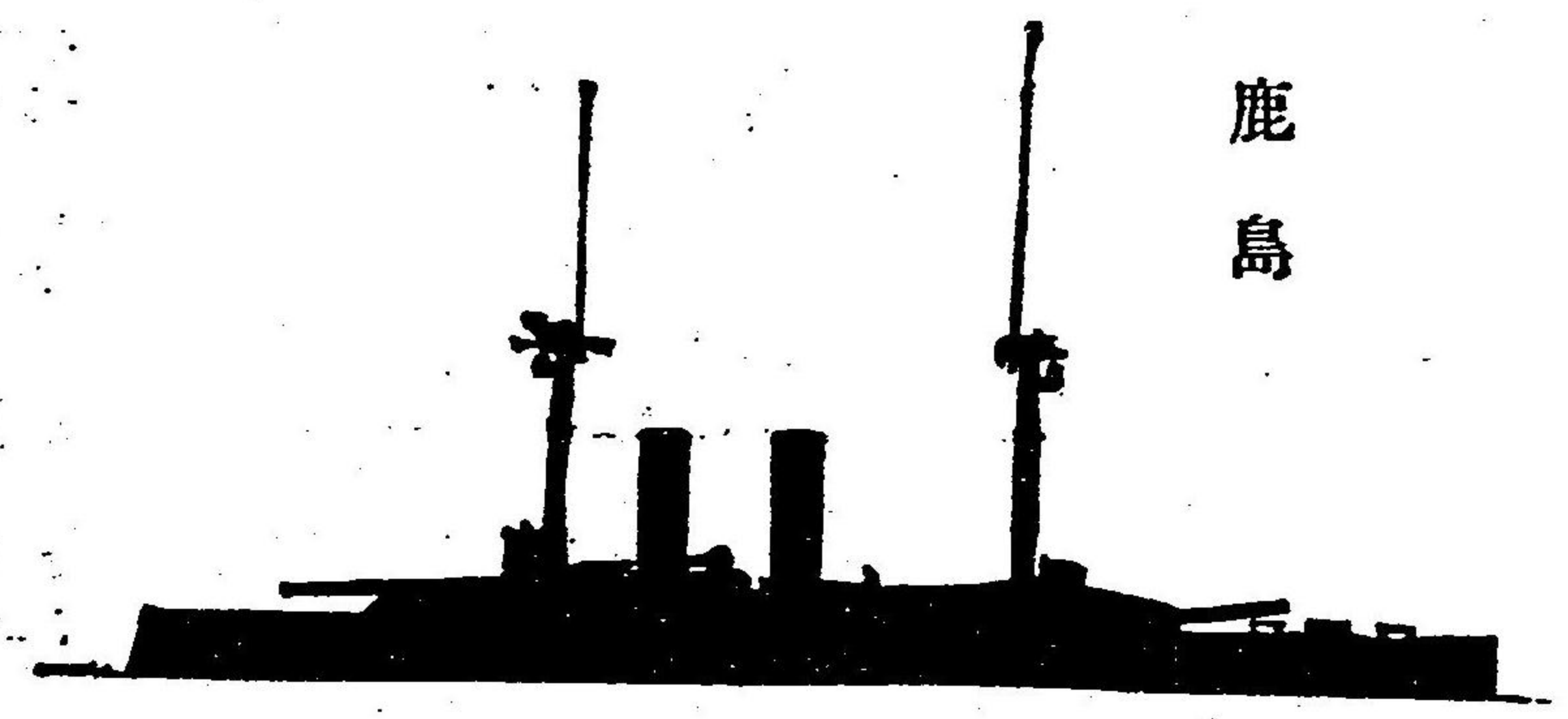
三笠



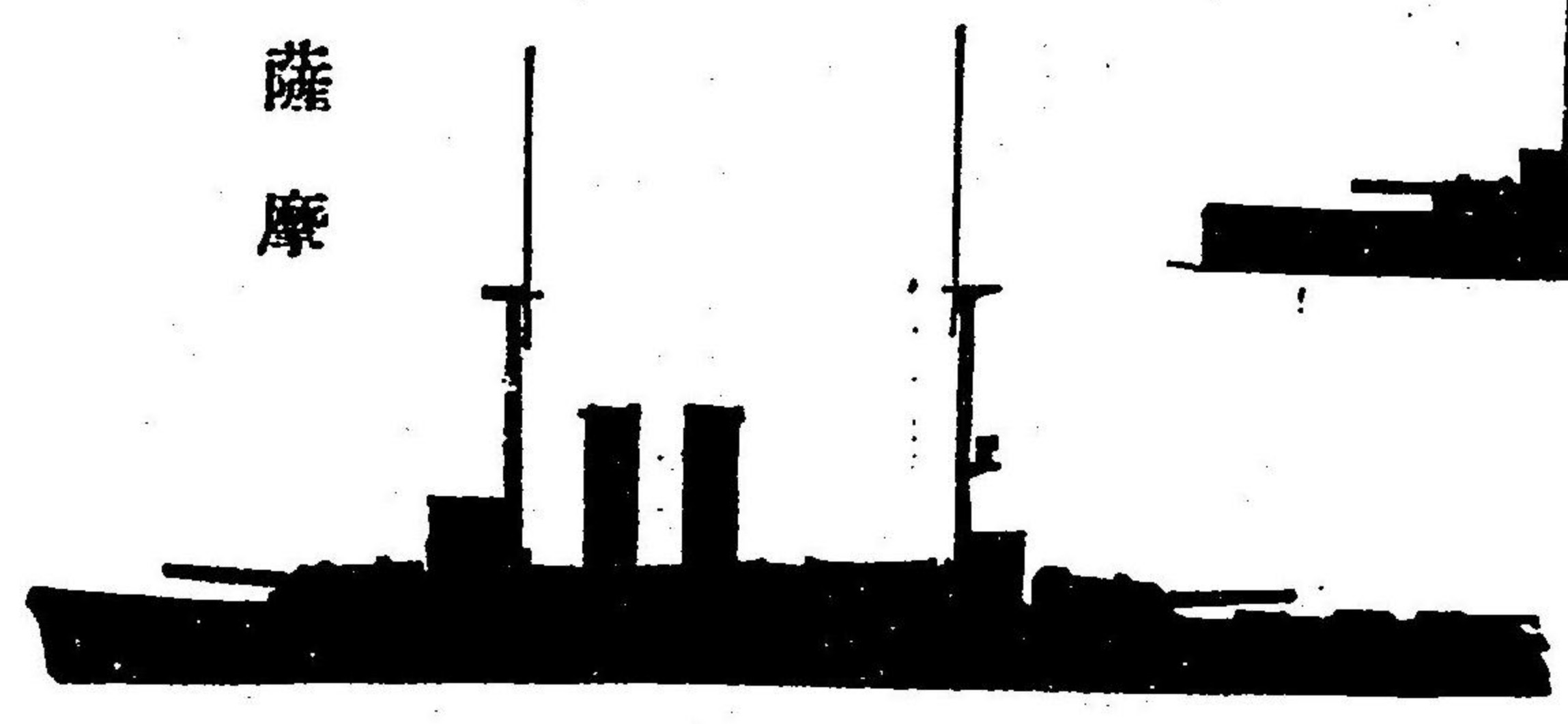
石見



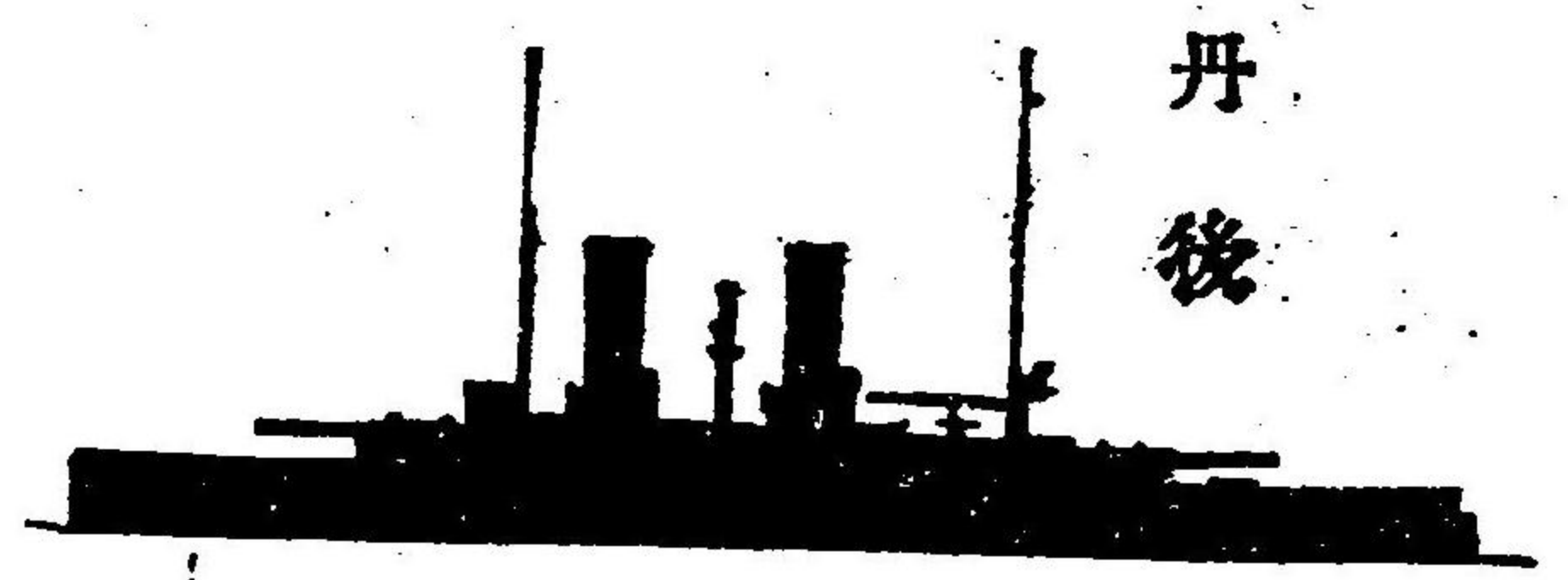
周相
防模



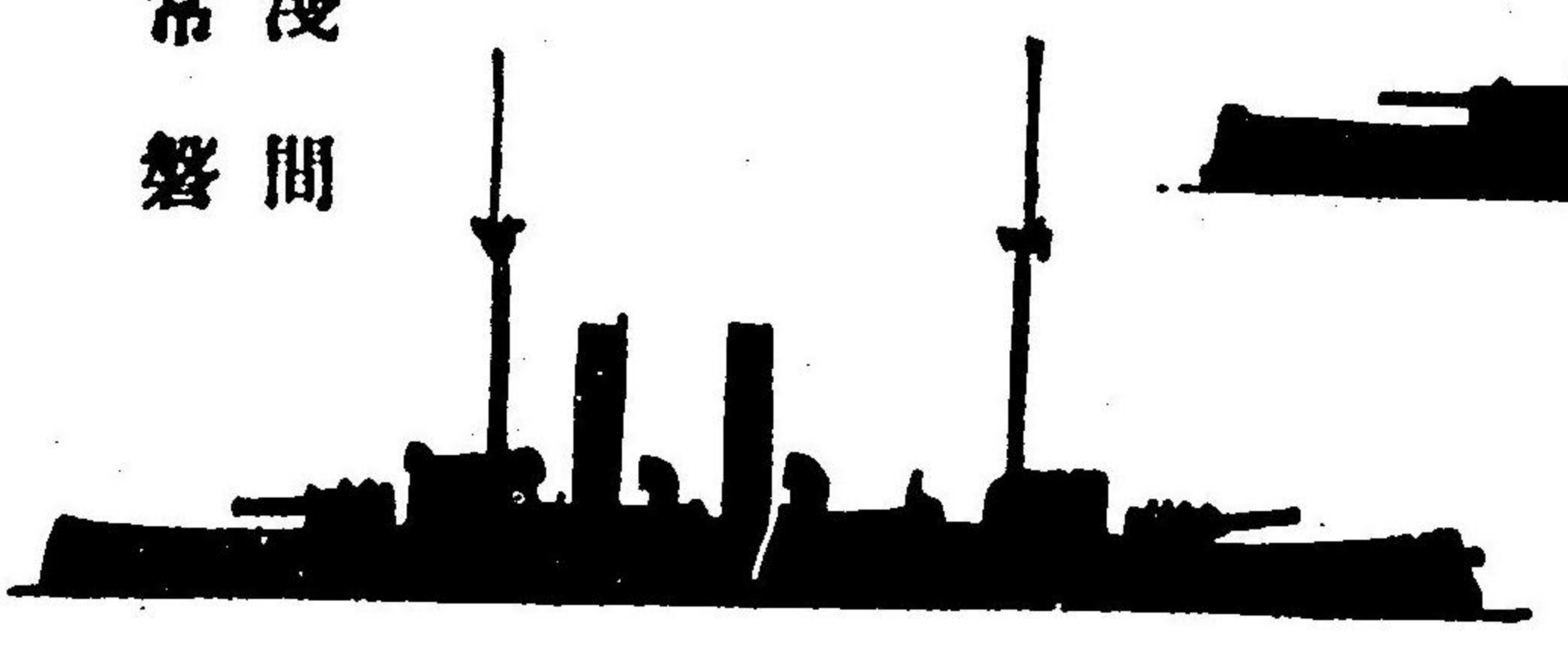
鹿
島



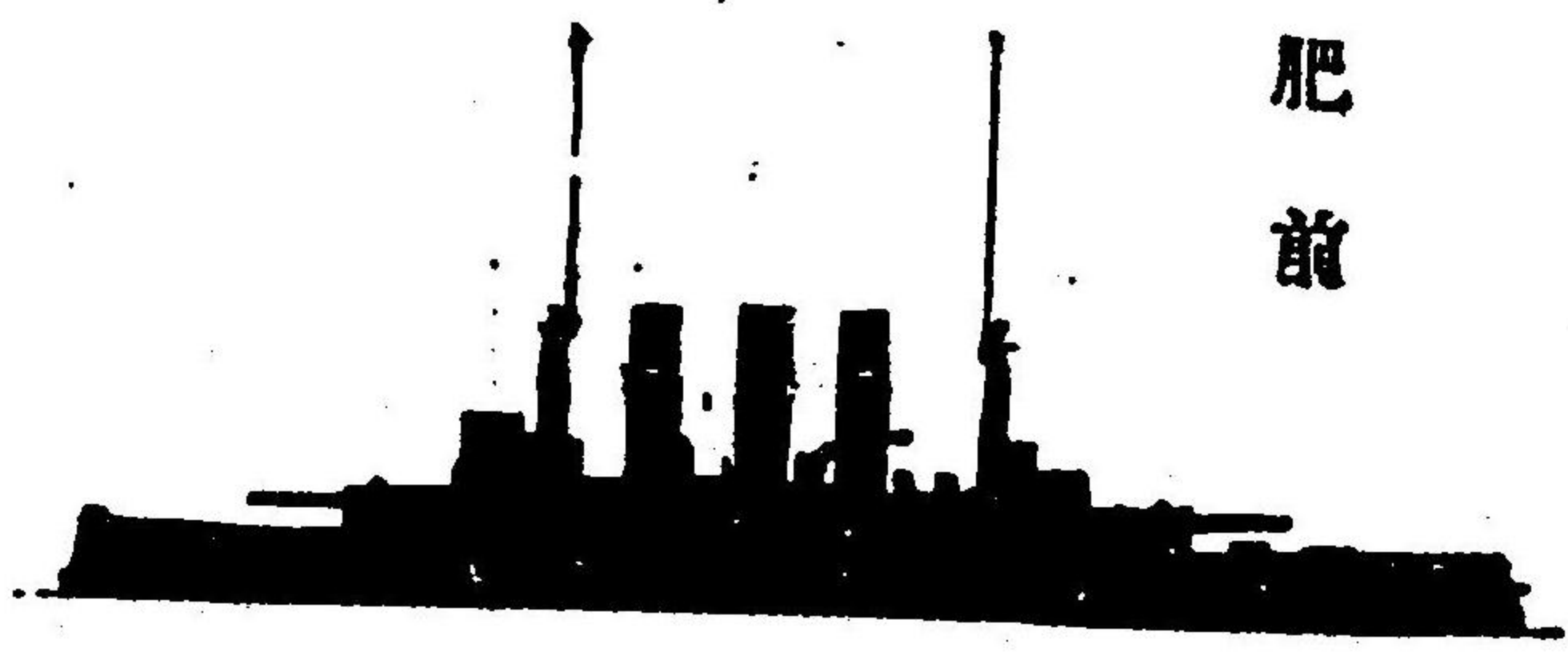
薩
摩



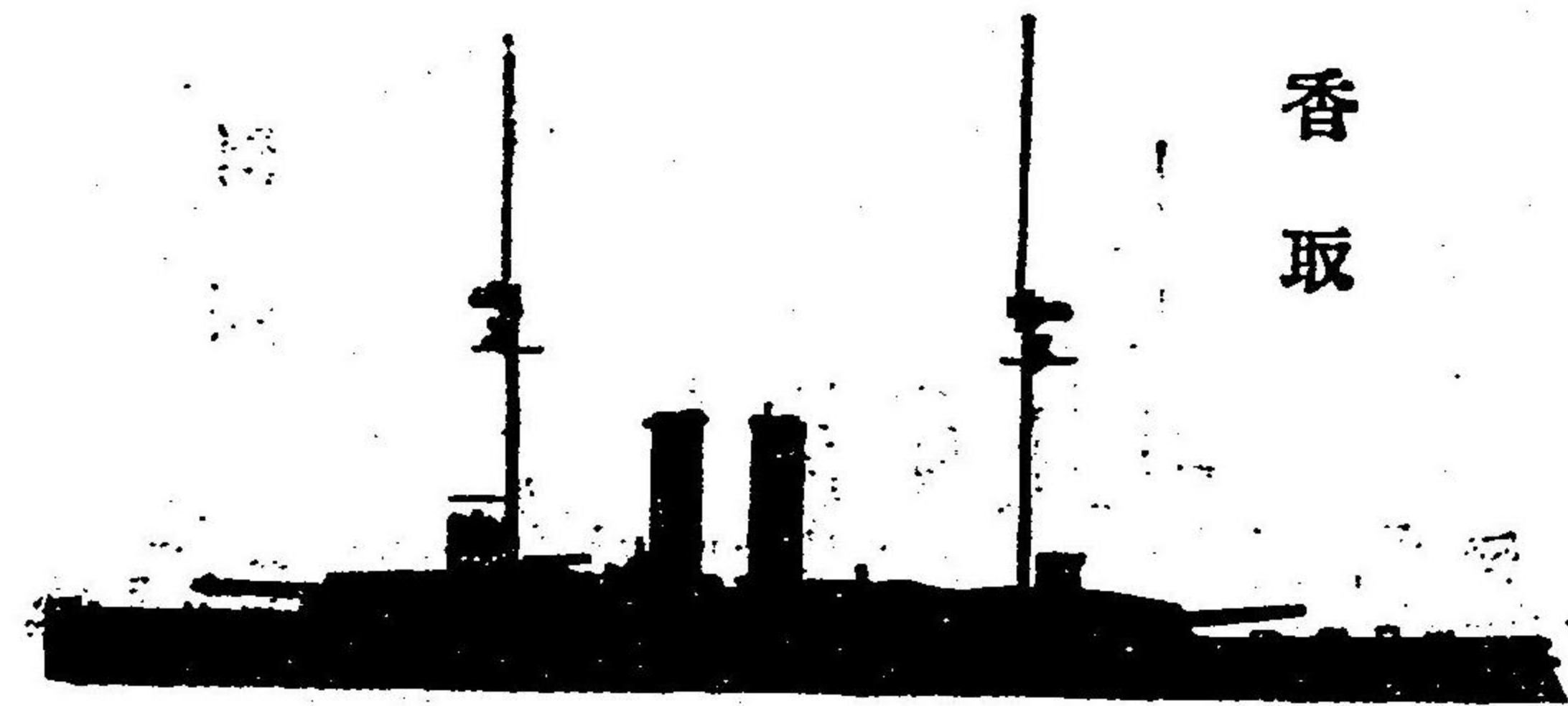
丹
後



常
淺
磐
間



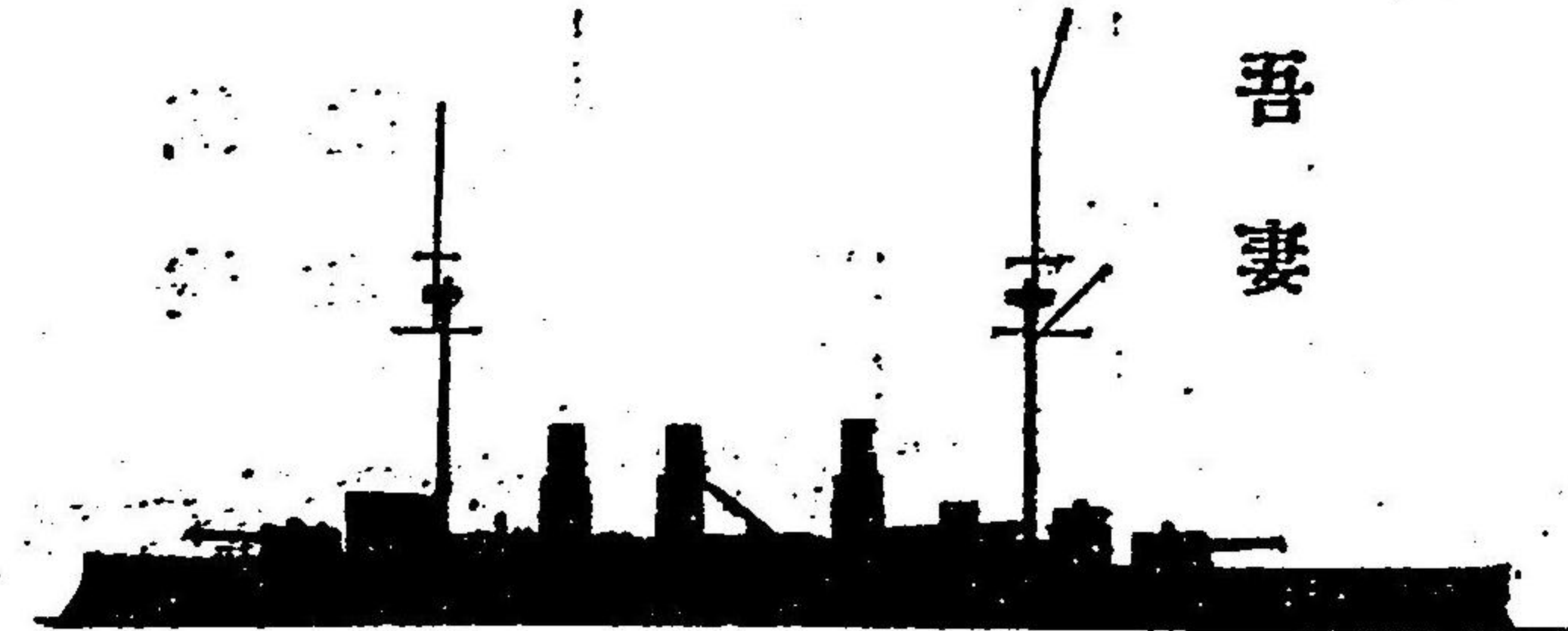
肥
前



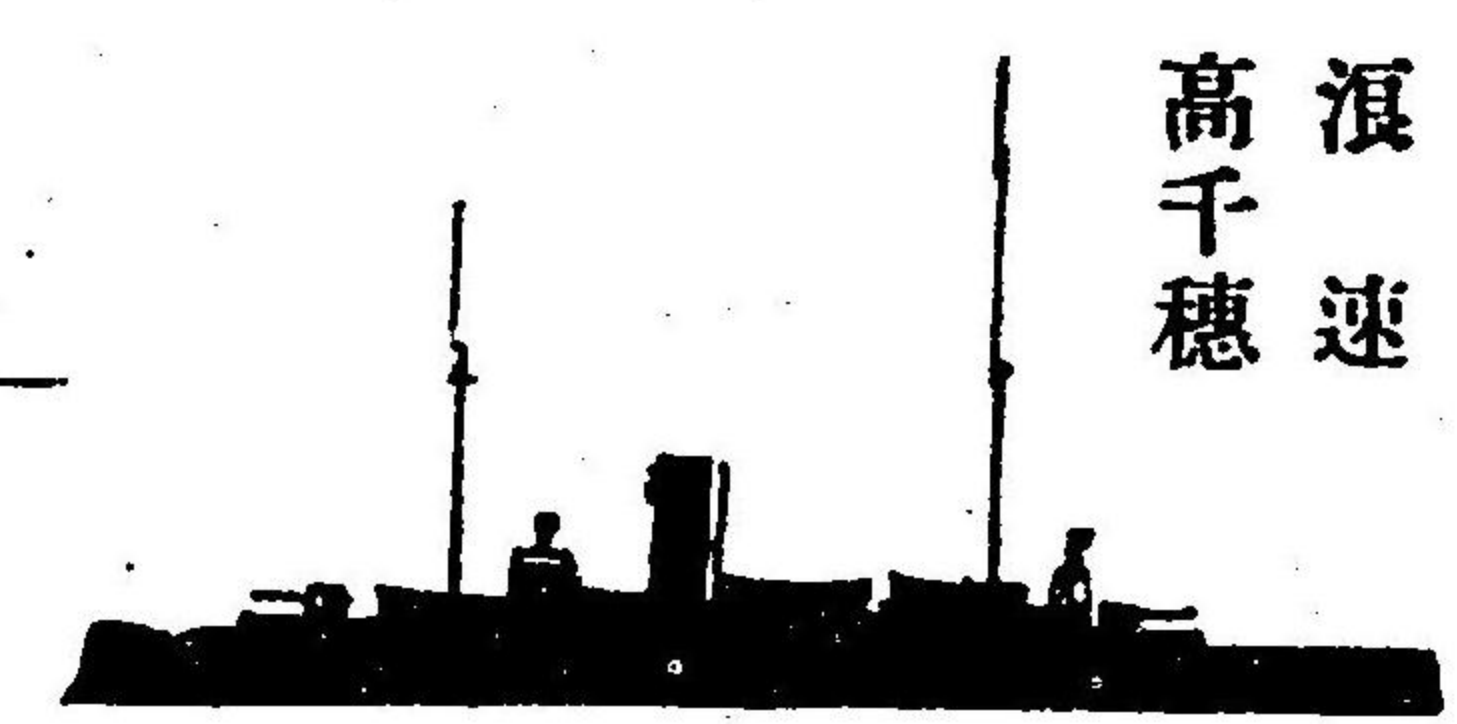
香取



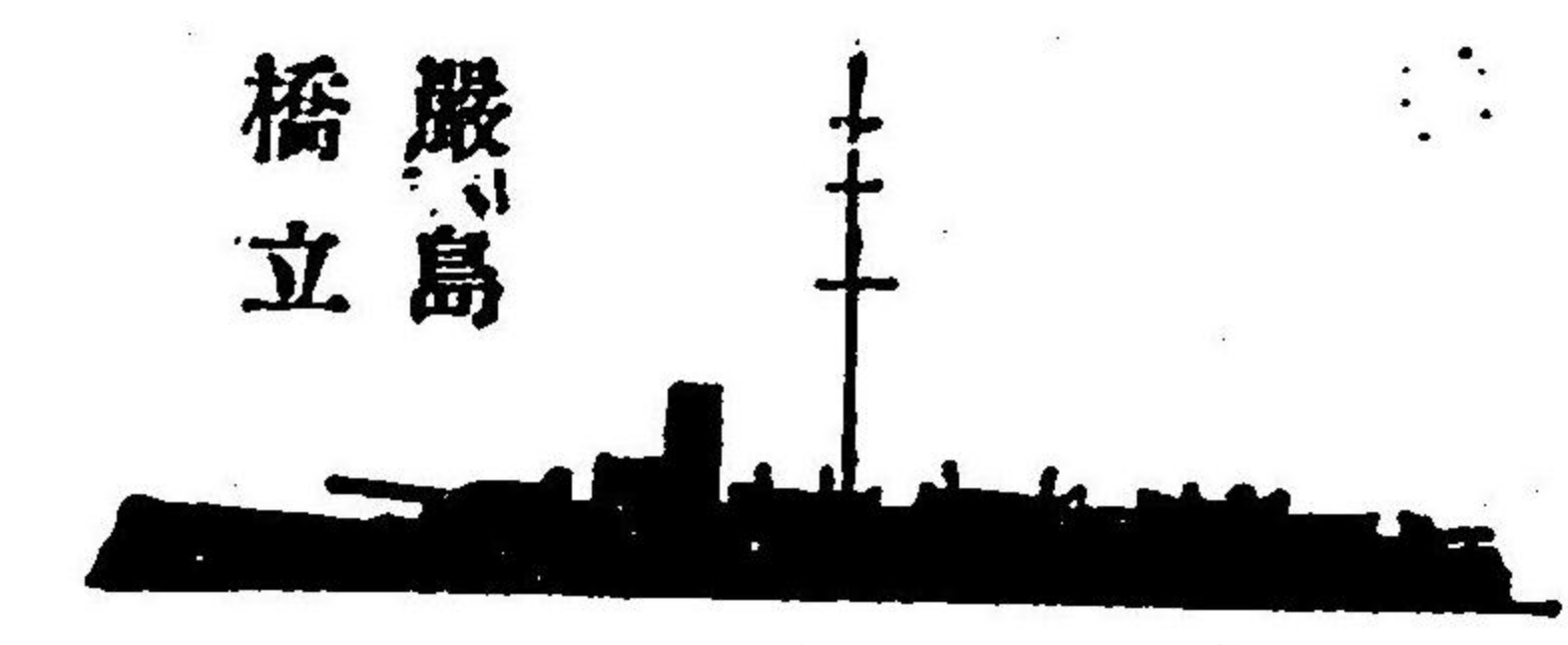
八雲



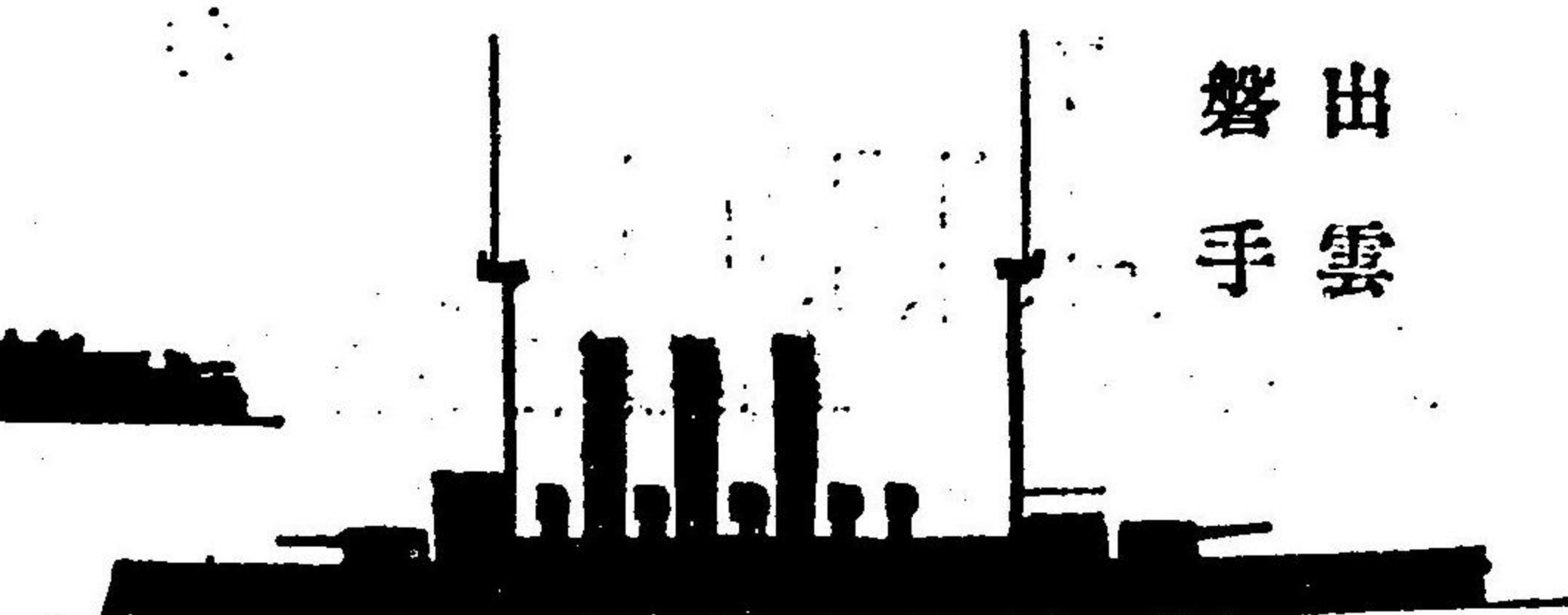
吾妻



高千穂



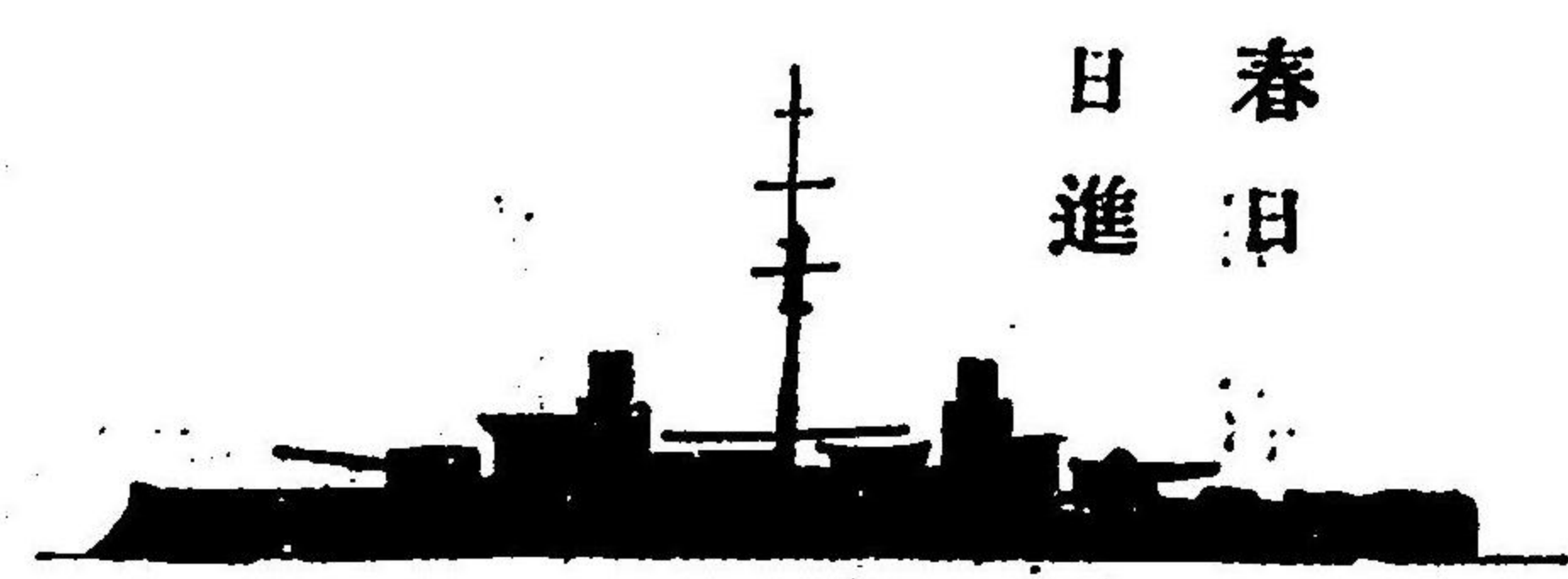
島立



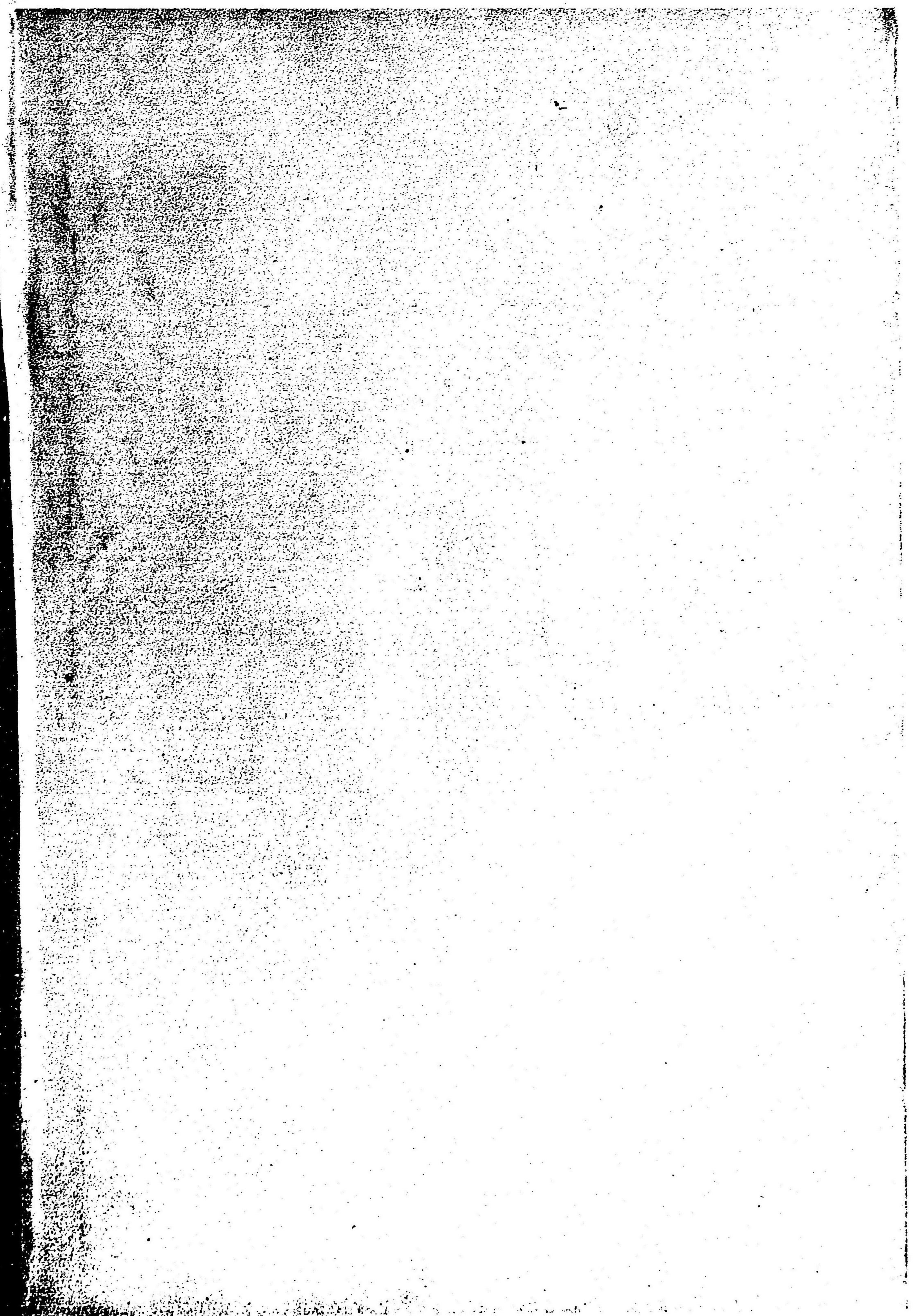
出雲

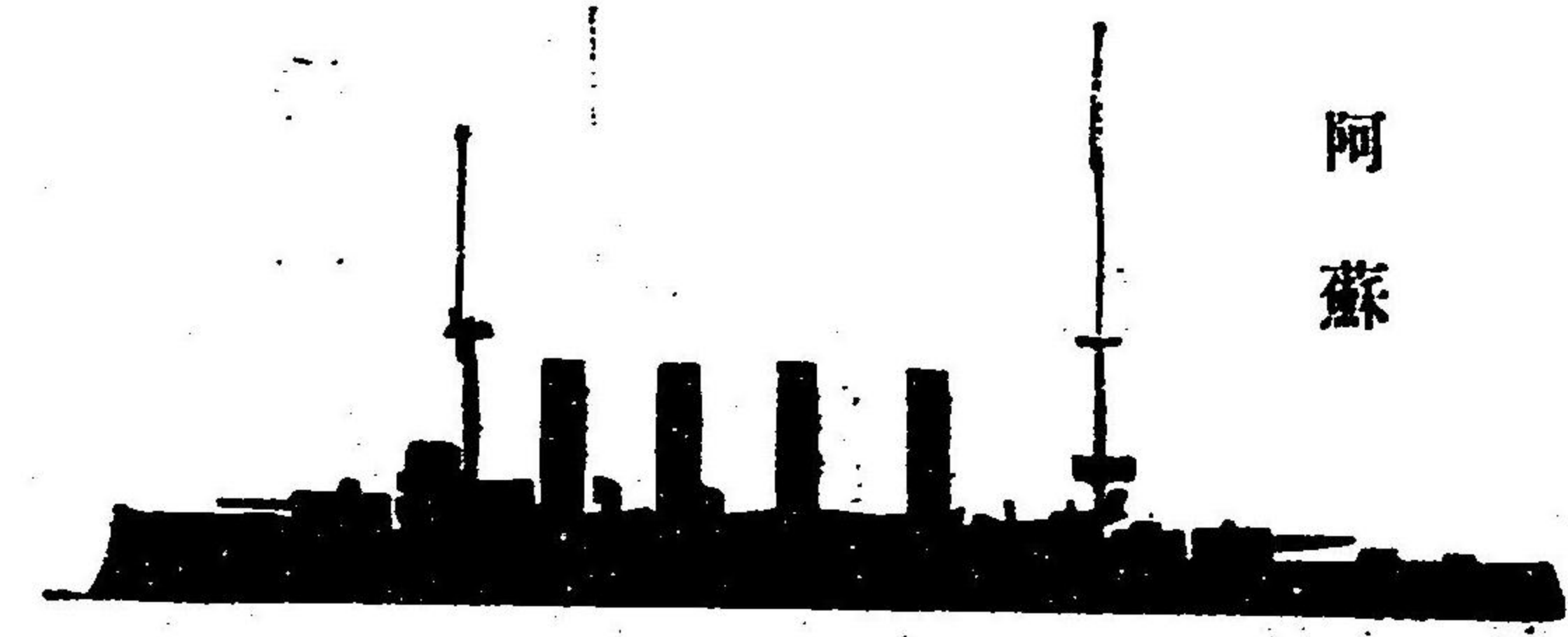
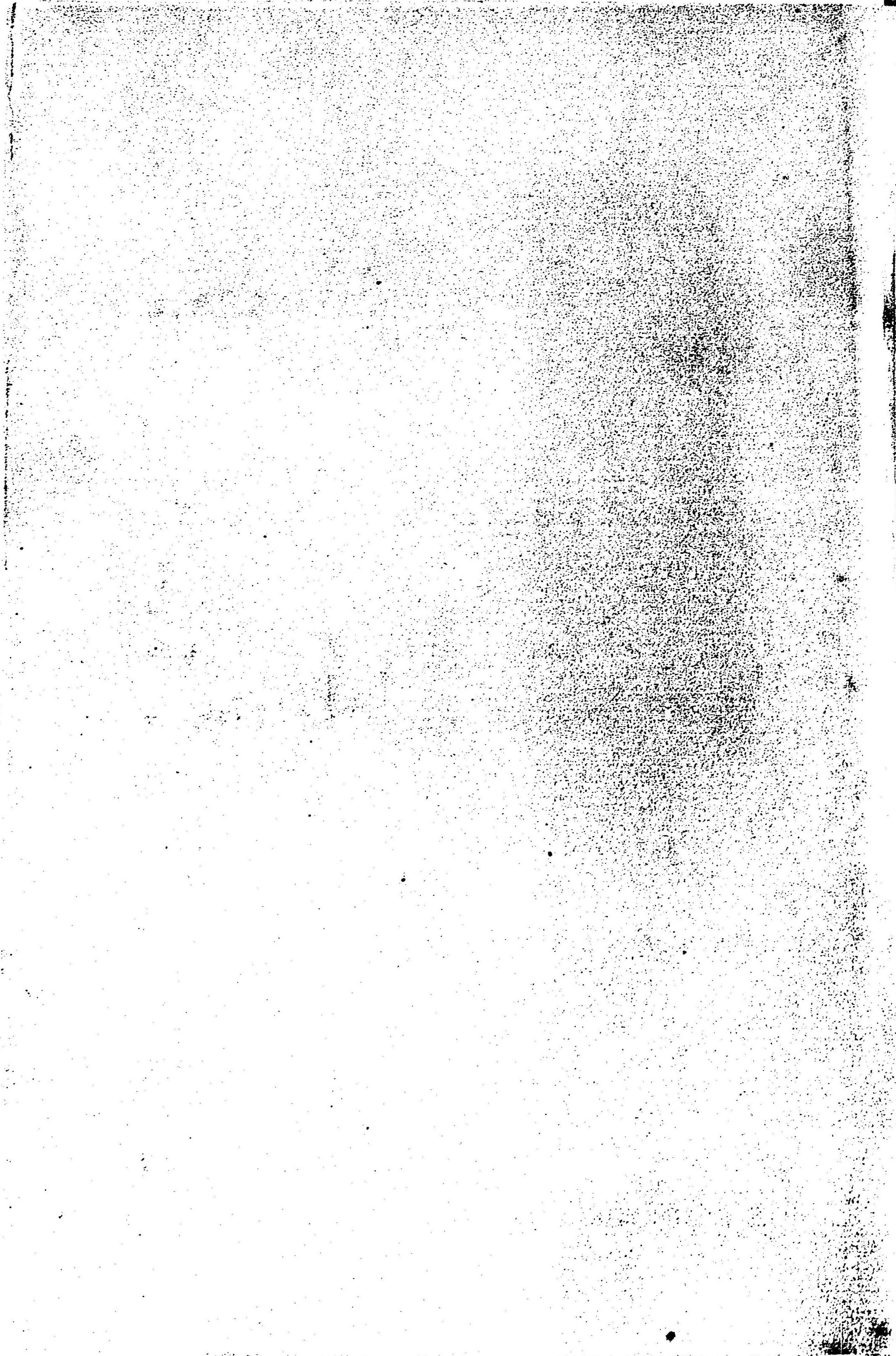


笠置

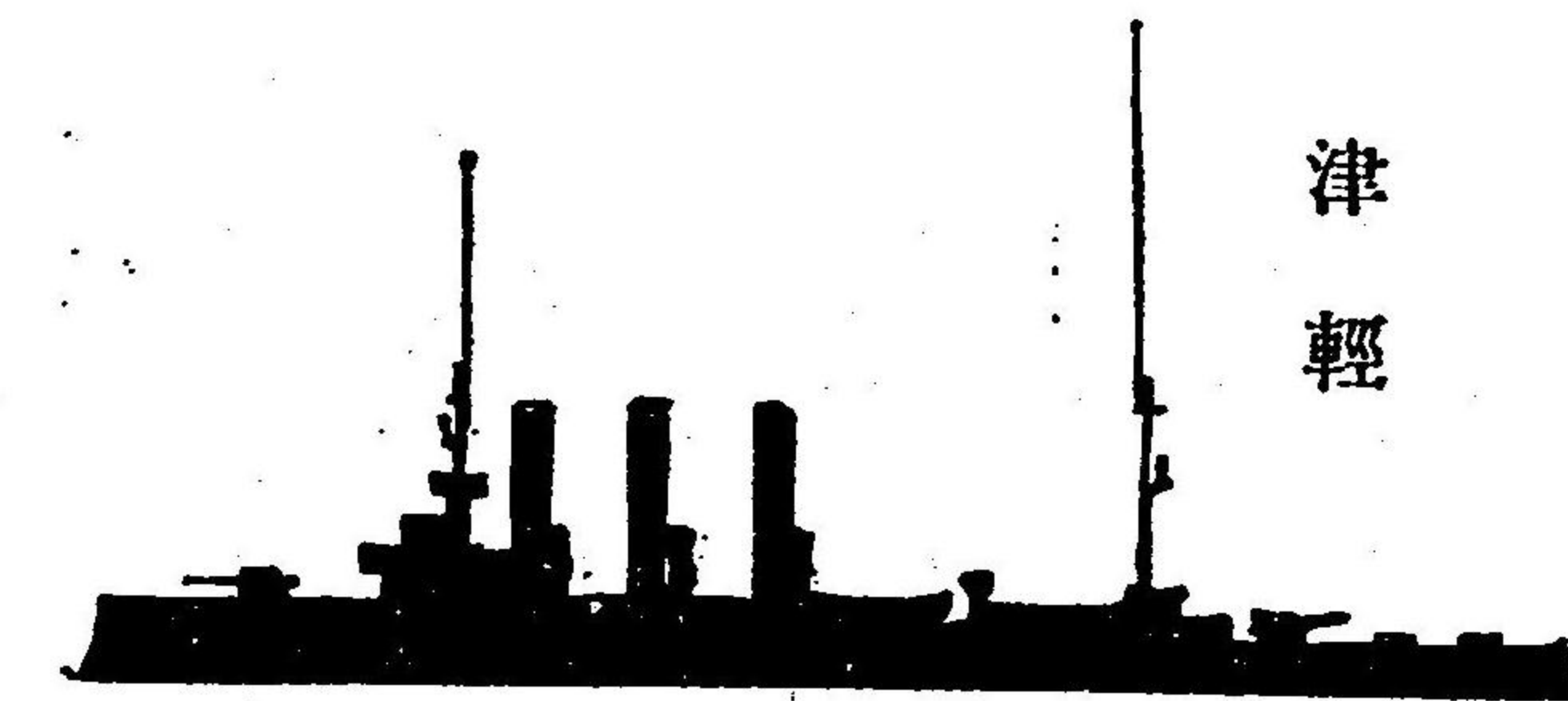


春日

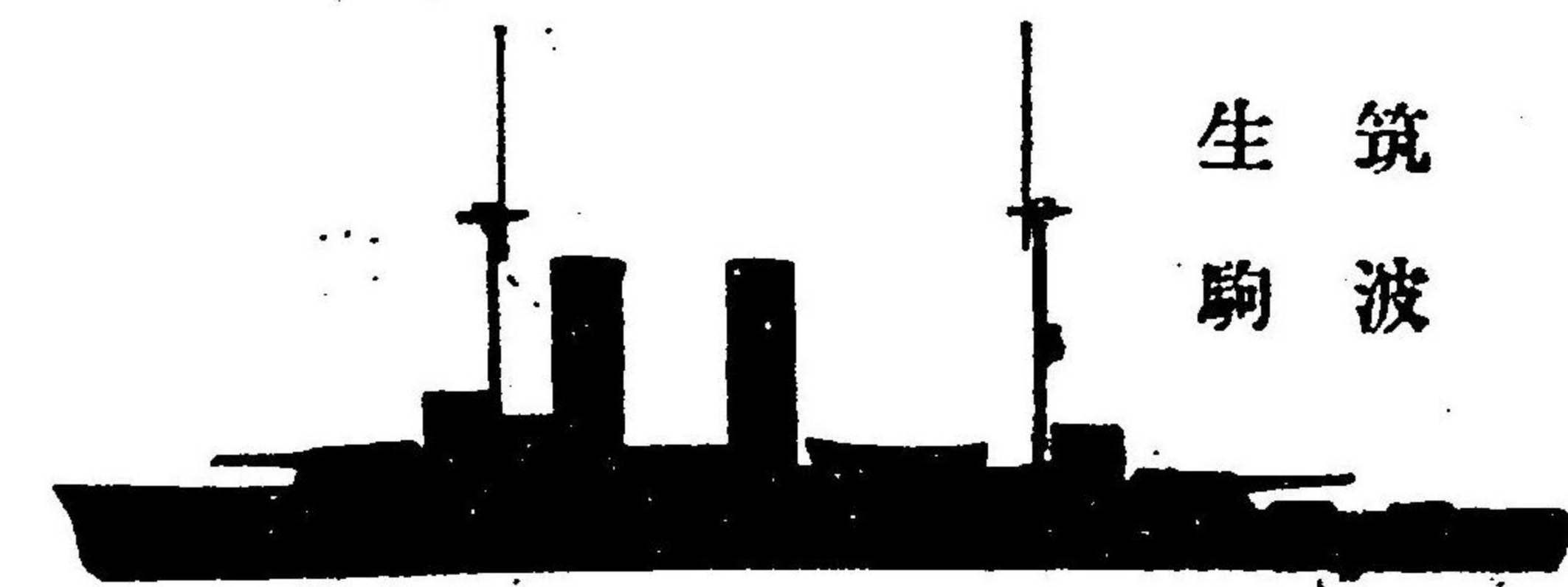




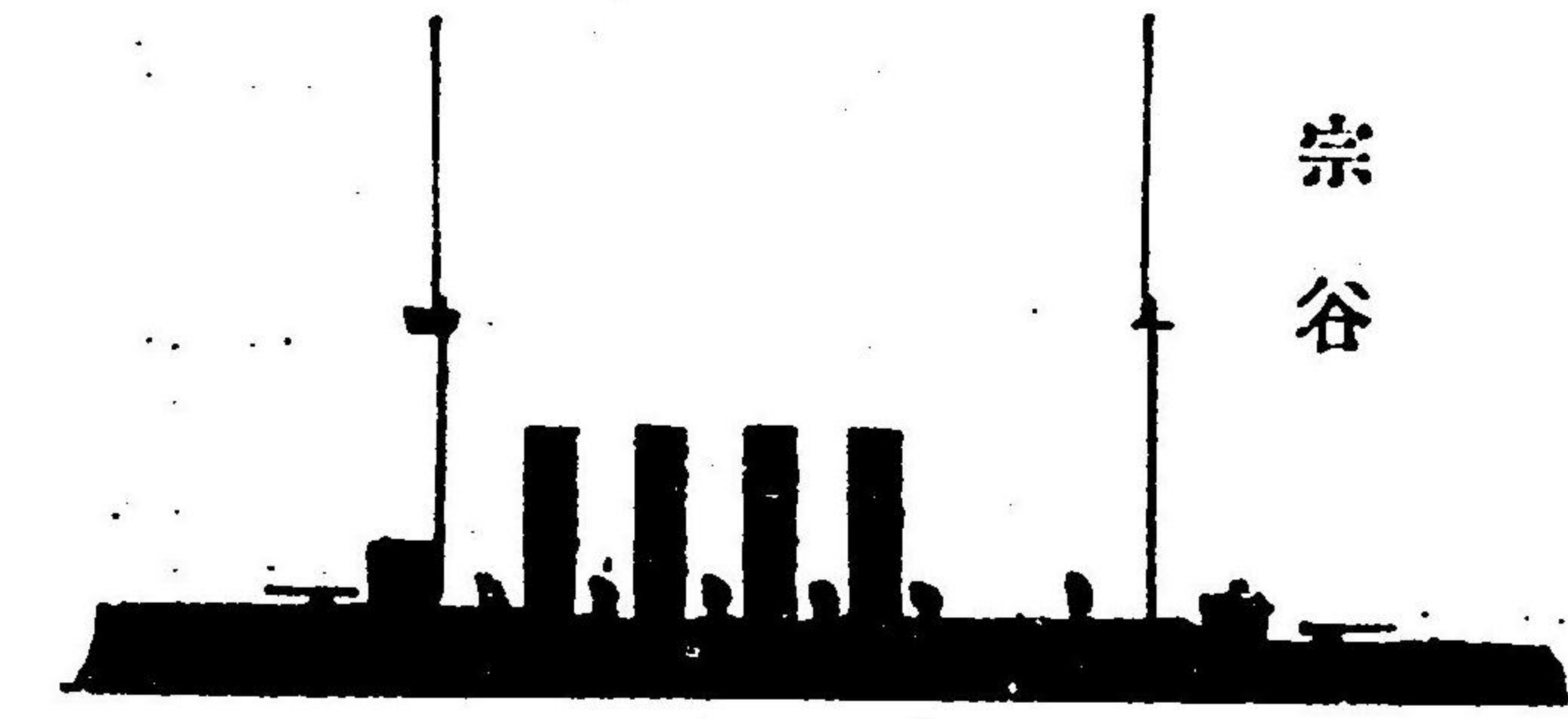
阿蘇



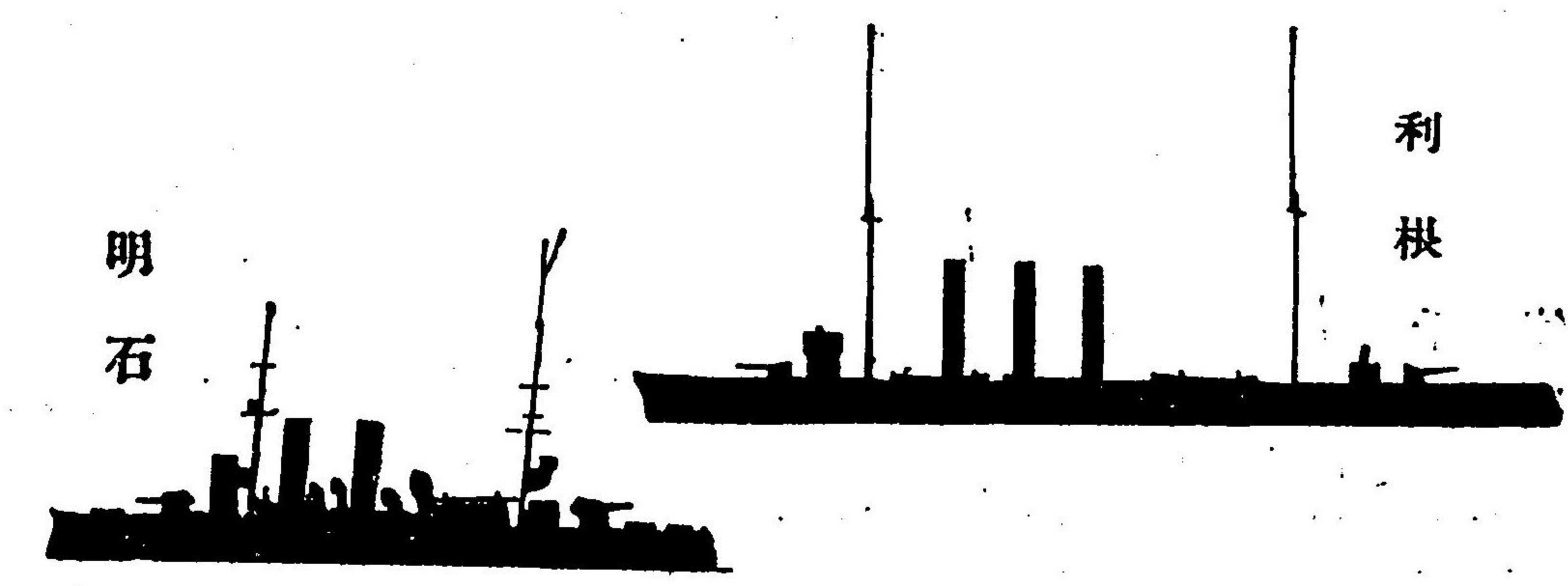
津輕



筑波
生駒



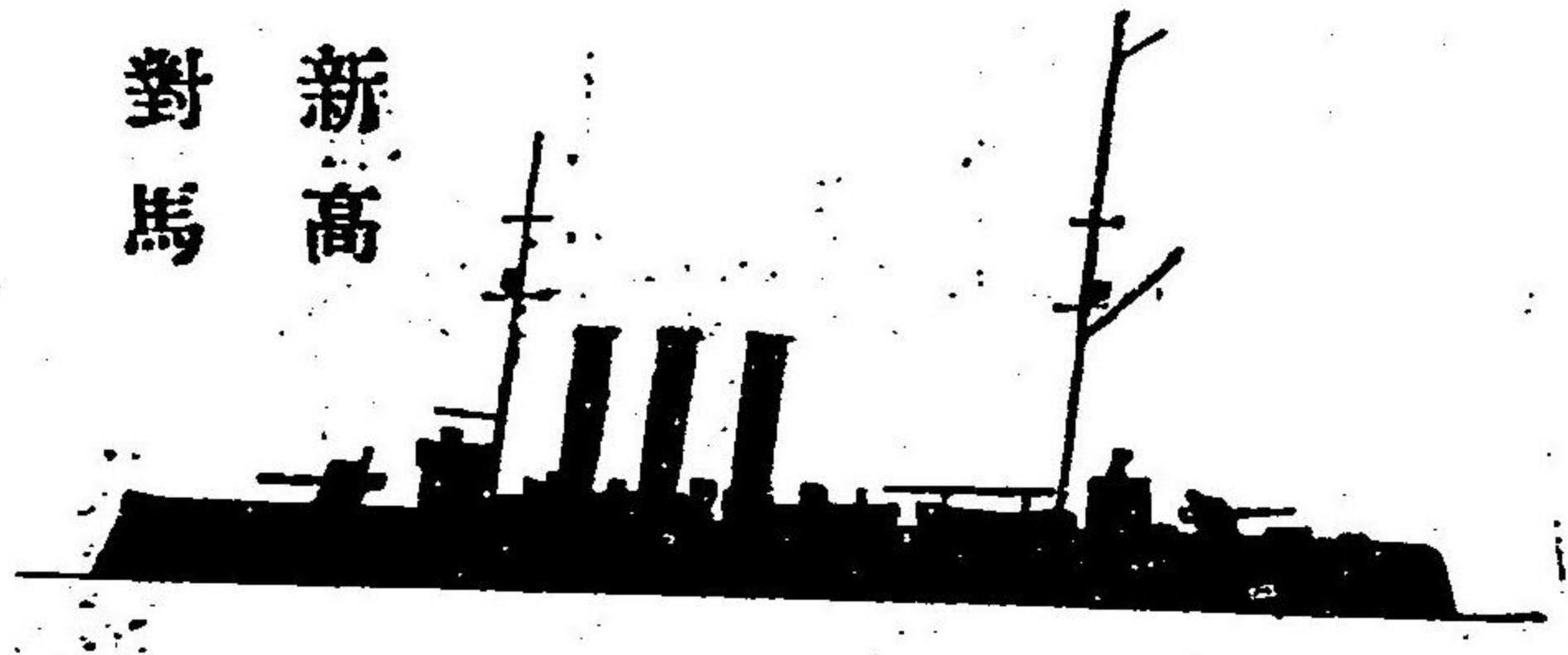
宗谷



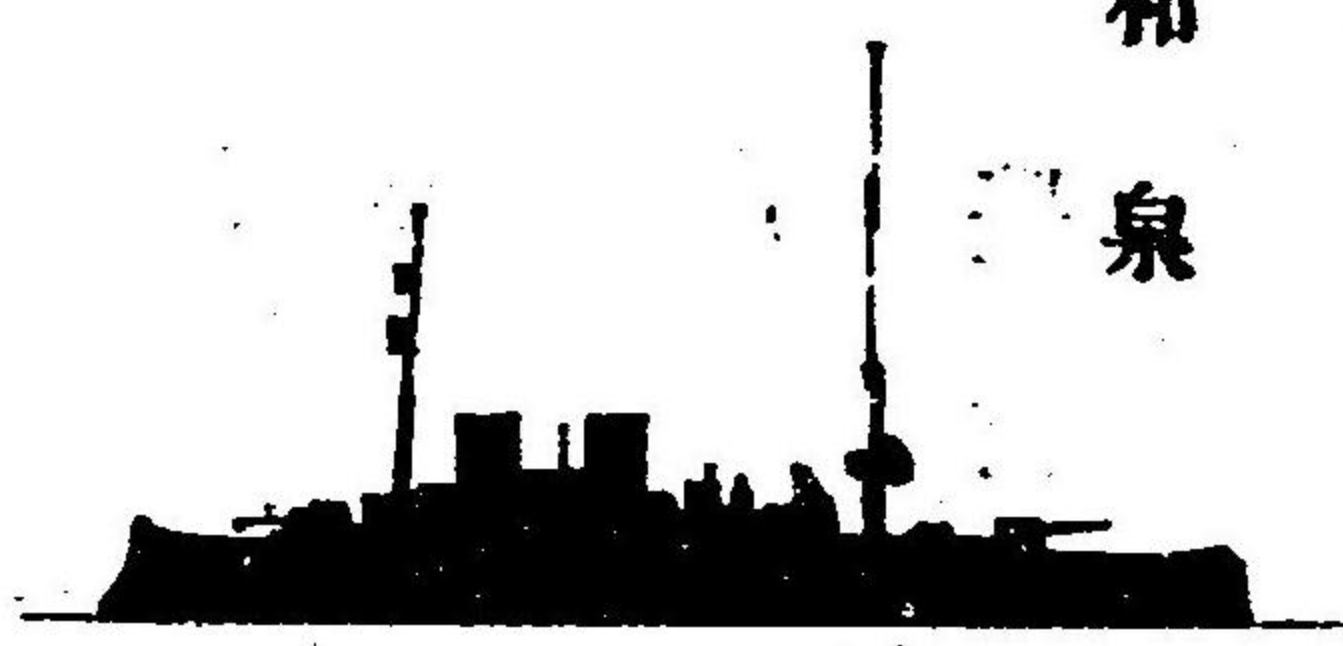
明石

利根

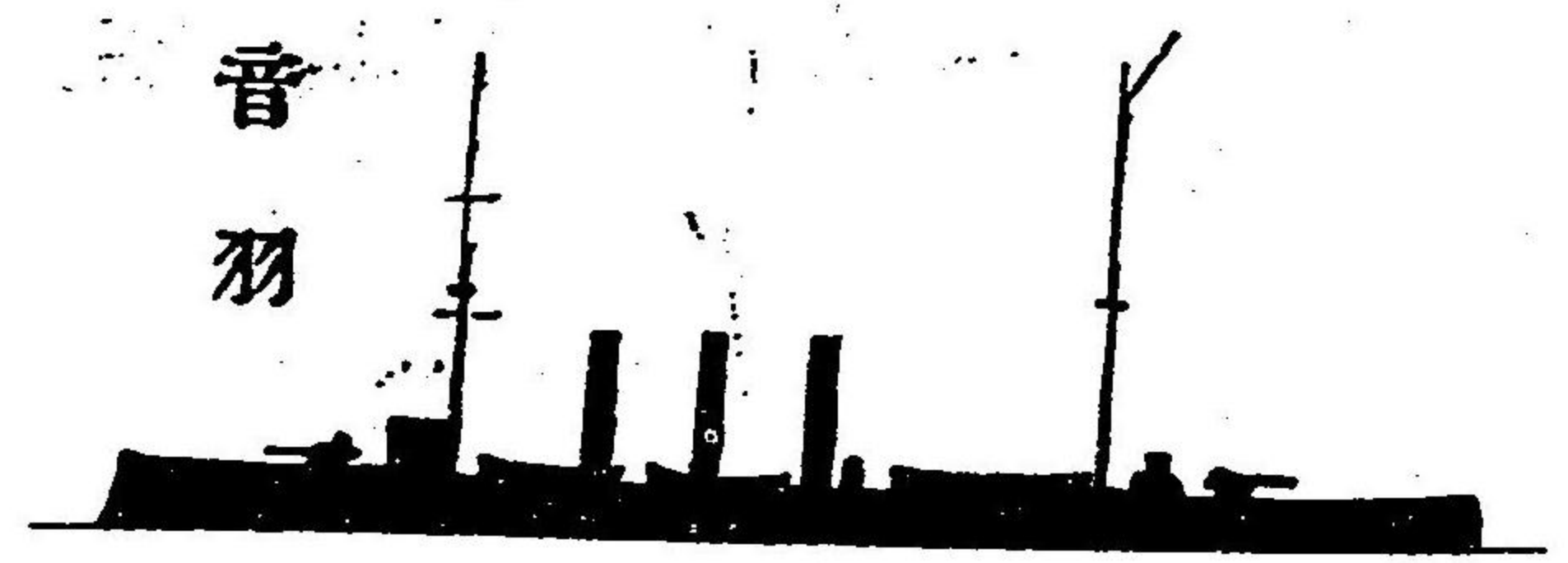
新高
對馬



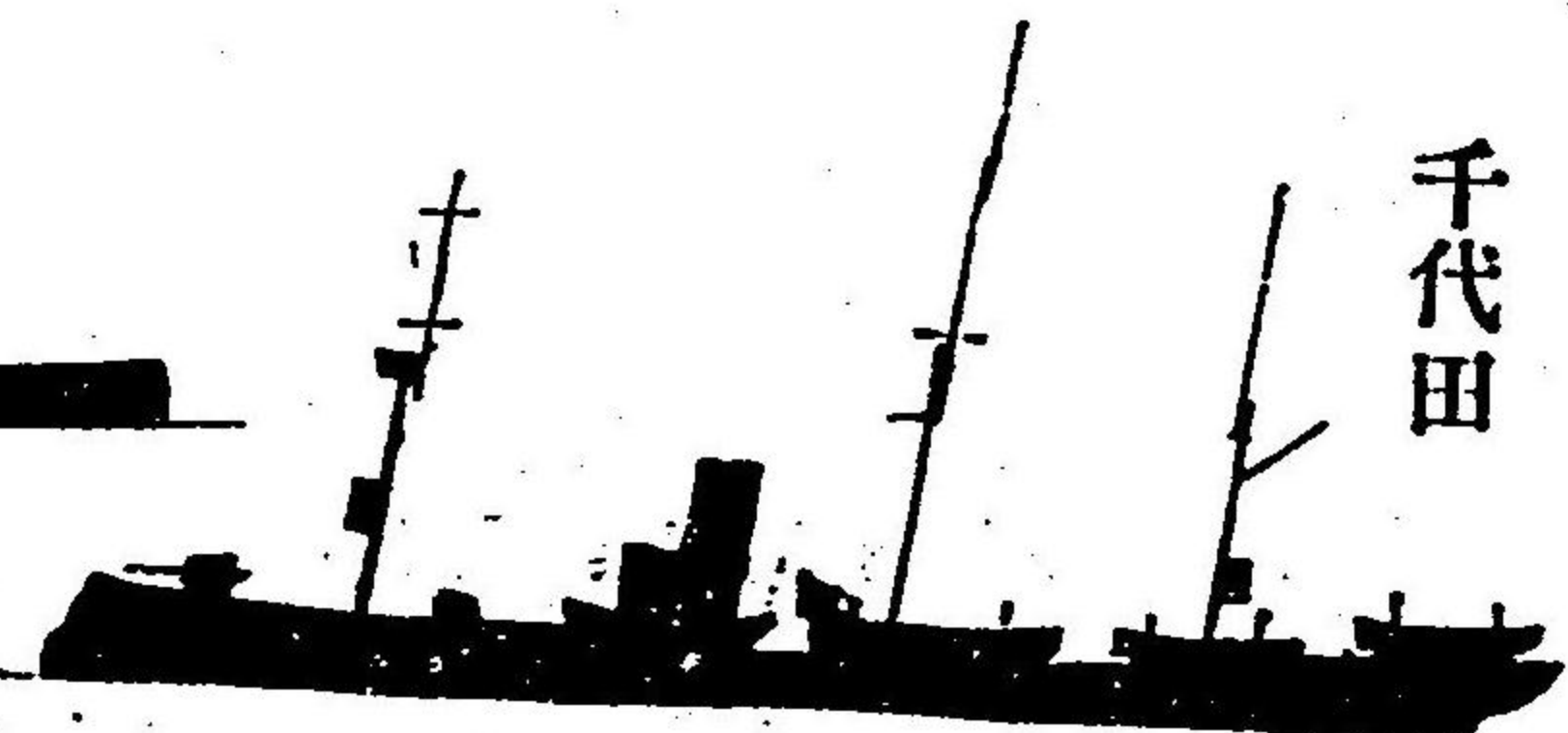
和泉



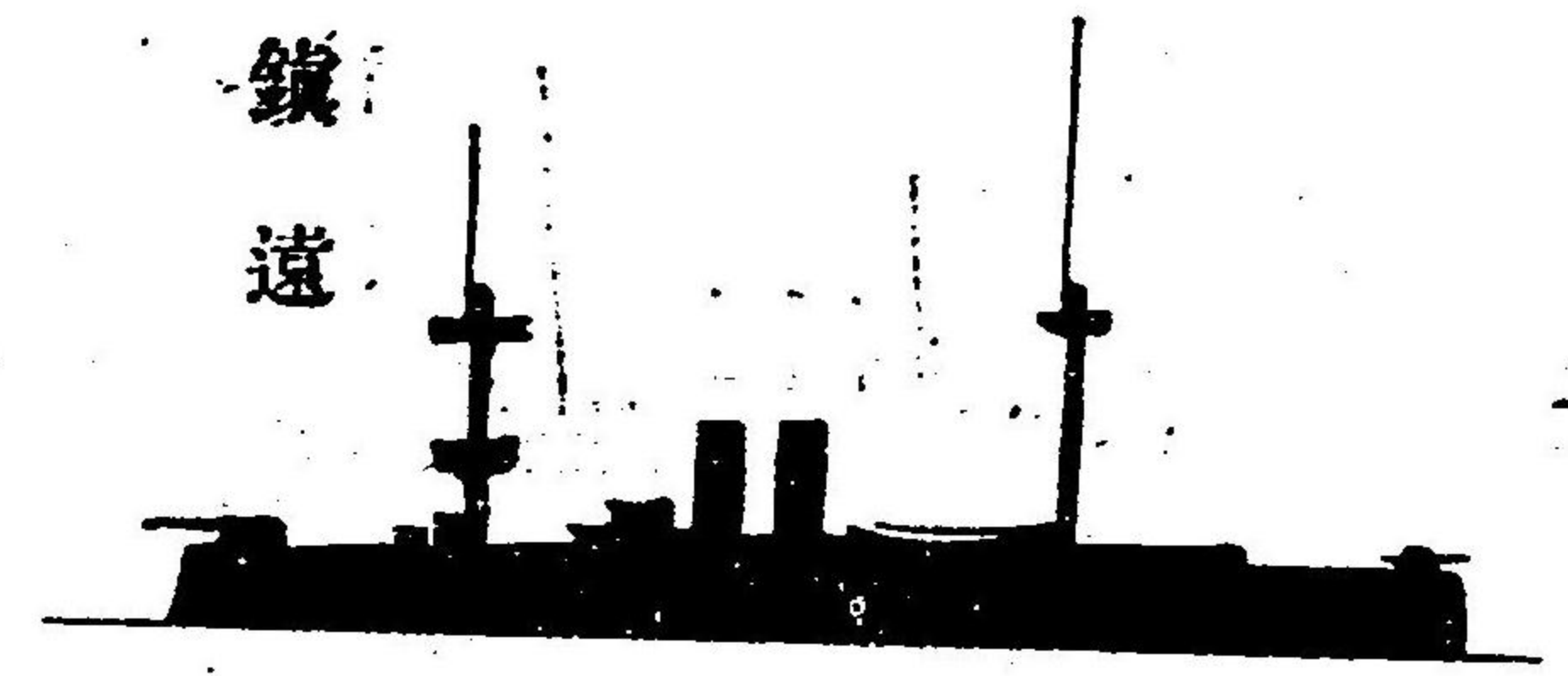
音羽



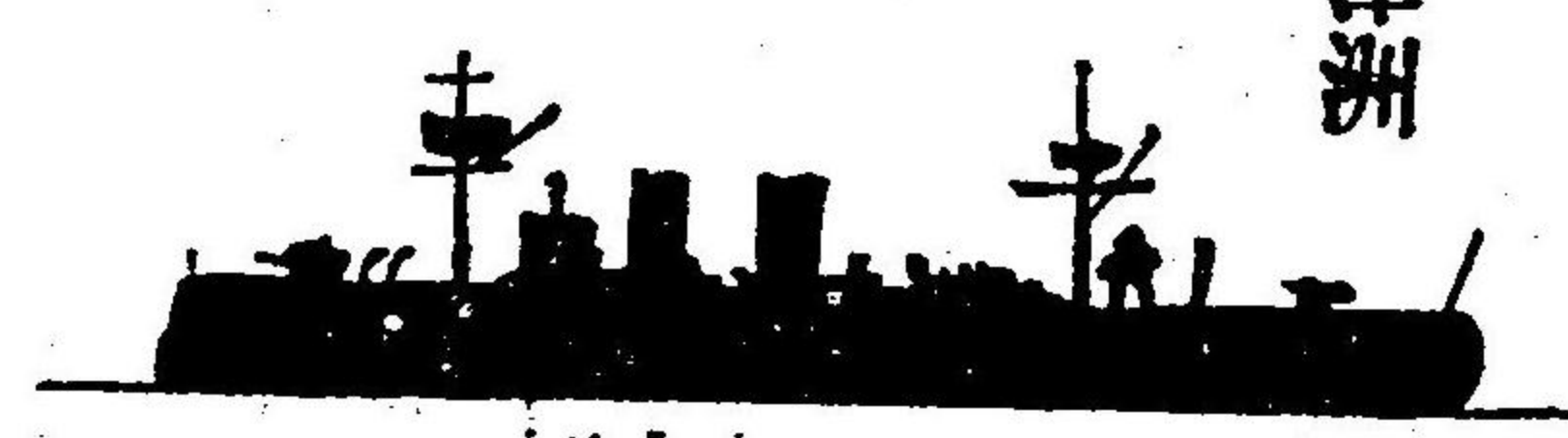
千代田



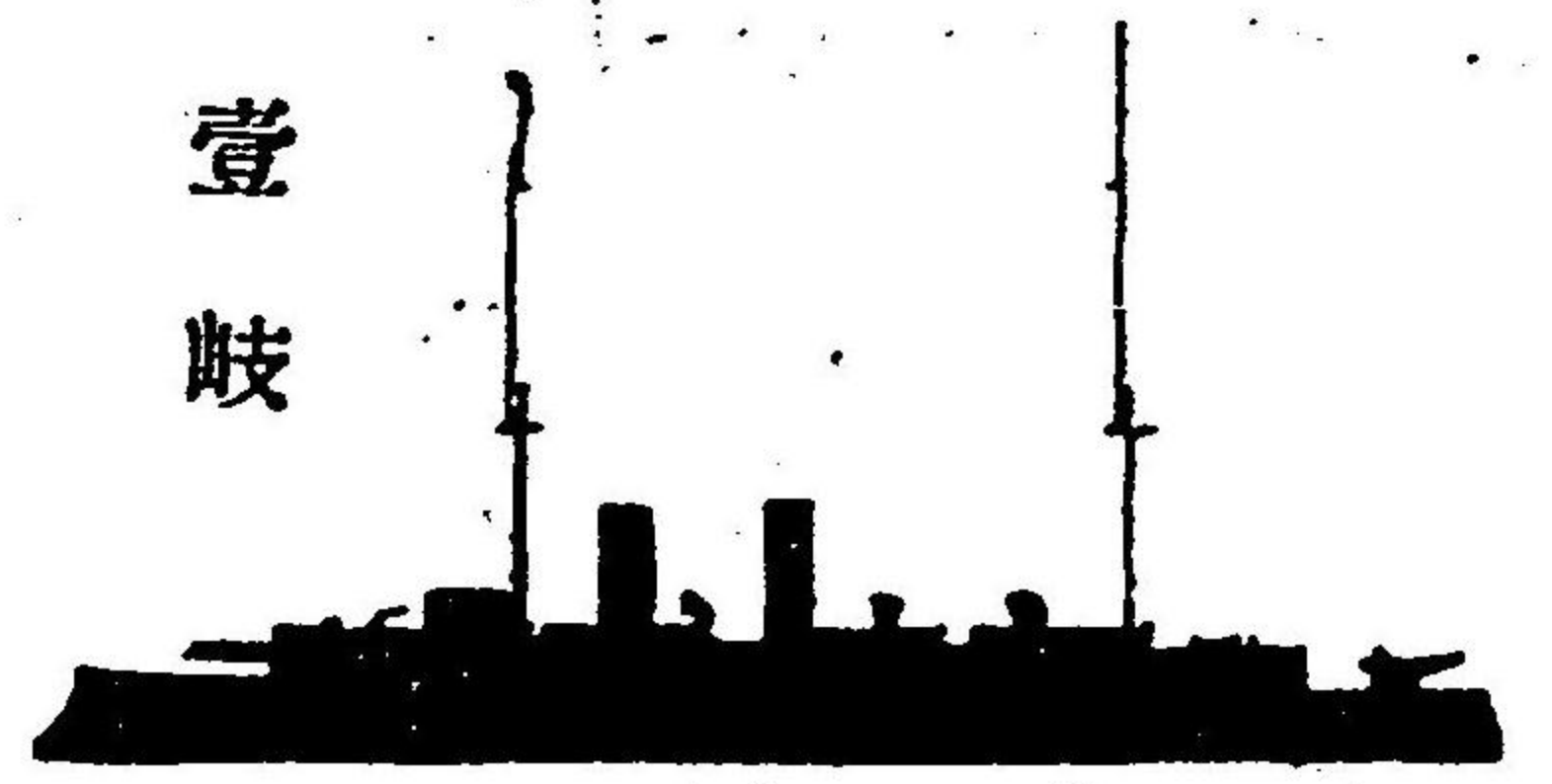
鎮遠



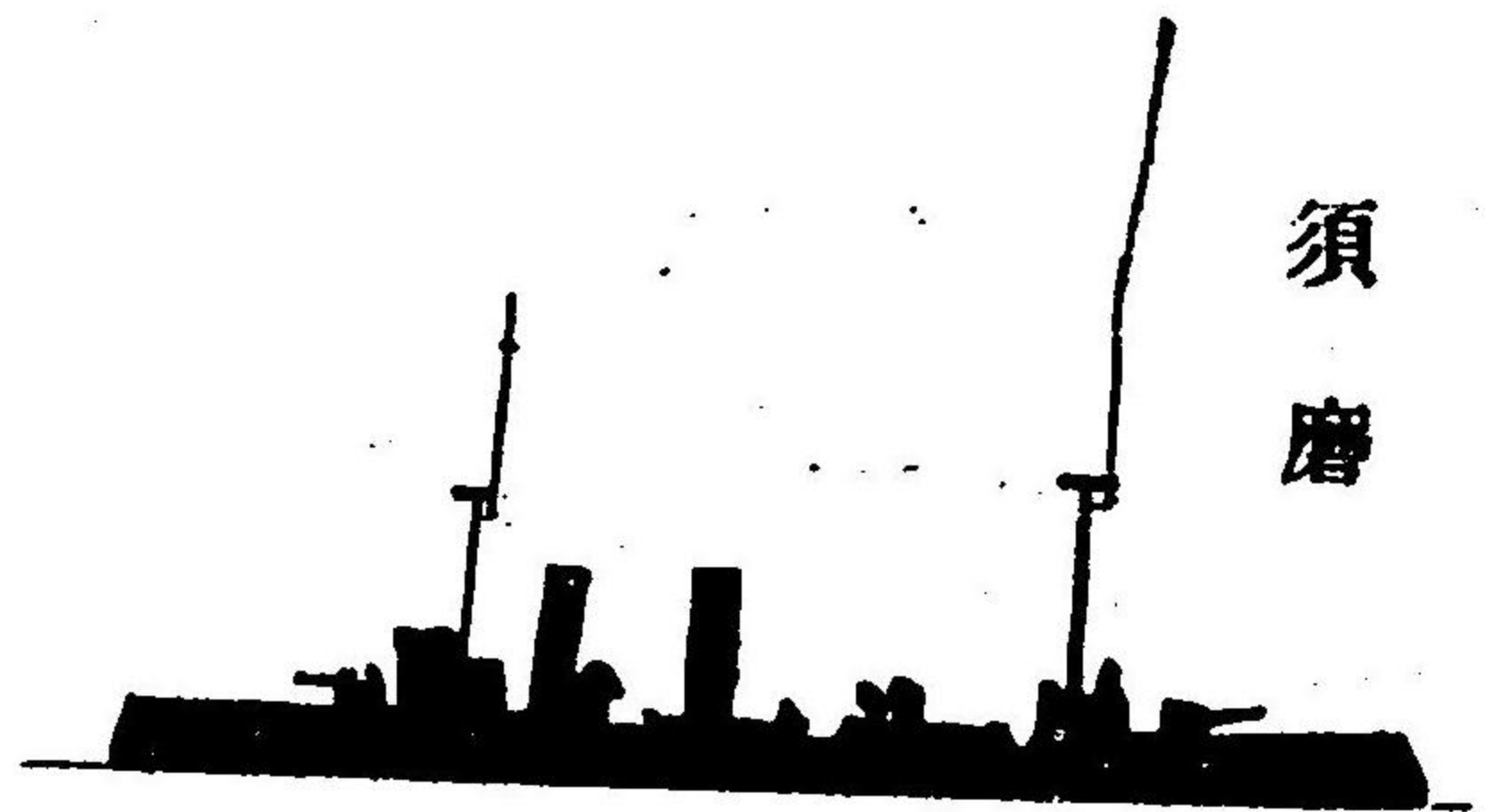
秋津洲



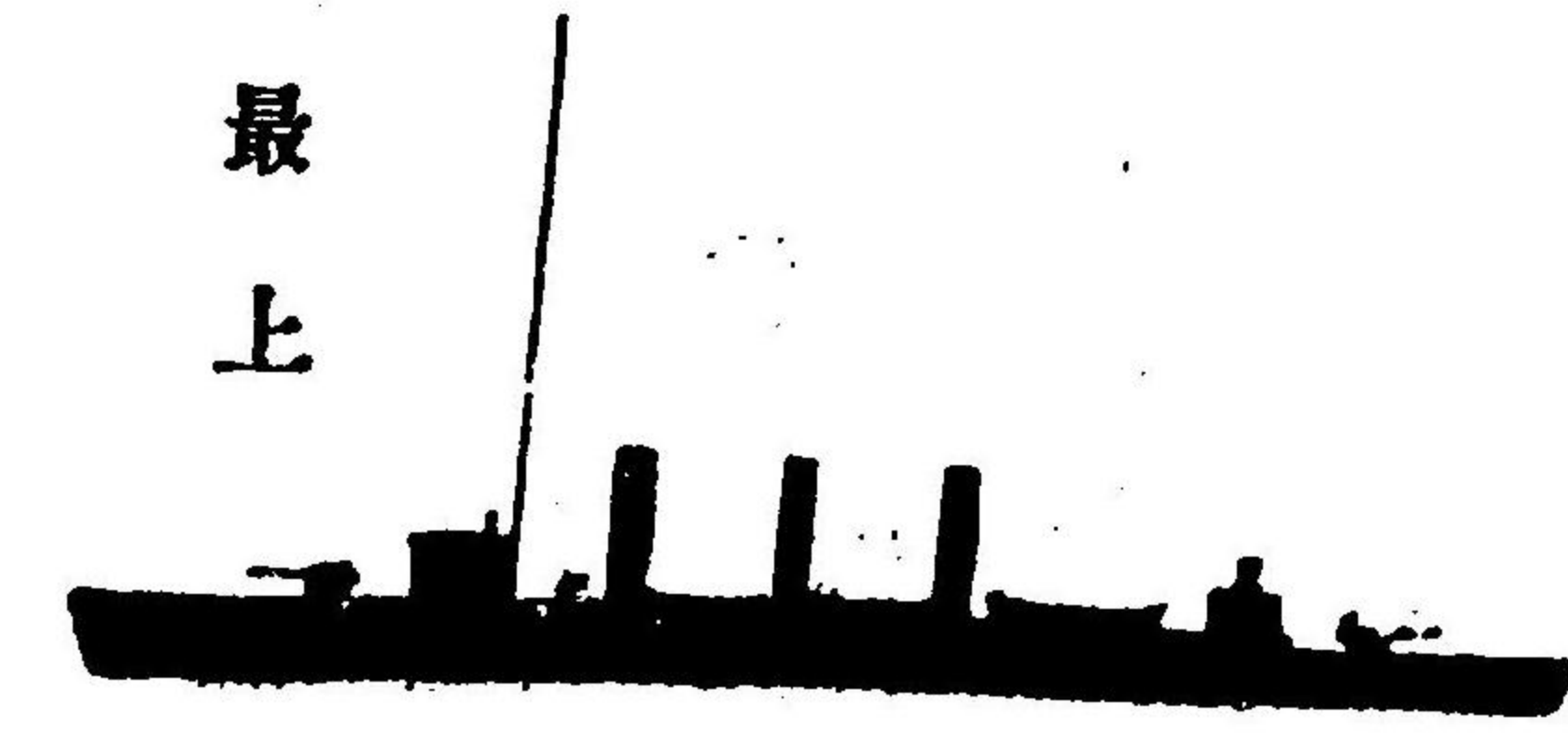
壹岐



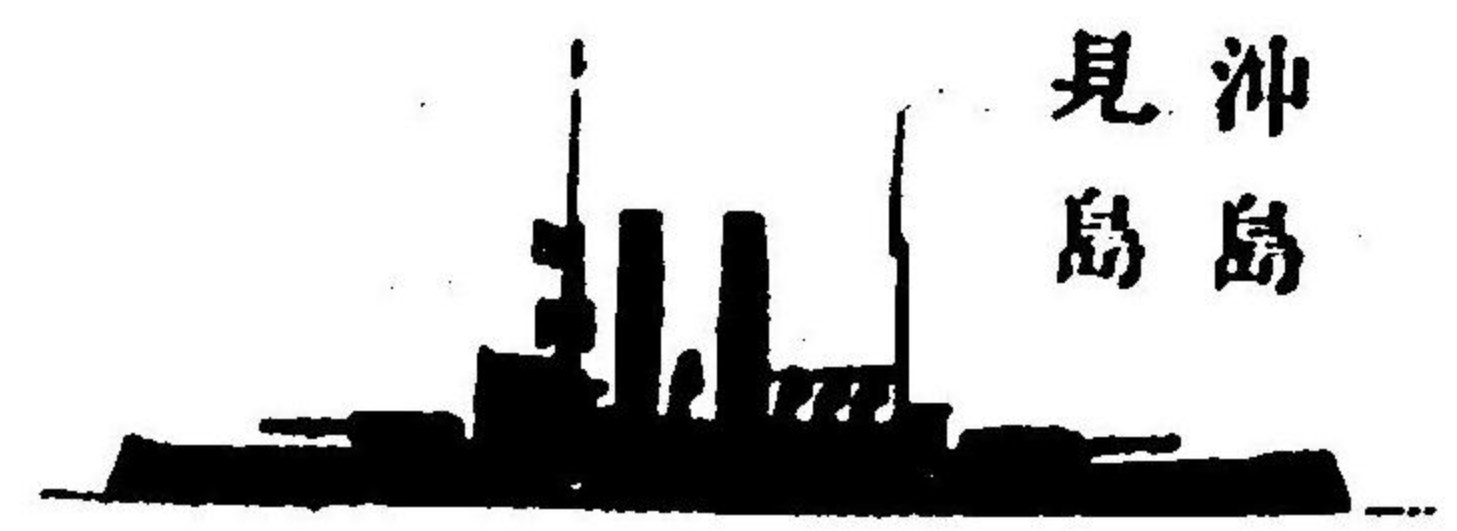
須磨

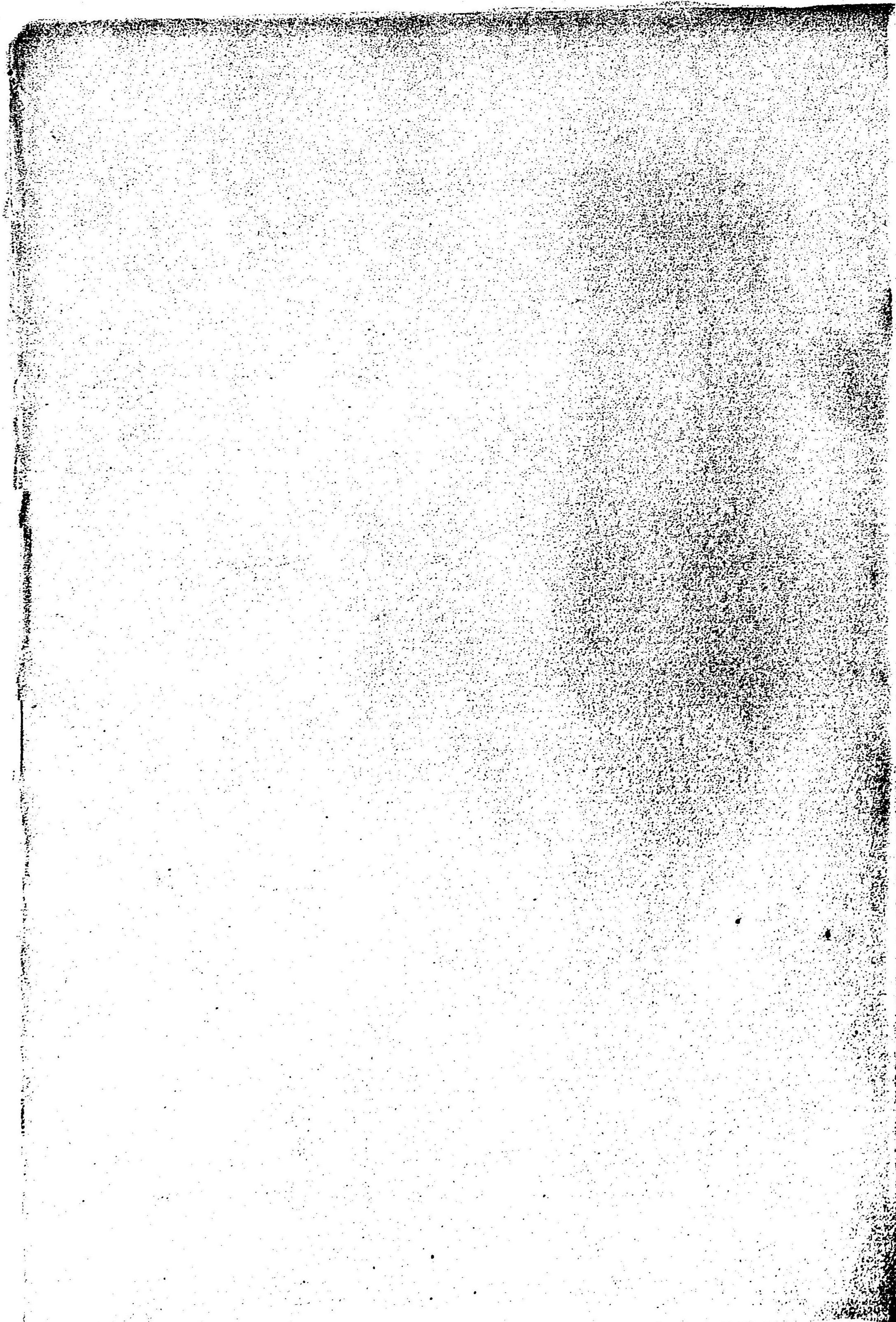


最上

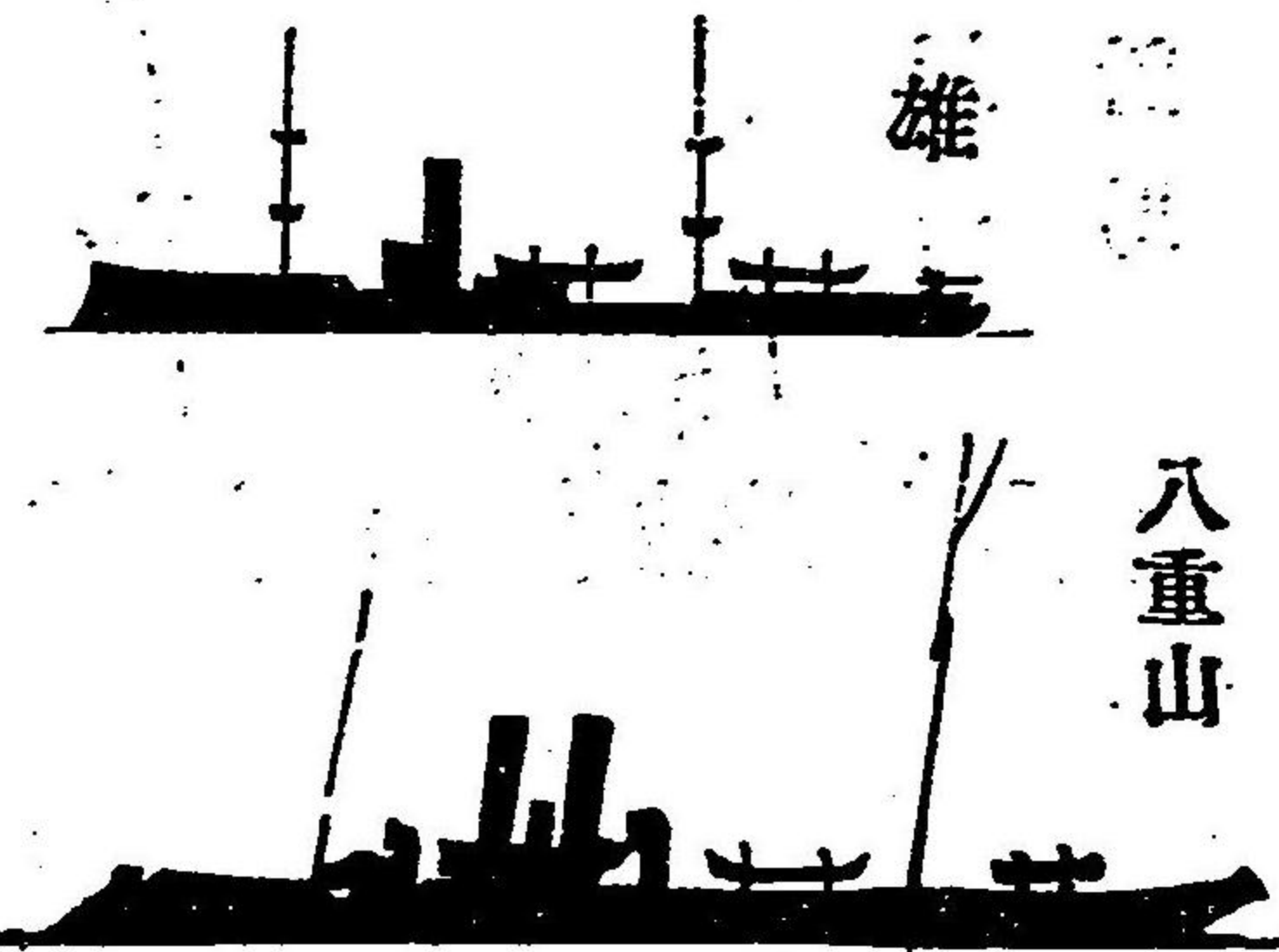


見沖島



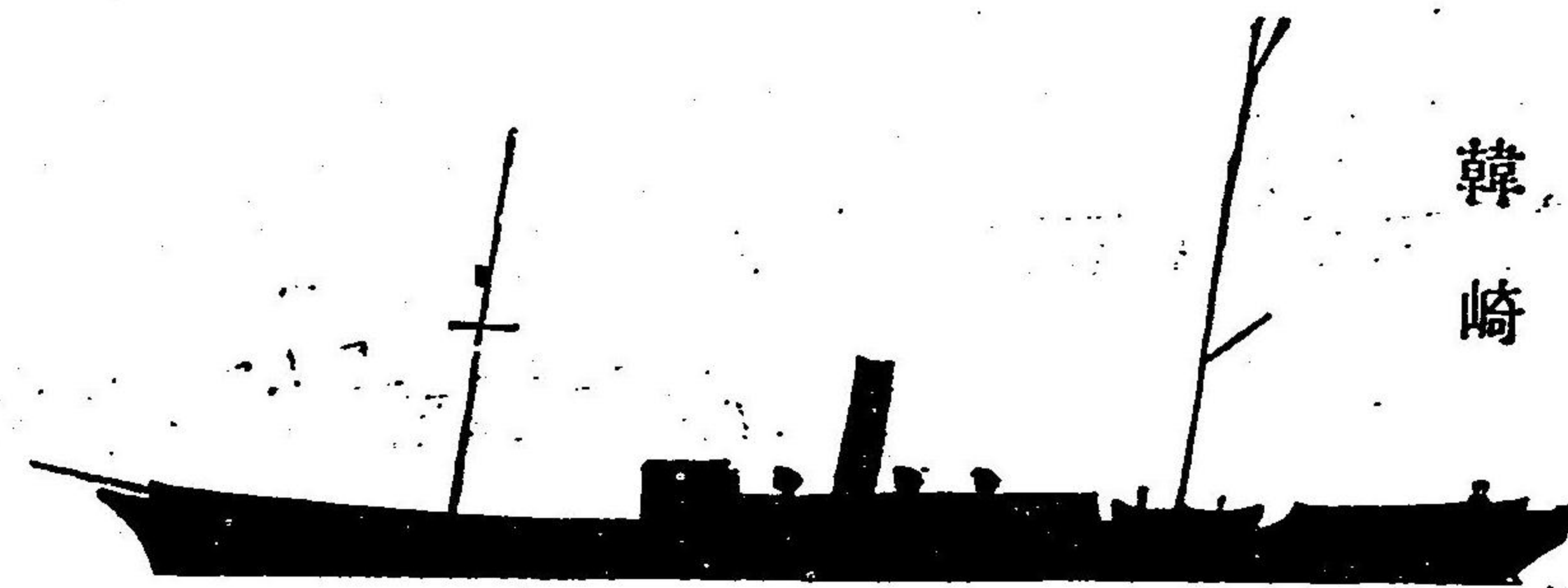


豊橋



高雄

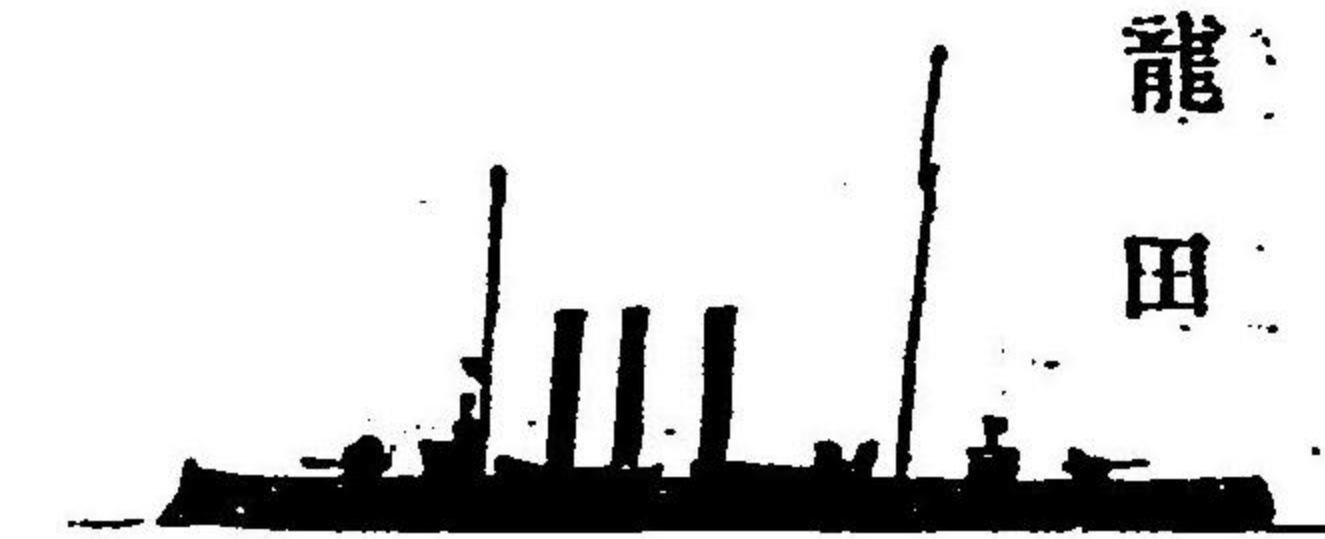
八重山



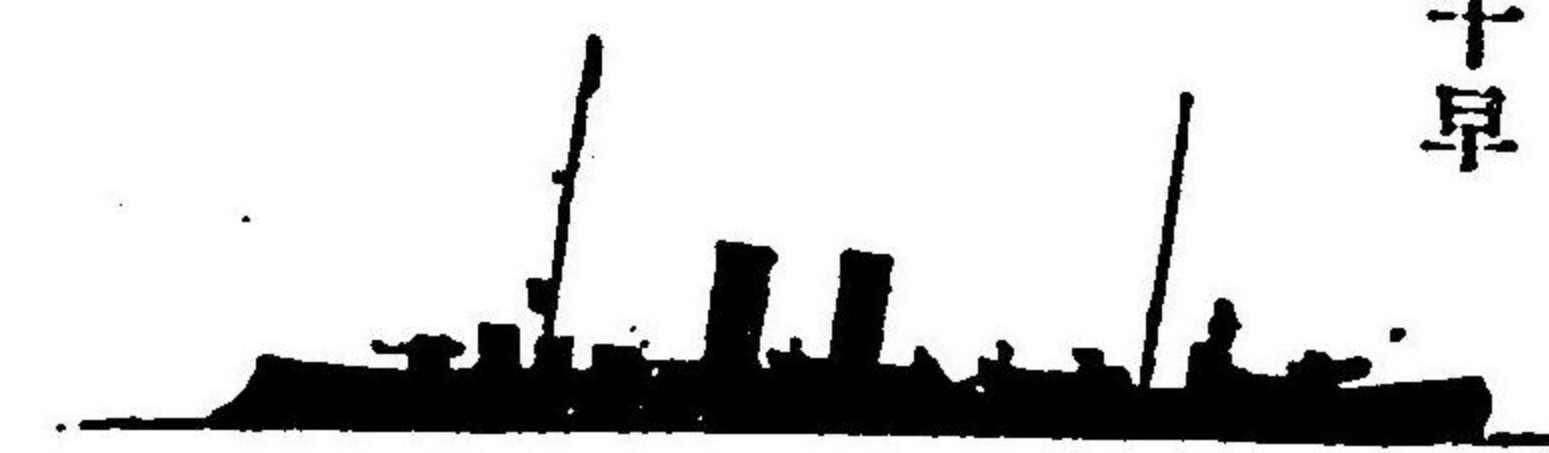
韓崎



艦逐驅



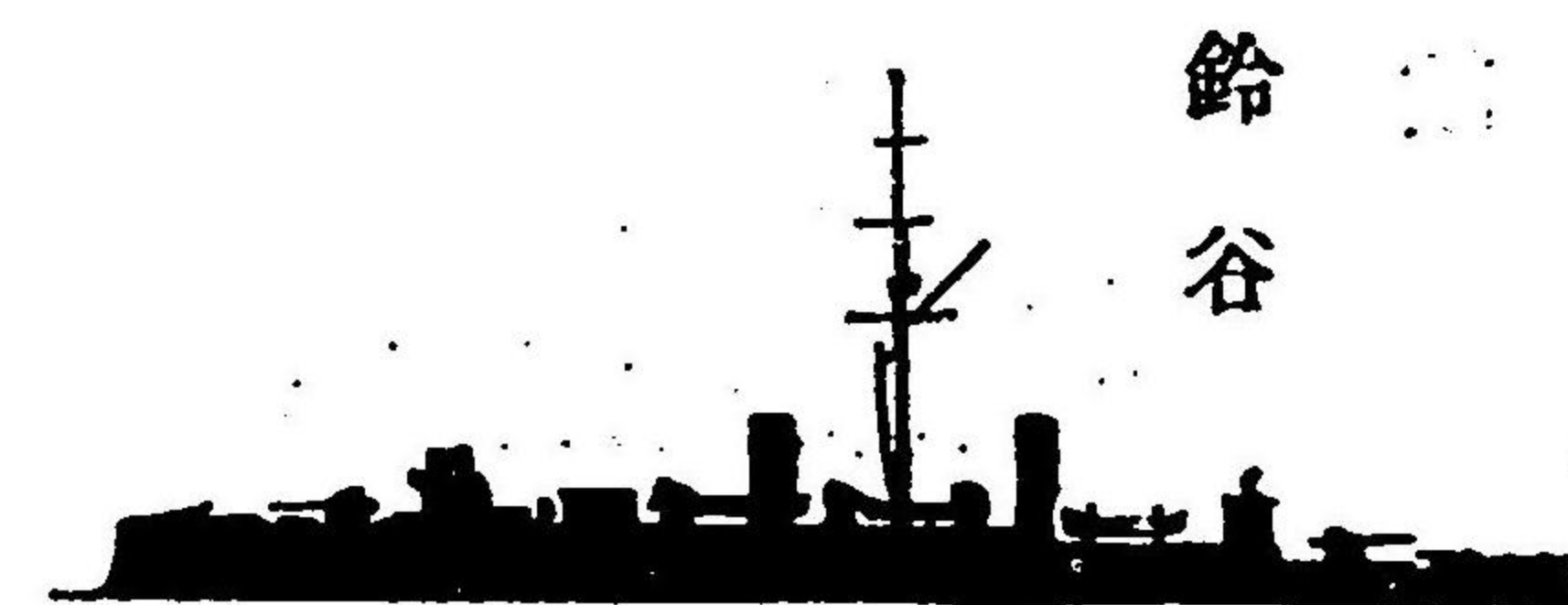
龍田



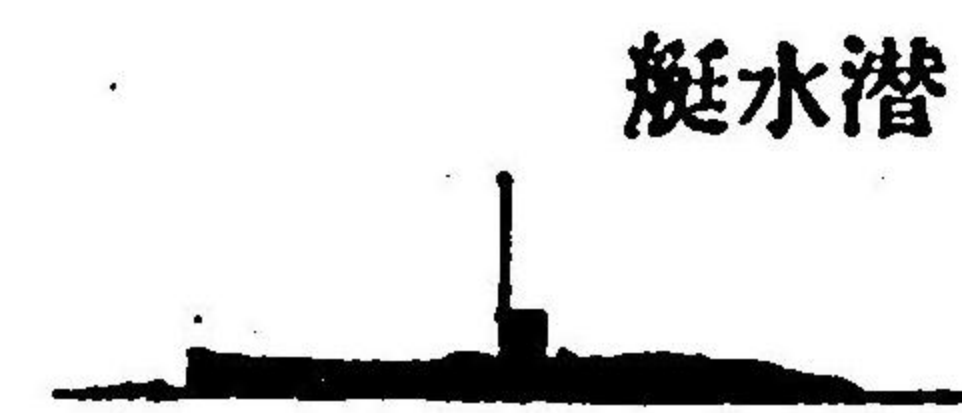
千早



艇雷水



鈴谷



艇水潜



淀

軍艦兵裝及裝甲圖例

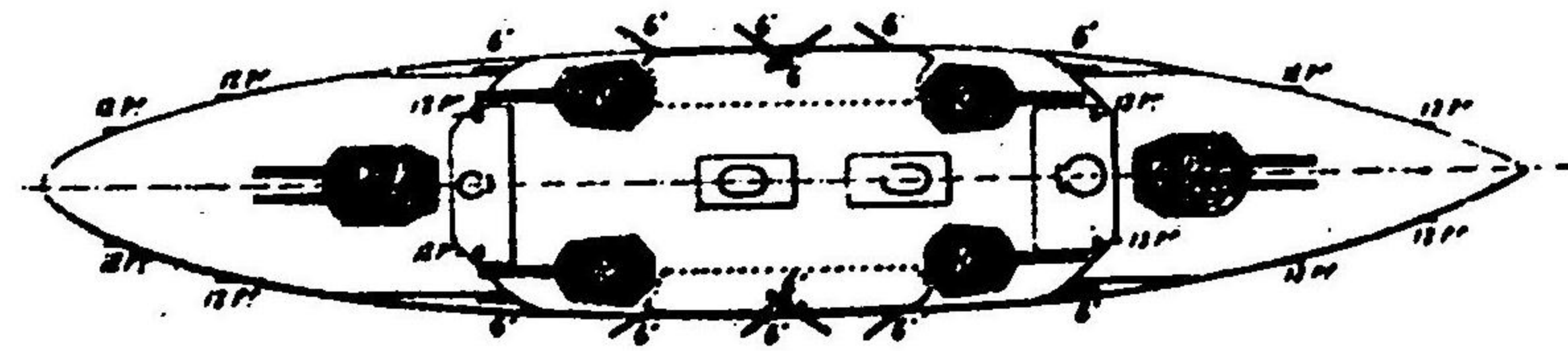
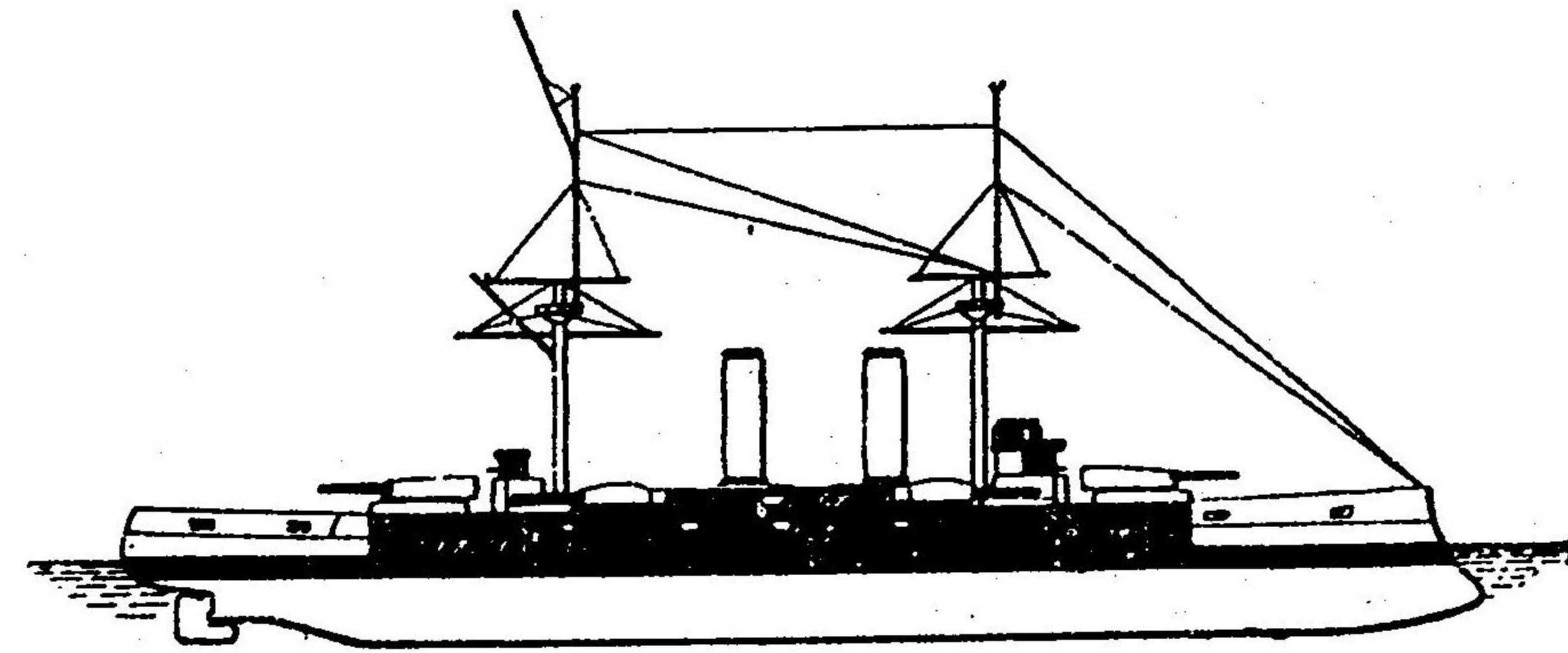
戰艦、香取 鹿島 明治三十
八年進水

排水量 香取 一萬五千九百五十噸
鹿島 一萬六千四百噸

裝	備
甲	砲
水線部	十二吋砲
上部舷側	六吋砲
砲塔	十二吋砲
九吋	十二吋砲
六吋	四吋砲
九吋	十二吋砲
九吋	四吋砲
九吋	十二吋砲

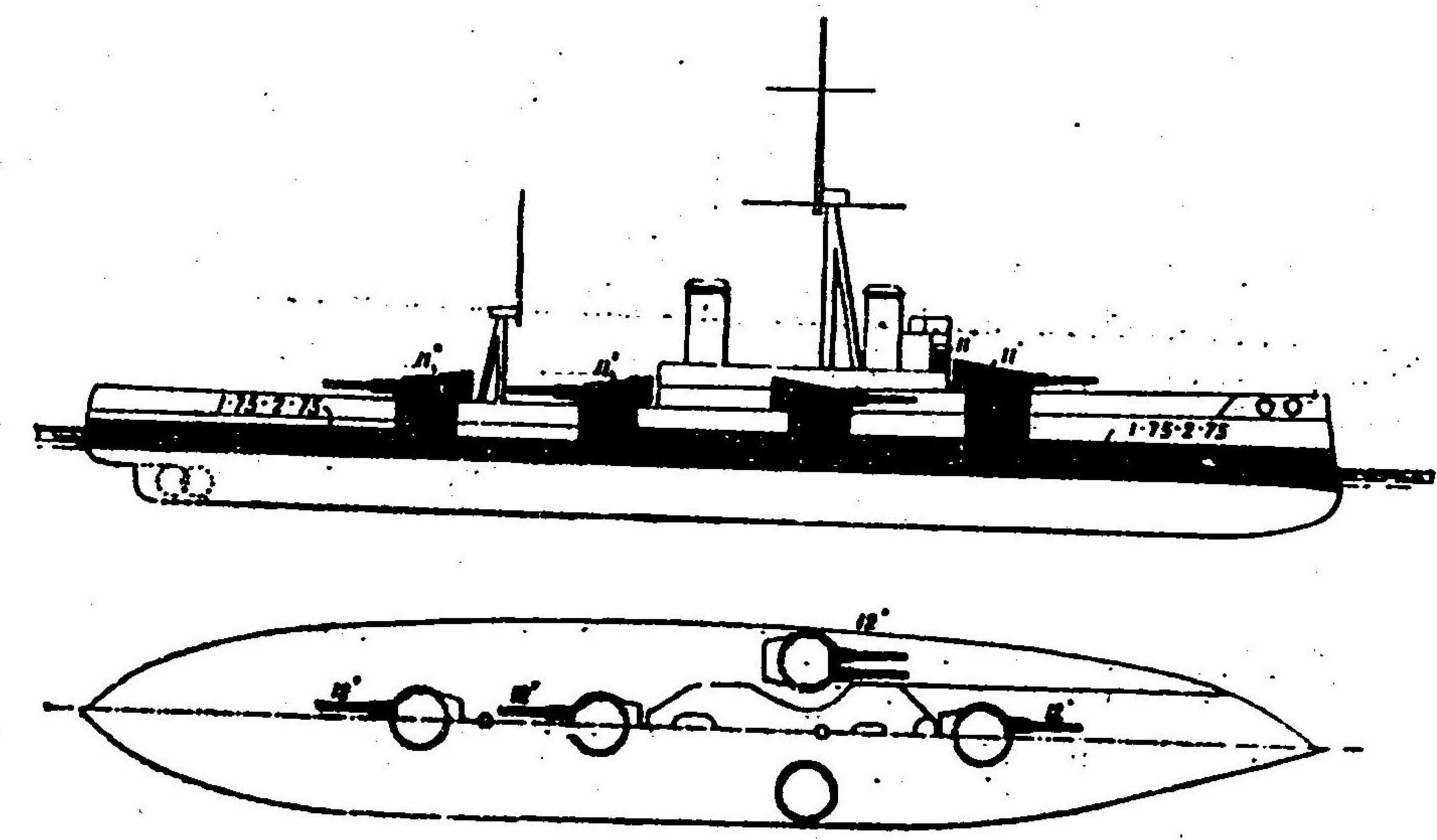
水雷發射管

五門



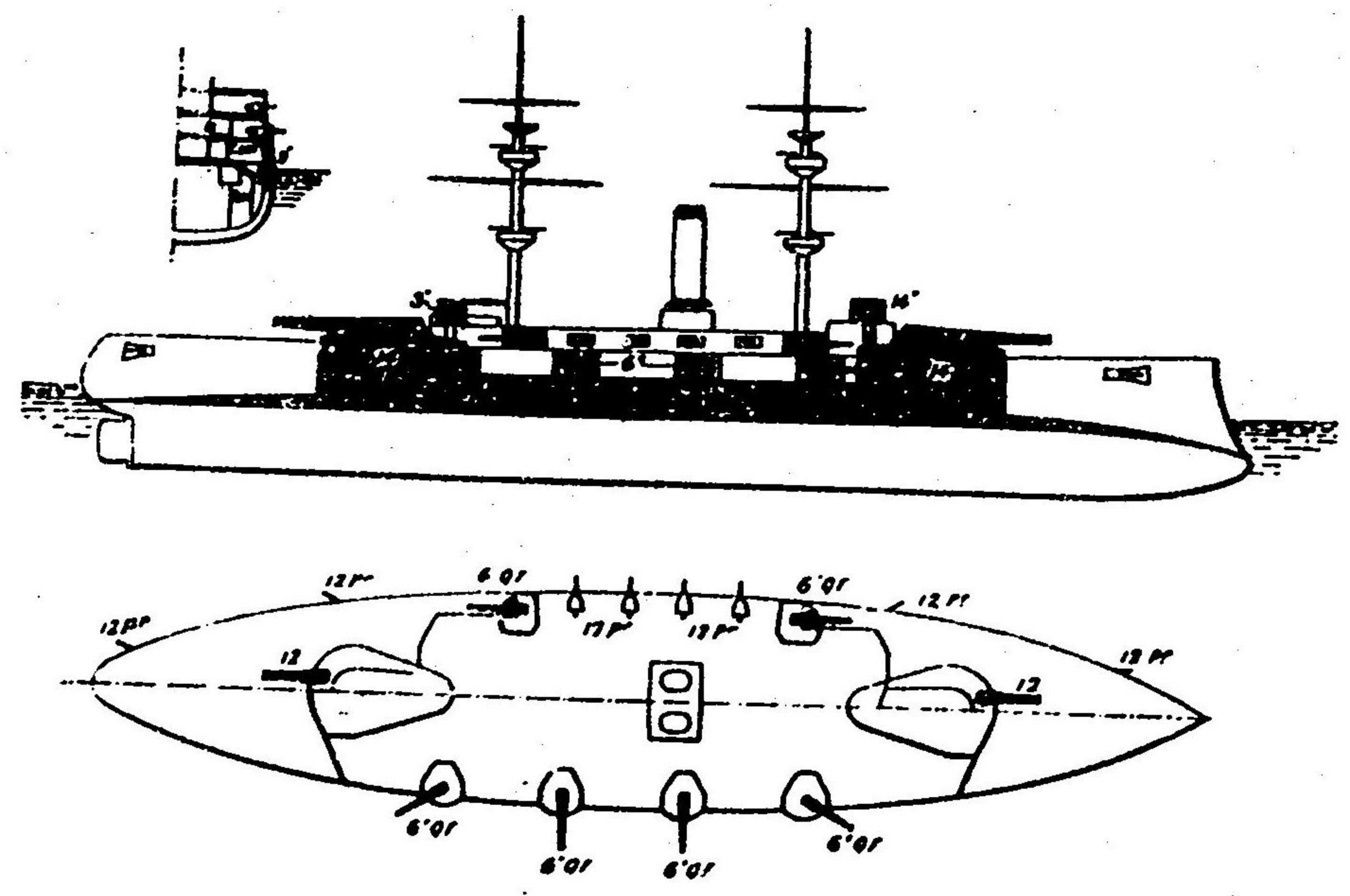
英國戰艦ドレッドノート
 一萬七千九百噸
 明治三十
 九年進水

水雷發射管	裝	備	砲
		十二吋砲 十二所砲	十門 二十七門
五門	甲	砲	砲
		水線部 塔	十一吋 十六吋



英國戰艦マゼスチック型
 一萬四千九百噸
 明治二十
 八年進水

水雷發射管	裝	備	砲
		十二吋砲 六吋砲 十二所砲	四門 十二門 十八門
五門	甲	砲	砲
		水線部 上部舷側 塔	九吋 九吋 十四吋



英國裝甲巡洋艦

インヴェンシブル型 明治四十年進水

一萬七千二百五十噸

備

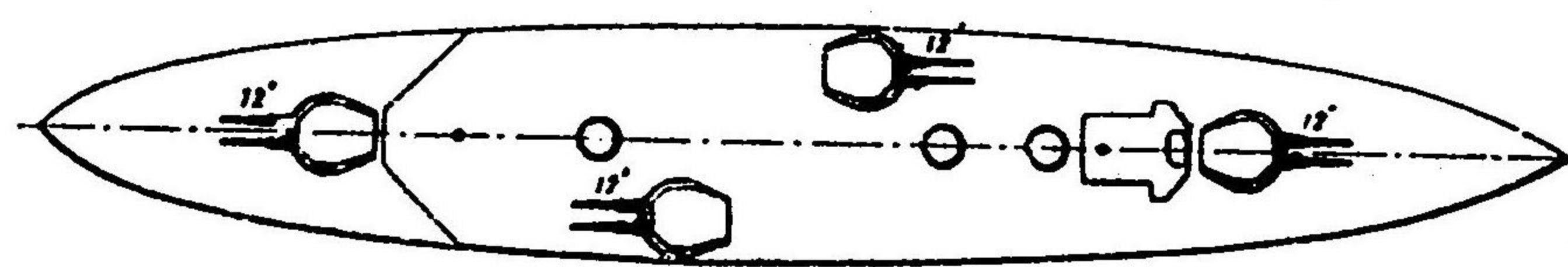
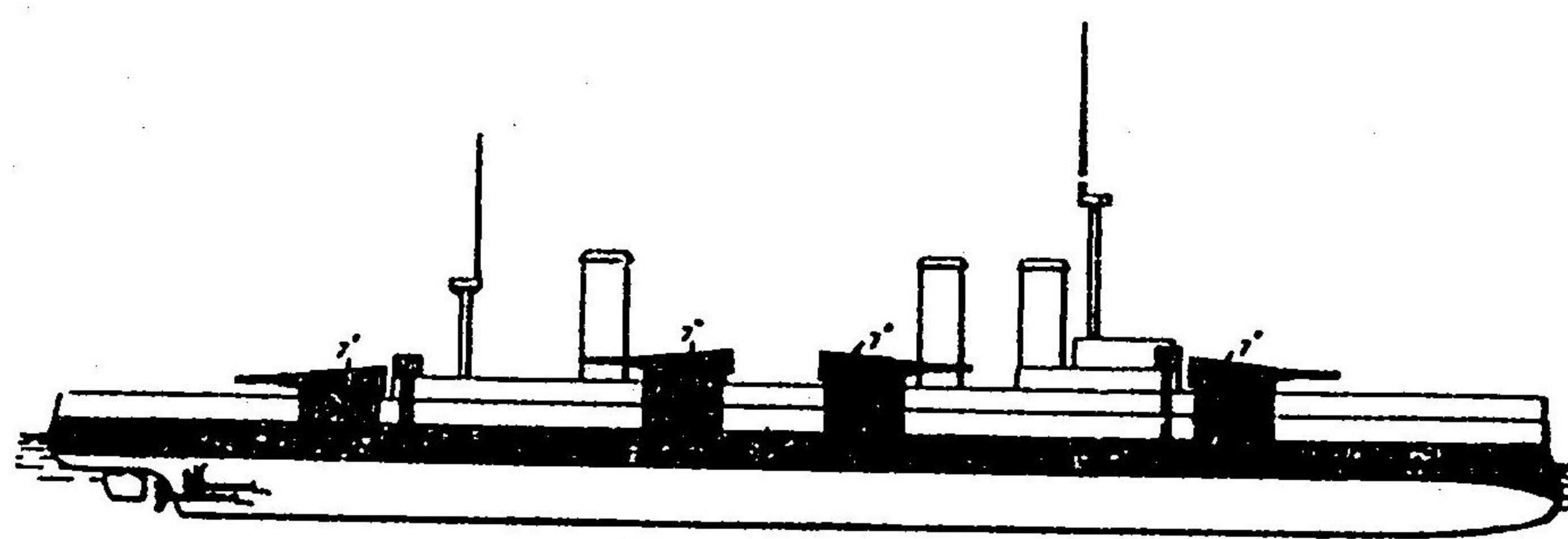
砲 十二吋砲 八門
四吋砲 十六門

裝

甲 水線部 七吋
砲塔 八吋

水雷發射管

三門



裝甲巡洋艦 淺間 明治三十一年進水

九千七百噸

備

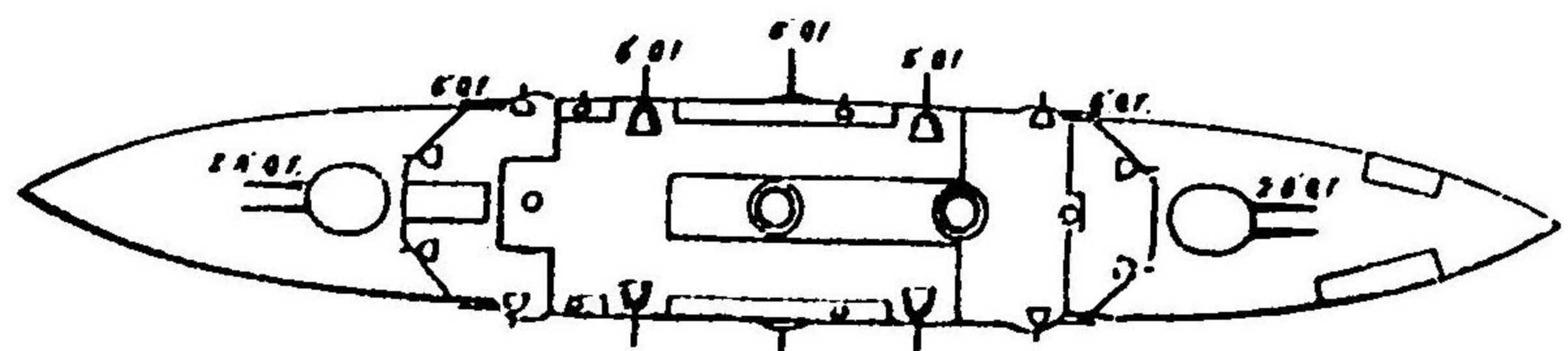
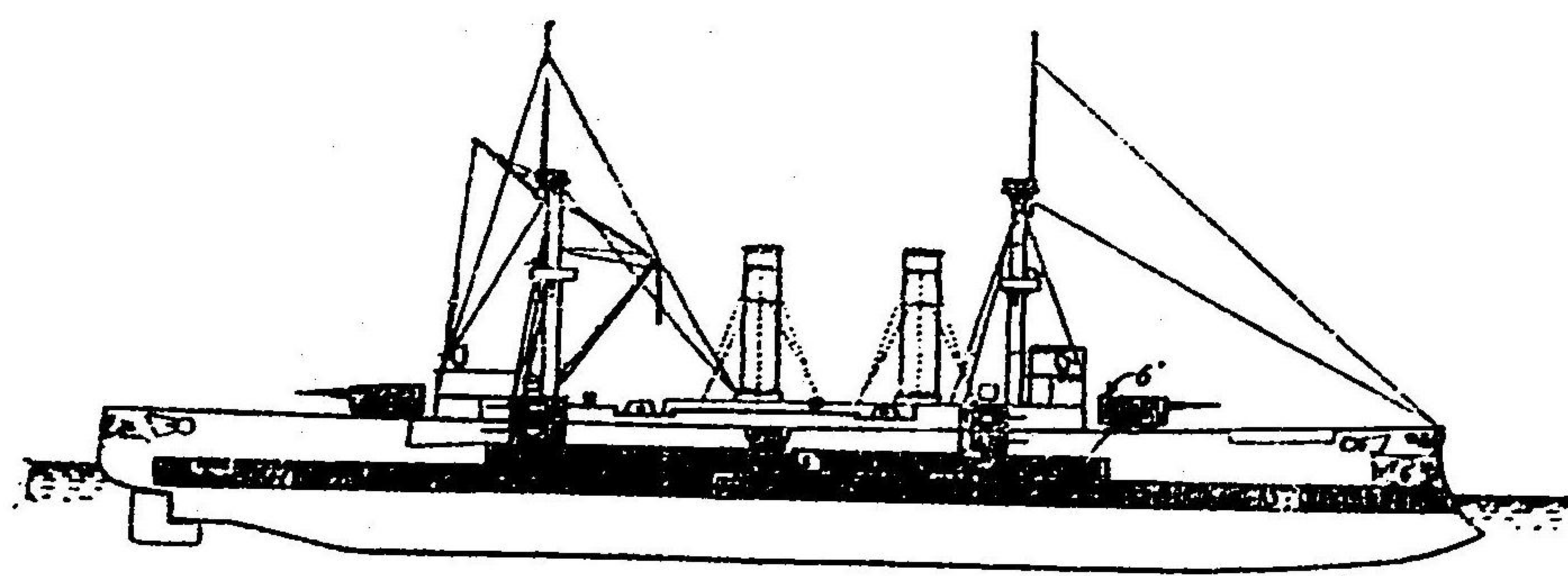
砲 八吋砲 四門
六吋砲 十四門
十二吋砲 十二門

裝

甲 水線部 七吋
砲塔 六吋

水雷發射管

五門

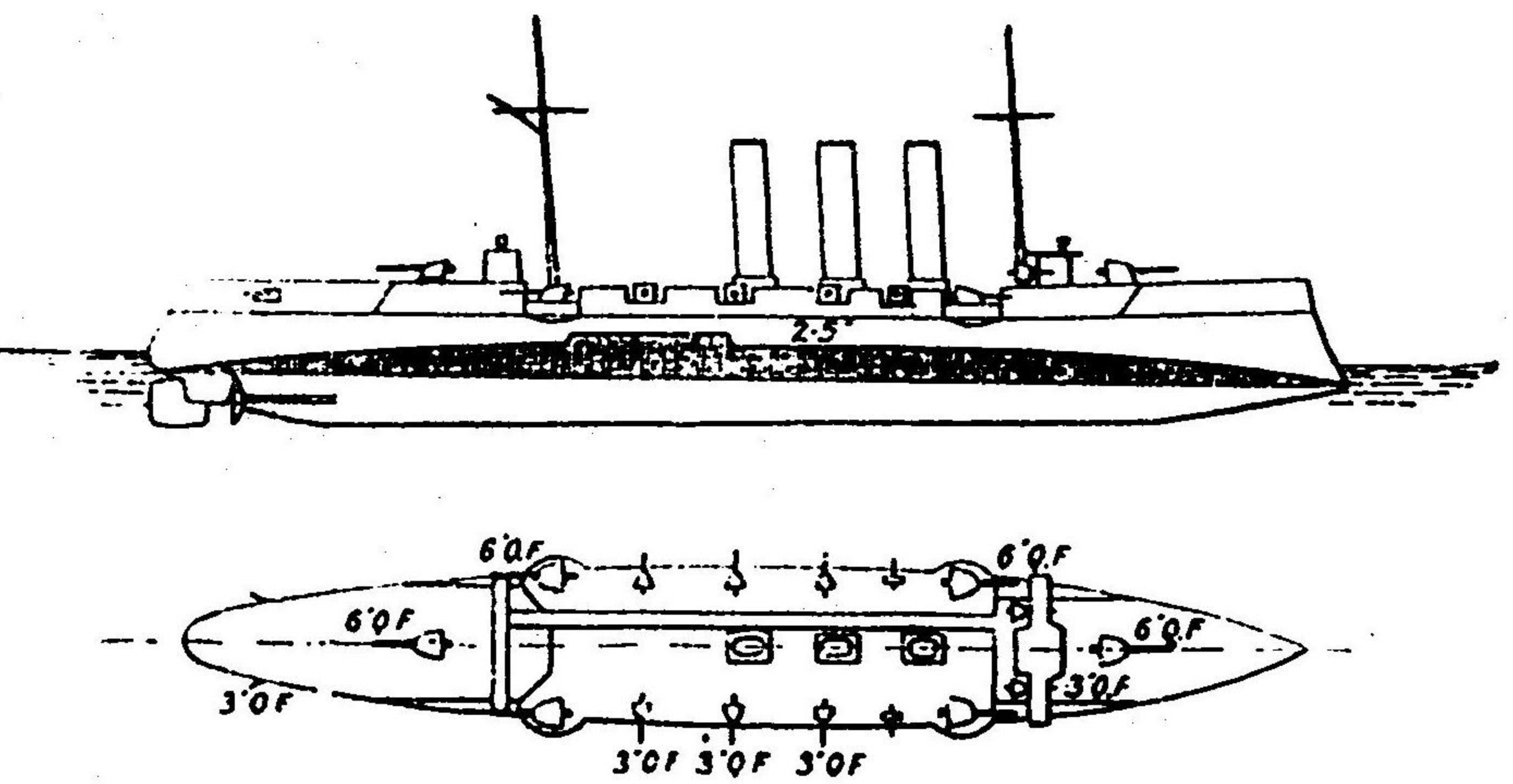


◎二等巡洋艦 新高 明治三十五年進水

三千三百六十五噸

兵裝 六吋砲 六門
三吋砲 十門

防禦甲板 二吋半

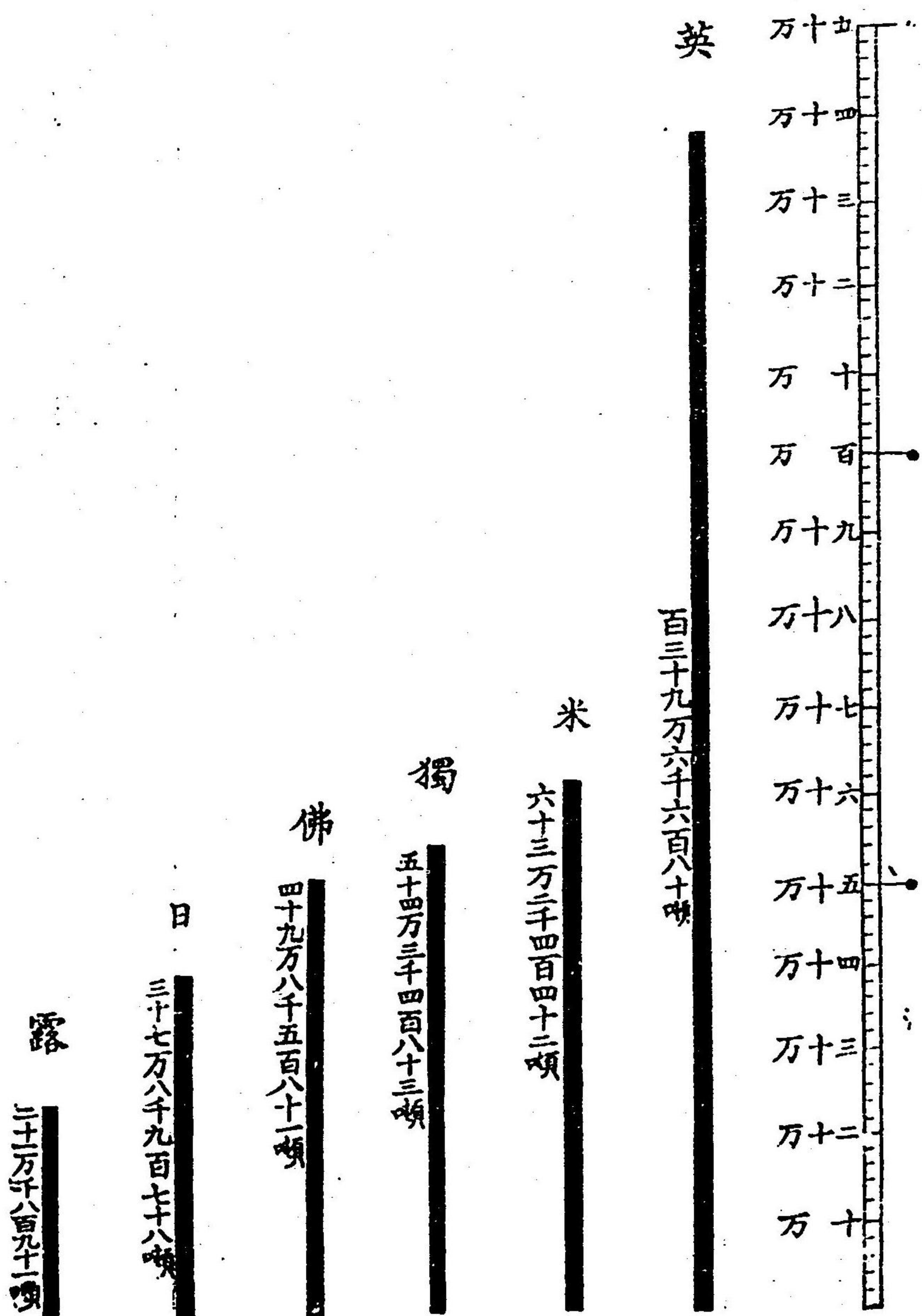


六大海軍國艦數一覽表

露國	日本	佛國	獨國	米國	英國	戰艦數	老艦數	一等巡洋艦數	計	二等巡洋艦數	三等巡洋艦數	合計
七	一四	一五	二七	二七	四八	一三	四九	一一〇	二六	三七	一七三	
五	二	九	四	四	一三	一三	四九	一一〇	二六	三七	一七三	
六	一三	一五	一一	一五	四九	一三	四九	一一〇	二六	三七	一七三	
一八	二九	三九	四二	四六	一〇〇	二六	三七	一七三	二六	三七	一七三	
八	四	一二	六	三	二六	二六	三七	一七三	二六	三七	一七三	
二	一四	二二	三〇	一四	三七	二六	三七	一七三	二六	三七	一七三	
二八	四七	七二	七八	六三	一七三	二六	三七	一七三	二六	三七	一七三	

○起工せられたる軍艦は未だ進水前のものと雖も悉く之を算入せり
○日本帝國の軍艦も他と比較の便宜上第一編第一章に掲げたる標準に依り類別せり

六六海軍國戰艦裝甲巡洋艦噸數比較圖(海軍主力)



列強海軍費比較表

國別	人口	海軍費 明治四十一年 千九百八年	一人の負擔すべき 海軍費の割合
英國	44,100,231	32,319,500 磅	0.733 磅
佛國	39,252,245	12,797,303 磅	0.326 磅
米國	83,941,510	25,833,217 磅	0.308 磅
獨國	60,641,278	16,596,561 磅	0.274 磅
伊國	33,640,710	6,266,193 磅	0.186 磅
日本	47,674,460	8,094,861 磅	0.169 磅
露國	149,299,300	9,833,915 磅	0.066 磅

露國海軍は目下甚しく衰微の状態にあるか故に經費亦少額なれとも愈々再興に着手する曉には經費の著るしき増加を示すに至るべし

帝國及列國海軍目次

卷首

- ◎明治四十一年大演習觀艦式寫眞
- ◎世界海圖概要
- ◎帝國軍艦の遠望
- ◎軍艦兵裝及裝甲圖例
- ◎六大海軍國艦數一覽表
- ◎六大海軍國戰艦裝甲巡洋艦噸數比較圖
- ◎列強海軍費比較表

第一編 列強海軍力比較

第一章 列強海軍力

第一節 日本帝國

▲最近海軍力異動 ▲日露戰役前後に於ける海軍力比較 ▲現時の海軍力

第二節 英國

▲最近海軍力異動 ▲現時の海軍力

目次

第三節 米國	一四
▲最近海軍力異動▲現時の海軍力		
第四節 獨國	一七
▲最近海軍力異動▲現時の海軍力		
第五節 佛國	一九
▲最近海軍力異動▲現時の海軍力		
第六節 露國	二三
▲最近海軍力異動▲現時の海軍力		
第七節 伊國	二五
●▲最近海軍力異動▲現時の海軍力		
第八節 奧匈國	二七
▲最近海軍力異動▲現時の海軍力		
第九節 他の諸國	二八

- ▲清國▲暹羅國▲西班牙國▲瑞典國▲和蘭國▲ブラジル國
- ▲アルゼンタイン國▲丁抹國▲智利國▲ノルウエー國▲ホルチユガル國
- ▲土耳其國▲希臘國▲ルーマニア國▲ペリユー國▲メキシコ國
- ▲ブルゲーリア國

六大海軍國戰艦巡洋艦一覽表(日英米獨佛露)	三五
第二章 海軍々備の標準	五五
第三章 列強海軍の競争及擴張の趨勢	六二
第一節 日本帝國海軍建艦の豫想	六二
第二節 列強建艦計畫の競争	六五
第三節 英國と獨國との建艦計畫競争	六五
第四節 英國建艦計畫	六八
第五節 米國建艦計畫	六九

目次

第六節	獨國建艦計畫	七一
第七節	佛國建艦計畫	七四
第八節	露國建艦計畫	七六
第九節	伊國建艦計畫	八〇
第十節	清國海軍再興計畫	八一
第十一節	西班牙國海軍再興計畫	八二
第四章	列強艦隊の將來	八四
第一節	主力艦隊の區別	八四
第二節	列強主力艦隊每年の變化豫想	八八
▲日本帝國艦隊の將來 ▲英國艦隊の將來 ▲米國艦隊の將來 ▲獨國艦隊の將來 ▲佛國艦隊の將來		
第五章	列強海軍政策の概要	一〇二

第一節	日本帝國	一〇二
第二節	英國	一〇三
第三節	米國	一〇五
第四節	獨國	一〇六
第五節	佛國	一一一
第六節	露國	一一一
第六章	東洋の海上勢力比較	一一三
第一節	東洋現在の列強海軍力	一一三
▲日本帝國 ▲英國 ▲米國 ▲獨國 ▲佛國 ▲露國 ▲伊國 ▲埃匈國 ▲清國 ▲蘭國		
第二節	將來東洋に於ける日本帝國海上勢力觀	一一三
第三節	將來に於ける列強遣東艦隊主力	一二五
▲清國 ▲露國 ▲英國 ▲米國 ▲獨國 ▲佛國		

第四節 將來に於ける日本帝國艦隊主力と列強遣東艦隊主力の比較……………一三三

第七章 他海面海上勢力觀……………一四二

第一節 米大陸兩側洋面の勢力……………一四二

第二節 地中海々々上勢力……………一四四

第三節 歐洲北海々々上勢力……………一四五

第四節 南洋方面の勢力……………一四八

第二編 艦艇及軍器の進歩……………一五一

第一章 艦艇……………一五一

第一節 總論……………一五一

第二節 戰艦……………一五五

第三節 裝甲巡洋艦……………一六七

第四節 防護巡洋艦及防護せざる巡洋艦……………一七〇

第五節 假裝巡洋艦……………一七四

第六節 驅逐艦水雷艇……………一八〇

第七節 潛航艇……………一八四

第二章 軍器……………一九六

第一節 砲煩……………一九七

第二節 裝甲鈔……………二〇三

第三節 列強艦砲と裝甲鈔……………二〇八

第四節 ヨルダイト火藥……………二一一

第五節 魚形水雷……………二二三

第六節 探照燈……………二二八

第七節 無線電信及電話……………二二九

第八節 海中信號機……………三三一

第九節 空中飛行器……………三三四

第十節 スチーム、タービン……………三三〇

第十一節 瓦斯及重油機關(インターナル、コムパスシ
ヨン、エンジン)……………三三三

第十二節 瀛罐燃料としての重油(通稱液體燃料)……………三三五

第三編 列強海軍の現制及一斑……………二四一

第一章 日本帝國海軍……………二四一

第一節 海軍史の概要……………二四一

第二節 軍制沿革……………二五六

第三節 現時の軍制……………二五八

▲海軍省官制の要領▲海軍々令部▲戰時大本營▲艦隊條例の要領

▲鎮守府條例の要領▲要港部條例の要領▲艦政

第四節 教育……………二七二

▲教育本部▲一般教育▲大學校▲兵學校▲機關學校▲軍醫學校

▲經理學校▲砲術學校▲水雷學校▲工機學校▲運用術練習艦

第五節 港灣、艦廠其他の所在地……………二七六

▲軍港▲要港▲主要なる港灣▲韓國の主要なる港灣▲海軍工廠▲主要なる私立造船所▲商船

第六節 人員給與及豫算……………二七七

▲人員▲軍人俸給▲四十一年度海軍省所管經常部▲四十一年度海軍省所管臨時部▲軍艦製造及建築費▲艦艇補足費▲整備費▲補充艦艇費

▲四十二年度豫算海軍省所管經常部▲四十二年度豫算海軍省所管臨時部▲軍艦製造及建築費(四十二年改定)▲整備費(四十二年改定)▲補充艦艇費(四十二年改定)

第二章 外國海軍……………三二一

第一節 英國

▲發達及現制 ▲鎮守府艦廠及海軍用港灣 ▲主要なる商港 ▲商船 ▲私立船廠 ▲海軍人員 ▲豫算

第二節 米國

▲發達及現制 ▲艦廠及海軍ステーション ▲主要なる商港 ▲商船 ▲私立船廠 ▲海軍人員 ▲豫算

第三節 獨國

▲發達及現制 ▲鎮守府艦廠及根據地 ▲主要なる商港 ▲商船 ▲私立船廠 ▲海軍人員 ▲豫算

第四節 佛國

▲發達及現制 ▲鎮守府艦廠及根據地 ▲主要なる商港 ▲商船 ▲私立船廠 ▲海軍人員 ▲豫算

第五節 露國

.....三三〇

▲發達及現制 ▲軍港及艦廠 ▲主要なる商港 ▲商船 ▲半私船廠 ▲海軍人員 ▲豫算

第六節 伊國

.....三三三

第四編 列強艦船要目

.....三三六

日本帝國、英國、米國、獨國、佛國、露國、伊國、埃匈國、清國、暹羅國、西班牙國、瑞典國、和蘭國、ブラジル國、アルゼンタイン國、ノルウェー國、丁抹國、智利國、ポルチエガル國、土耳其國、▲日本國驅逐艦數 ▲日本國水雷艇數 ▲英國驅逐艦數 ▲米國驅逐艦數 ▲獨國驅逐艦數 ▲佛國驅逐艦數 ▲露國驅逐艦數 ▲伊國驅逐艦數

附錄 日本帝國海軍近事

.....四四一

▲伊集院艦隊米英派遣 ▲山本海軍大將の渡英 ▲特命檢閲 ▲練習艦隊

目次

▲米國艦隊の横濱來航 ▲海軍大演習及觀艦式 ▲大演習及觀艦式の沿革
 ▲運用術及機關術の訓練 ▲艦砲射撃の訓練 ▲水雷發射の訓練 ▲軍艦松
 島の沈没 ▲其他の諸件

帝國及列國海軍

海軍大佐 小栗孝三郎著

第一編 列強海軍力比較

第一章 列強海軍力

第一節 日本帝國

▲最近海軍力異動 海軍第一期第二期擴張は明治三十五年に於て好調に完成したるも東洋の形勢は帝國をして更に海軍増勢の必要を感せしむること大なるの結果將に第三期擴張に着手せんとするや偶々日露間の風雲急を告ぐるに會し遽かにアルゼンタイン共和國より二隻の裝甲巡洋艦春日及日進各七千七百噸にして伊太利國に於て建造中なりしものを購入し勢力の増加を圖りたる爲め帝國海

第一編 列強海軍力比較 第一章 列強海軍力

軍は開戦の當時に於て最も新鋭なる六大戦艦四隻は約一萬五千噸二隻は約一萬三千噸及八大裝甲巡洋艦六隻は約九千八百噸二隻は七千七百噸を以て艦隊の主力を編成し之を佐くるに四隻の快速力巡洋艦約四千噸乃至五千噸其他を以てするを得たるが同戦役は帝國に極めて有利なる状態を以て繼續せられ其終局を告ぐる迄に亡なひたるもの僅かに大戦艦二隻快速力巡洋艦二隻其他數隻の小艦に過ぎず然るに曩きに第三期擴張の第一着として英國造船會社に命し建造せしめたる大戦艦香取及鹿島(各約一萬六千噸)の二隻は明治三十九年を以て竣工回航を遂げ又戦役中吳海軍工廠に於て起工したる裝甲巡洋艦筑波(約一萬四千噸)も同年に於て其工を完り其他驅逐艦及潜航艇數隻を加へたるに併せて戦利艦として收容したる戦艦以下の艦船尠ならず帝國海軍力は一時至大なる勢を以て向上の隆運を示したるか明治四十年來帝國財政の關係より海軍所管の經費亦繰延の己むを得ざるに至りたる結果として建造中の新艦は其工事の進捗概して敏活なるを得ざると共に軍事的各種の設備も緊急を要するものゝ外は多く之を見合せたるか如し(獨り教育訓練は萬障を排し着々進行せしめ其發展を圖らんとするの跡

あり)但し日露戦役中收容したる戦利諸艦は其極めて少數のものを除く外悉く客年(明治四十一年)秋季に於ける海軍大演習に參與せしむるの方針を執りたる爲め其復舊若くは改造の大修理一先つ終了したるを見る俟て前々年(明治四十年)來新造艦船の竣工せるものは裝甲巡洋艦生駒通報艦最上及淀の三艦にして其他海軍力の最近異動大要左の如し

艦種	竣工	進水後の工事中	起工
戦艦		一萬九千三百五十噸の薩摩(横須賀)及一萬九千八百噸の安藝(吳)	二萬餘噸のもの二隻(横須賀及吳)
裝甲巡洋艦	一萬三千七百五十噸の生駒(吳)	一萬四千六百二十噸の鞍馬及伊吹(横須賀及吳)	
小巡洋艦		四千五百噸の利根(佐世保)	
通報艦	千三百二十九噸の最上(長崎)及千二百三十噸の淀(神戸)		
右の外竣工せる驅逐艦三百餘噸約十隻及潜航艇三百餘噸二隻あり、尙ほ千餘噸の航洋驅逐艦一隻及驅逐艦三隻は建造中に在り			

戦利艦の修理状態		竣工	未竣工
艦種	竣工	工	未竣工
戦艦	石見(元アヲリヨシヨシ) 相模(元ハレスウキエツト) 肥前(元レトウイザン) 周防(元ガヒエエダ)	丹後(元ガクガア)	
老式戦艦	壹岐(元ニコライ一世)		
装甲巡洋艦	阿蘇(元ヤハ)		
巡洋艦	宗谷(元ウリヤク)	津輕(元マラダ)	
海防艦	見島(元セイヤク)		
通報艦	鈴谷(元ノイック)		
水雷母艦	韓崎(元エカテリノスラフ)		
他の諸艦	滿洲(元マンチユリア) 姉川(元アンガウラ) 松江(元スンガリ)		
駆逐艦	山彦 皐月 文月 卷雲	敷波	

戦役其局を結はんとする頃不慮の災變に遭ひ久しく佐世保港底に膠着したる後浮揚の効を奏し大修理中にありし戦艦三笠(一萬五千二百噸)は昨年(明治四十一年)に於て其復舊

工事を完結し再び第一艦隊に其雄姿を現はすを得たり帝國甲鐵戦艦の最先艦扶桑三千七百噸は明治十一年以後久しく艦隊の旗艦として屢々演習其他の行動に參與し加ふるに日清日露兩戦役には種々の任務に服して功績顯著なるものありしが今や艦齡其定限を超へ昨年(明治四十一年)に於て帝國艦籍より除かれ又練習遠洋航海の歸途馬公港碇泊中稀有の慘禍に罹れる巡洋艦松島(四千二百七十七噸)も艦籍より除かるゝに至り其他砲艦鳥海及摩耶水雷艇小鷹福龍以下數隻も老齡の爲め艦籍より除かれたり

▲日露戦役前後に於ける海軍力比較 前年(明治四十一年)開會の帝國議會に於て、海軍省委員の説明したる、日露戦役前後に於ける海軍力比較左の如し

(一)開戦當時の隻數及び噸數

- 戦艦六隻 八萬四千六百五十二噸
- 装甲巡洋艦八隻 七萬三千九百八十三噸
- 其他の軍艦四十四隻 十一萬千四百七十噸
- 驅逐艦十九隻 六千五百十九噸

水雷艇八十隻

七千百十九噸

合計百五十七隻

二十八萬三千七百四十三噸

(二) 戰役中失ひたる隻數及噸數

戰艦二隻 二萬七千三百噸(初瀬、八島)

其他の軍艦八隻 一萬八千九百噸(高砂、吉野、濟遠、宮古、平遠、愛宕、大島、海門)

驅逐艦二隻 七百五噸(曉、速鳥)

水雷艇七隻 五百五十七噸

合計十九隻 四萬六千五百七十一噸

(三) 戰役中より今日まで新造したる隻數及噸數

戰艦四隻 七萬五千五百噸(香取、鹿島、製造中の安藝、薩摩)

裝甲巡洋艦四隻 五萬六千七百噸(筑波、生駒、製造中の鞍馬、伊吹)

其他の軍艦五隻 七千六噸(隅田、伏見、製造中の利根、淀、最上)

驅逐艦三十三隻 一萬二千五百七十三噸

水雷艇五隻 七百六十噸

合計五十一隻

十四萬八千五百三十九噸

(四) 戰利艦隻數及噸數

戰艦五隻 六萬二千五百二十四噸(石見、相模、丹後、肥前、周防)

其他の軍艦十一隻 七萬二千二百七十六噸(壹岐、阿蘇、津輕、宗谷、沖島、見島、鈴谷、滿洲、姉川、韓崎、松江)

驅逐艦五隻 千七百四十噸(山彥、阜月、文月、敷波、卷雲)

合計二十一隻 十三萬三千五百噸

(五) 現在の隻數及噸數(明治四十一年春)

戰艦十三隻

十九萬三千三百八十噸

裝甲巡洋艦十二隻

十三萬六千八百八十三噸

其他の軍艦四十七隻

十六萬五千二百五十三噸

驅逐艦五十五隻

二萬五百八噸

水雷艇七十七隻

七千二百五十八噸

合計二百四隻

五十一萬五千八十二噸

又本年(明治四十二年二月)衆議院豫算委員會に於て齋藤海相の説明したる現在の隻數及噸數左の如し

戰艦十三隻、裝甲巡洋艦十二隻、其他の軍艦四十三隻、驅逐艦二十七隻、水雷艇六十九隻、此合計噸數五十萬五千餘噸

▲現時の海軍力 列強海軍力比較の便宜上、戰艦を戰艦及老戰艦の二種に別ち、裝甲巡洋艦及八千噸以上の非裝甲巡洋艦を一等巡洋艦、四千噸以上の巡洋艦を二等巡洋艦、二千噸以上の巡洋艦を三等巡洋艦と稱し、二千噸未満の小艦及二千噸以上なるも甚しく無勢力なる軍艦は之を除きて艦船の種類隻數及排水量計上の標準となさんとす(以下同し)

凡そ海軍力は艦船の勢力即ち其構造並に攻撃力、防禦力、速力、行動圏等の大小に依り判断すべきものにして、單に排水量を基準とするは正當の方法と稱し難しと雖とも如何んせん列強の艦船各其型式意匠を異にし構造は勿論、攻撃力、防禦力、速力、行動圏其他微細の點に至る迄多種多様なるか故に勢力の等級に關する適當の區別を立て比較の便に供する事は到底不可能なるを免れず是れ本書に於ては前記

の如き艦船類別法を採用せんとする所以なり(帝國海軍の類別法に依れば巡洋艦中七千噸以上のものを一等とし、三千五百噸以上のものを二等と定めあれども今列強艦船の比較を容易ならしめんが爲に假りに英國ブラッセー年鑑の定めたるものに準せるなり)

帝國現時の海軍力左の如し(右標準に依り區別す以下同じ)

戰艦	十四隻	二十二萬二千百三十四噸
老戰艦	二隻	二萬六百三十二噸
一等巡洋艦	十三隻	十三萬六千二百十二噸
二等巡洋艦	四隻	二萬三千三百六噸
三等巡洋艦	十四隻	四萬六千六百十三噸
驅逐艦	五十七隻(外に建造中のもの四隻)	
水雷艇	六十九隻	
潛航艇	九隻	

注意 (艦艇の起工したるものは悉く之を算入せり以下列國の部皆同じ)

第二節 英國

▲最近海軍力異動 明治三十九年春列國に率先して二萬噸に近き大戰艦ドレットノートヲ進水し著るしく世の視聽を聳動したる以來同艦系統の改良型大戰艦を續々建造し盛んに其辣腕を示しつゝありしが昨年(明治四十一年)を以て其第一計畫の完結を告げたるが如し由來英國が極めて短日月を以て能く軍艦を建造するの能力は他國の到底企及せざる所なりとして同國民の誇りとする所なれば今ドレットノート型各艦の起工せられてより進水せる迄の年月を左に掲げ參考に供せんとす

艦名	起工年月	進水年月	起工より進水迄の月數
ドレットノート (一萬七千九百噸)	千九百五年(明治三十八年)三月	千九百六年二月	四ケ月
ベルロンオン (一萬八千六百噸)	千九百六年十二月	千九百七年六月	七ケ月
テメレーア (一萬八千六百噸)	千九百七年一月	千九百七年八月	八ケ月
シュバニア (一萬八千六百噸)	千九百七年二月	千九百七年十一月	八ケ月

シント、ウキンセント (一萬九千二百五十噸)	千九百七年十二月	千九百八年九月	八ケ月
コーリングド (一萬九千二百五十噸)	千九百八年(明治四十一年)四月	千九百八年十一月	九ケ月
ヴァンガード (一萬九千二百五十噸)	千九百八年四月	千九百九年二月	十ケ月

又前々年來の建艦状況を顧るに戰艦に在てはドレットノート、ベルロンオン、テメレーア、シュバニアの四大艦の外、アガメノン、ロードネルソン、装甲巡洋艦に在てはインドミダブル、インフレキシブル、インヴァインシブルの三大艦の外、ミノートル、シヤンノン及ワリーリオル型四隻の竣工を主要なる海軍力の増加とし其他海軍力の最近異動左の如し

戦艦	竣工	進水後の工事中	起工及建造中
アガメノン(一萬六千五百噸)	シントウキンセント(一萬九千二百五十噸)	ロードネルソン(同)	ネブチニン(二萬噸)
ドレットノート(一萬七千九百噸)	コーリングド(同)	ベルロンオン(一萬八千六百噸)	二隻(不日竣工)
テメレーア(同)	ヴァンガード(同)	シュバニア(同)	二隻(本年起工の筈)

裝甲巡洋艦		小巡洋艦	
ミノトール(一萬四千六百噸)デフエンズ(一萬四千六百噸) (不日竣工)	インデファチガアル(約一萬噸)	ポーデシア(三千三百噸二十七節)	六隻(約三千五百噸)
シヤンノン(同右)		スウキフト(千八百噸三十六節)	
インデミタアル(一萬七千二噸)			
インフレキシアル(同右)			
インウインシアル(同右)			
アチールス(一萬三千五百五十噸)			
コクレイン(同右)			
ナタール(同右)			
ヴィリョアル(同右)			

航洋驅逐艦四隻、一等水雷艇十隻竣工し更に航洋驅逐艦十六隻起工せり

最大速力の偵察巡洋艦はポーデシアを首めとし七隻を有するに至るべく三十三節の速力を出すべき航洋驅逐艦(約八百噸)は本年起工せる十六隻を合し二十八隻を有す又潜航艇の創建は米佛兩國に一籌を輸したるも千九百一年以後鋭意之が改良發達に努めたる結果今や却つて兩國を凌駕せんとするの勢あり其建造概況

左の如し

設計の年	數	排水量	速力(水上)
千九百一年	ホルランド型五隻	百二十噸	八節
千九百三年	A型四隻	百八十噸	十一節
千九百四年	A型十隻	二百四噸	十一節半
千九百四年	B型十一隻	三百十三噸	十三節
千九百五年	C型三十隻	三百十三噸	十三節
千九百六年	D型一隻	四百五十噸?	十六節

右の内C型第二十四號迄竣工しC型四隻及D型は昨年起工せり。

曩きに昨年四月汽船シントポール號と雪中に衝突の不幸を來し久しく沈没の狀態にありたる巡洋艦グラジエートル(五千七百五十噸)は同十月に於て引揚の効を奏し又老舊戰艦九隻、裝甲巡洋艦一隻、巡洋艦一隻は艦籍より除かれたり

▲現時の海軍力

戰艦	四十八隻	七十三萬九千九百噸
老戰艦	十三隻	十七萬四千三百噸
一等巡洋艦	四十九隻	六十萬二千七百五十噸
二等巡洋艦	二十六隻	十六萬千八百十噸
三等巡洋艦	三十七隻	十一萬四千五百噸
驅逐艦	百七十隻	內二十一隻建造中
水雷艇	百〇七隻	
潛航艇	五十九隻	

第三節 米 國

▲最近海軍力異動 日清戰役後に於ける東洋形勢の變移と列強海軍擴張の趨勢とが折柄多年の退嬰主義より覺醒したる米國海軍を促して遽かに其發展を企圖せしむるに至りたるが幾もなく米西戰爭の破裂と其戰勝の結果は愈々海軍大擴張實行の動機となり爾來設計せられたる艦船は續々竣工を告げて茲に全く嶄新

なる一海軍を編成するに至れり試みに千九百四年(明治三十七年)以後に進水したる裝甲艦を算するに米國裝甲艦總數の六割強を占め又同海軍總艦船の合計噸數が一躍して佛獨兩國を抜き世界の第二位に進みたるの盛況に鑑み鋭進の勢を察すへきなり今海軍力最近の異動を見るに左の如し

戰艦	竣工	進水後の工事中	起工及建造中
ニユーハムプシャイア(一萬六千噸) ミシシッピ(一萬三千噸)	モシガン(一萬六千噸) サウスカロリナ(同) 右 ノースダコタ(二萬噸) アラゾニア(同) 右)	ユタ(二萬噸) フロリダ(同) 右) 二隻(本年起工の筈)	
裝甲巡洋艦	デンネツシー(一萬四千五百噸) ワシントン(同) 右) ノースカロリナ(同) 右) モンタナ(同) 右)		
小巡洋艦	チエスタ(三千七百五十噸) 二十六節半)	バミシಂಗム(三千七百五十噸) サレム(同) 右)	

千九百七年より本年迄に約七百噸の航洋驅逐艦五隻及約三百噸の潛航

艇三隻起工せられ又昨年(千九百八年)より十年迄に航洋驅逐艦十隻及三百噸以上の潜航艇八隻起工の計畫なり最近報に依るに二萬六千噸の戦艦二隻本年中に起工せらるべしと云ふ

潜航艇に付ては夙とに研究を積みたる結果左の如き状況にあり

米國潜航艇	
艇名	排水量
ホルランド	七十四噸
アツダー型	二百二十噸
ヴァイバー型	二百八十噸
オクトパス型	二百八十噸

ヴァイバー型及オクトパス型が現在就役しつゝある最新艇にして何れも千九百七年竣工せり外にレーキ式一隻建造すべしと云ふ

▲現時の海軍力
 戦艦 二十七隻 四十萬三千六百四十三噸

- 老戦艦 四隻 四萬二千二百四噸
- 一等巡洋艦 十五隻 十八萬六千五百九十五噸
- 二等巡洋艦 三隻 二萬六百二十噸
- 三等巡洋艦 十四隻 四萬五千四十九噸
- 驅逐艦 三十一隻(内十隻は計畫中)
- 水雷艇 三十五隻
- 潜航艇 二十四隻(内九隻は計畫中)

第四節 獨 國

▲最近海軍力異動 近年獨逸國の執れる植民政策と海上雄飛政策とは同國をして海軍擴張の要を認めしむる事自然の數なるが故に舉國一致して建艦計畫に熱中するの狀一偉觀たるを失はず随つて同國の造艦界は至大なる活況を呈しつゝ、あれば近き將來に於ては其成績極めて顯著なるべきを疑はずと雖とも今日迄の實況は寧ろ其準備時代に過ぎざるを以て年々確實なる發展を認むべきの外未だ米國の如き突飛なる躍進を示すには至らざりき海軍力の最近異動は左の如し

	竣	工	進水後の工事中	起工及建造中
戦艦	シレンシエン(一萬三千二百噸) シレスウキツク(同) ホルスタイン(同) ハンノウエル(同) ボムメルン(同)	ナツソー(一萬七千六百七十九噸) ウエストフワレン(同右) ラインランド(一萬八千三百七噸) ボーゼン(同)	三隻(約一萬九千噸)	三隻(不日竣工)
装甲巡洋艦	グナイゼンド(一萬一千四百二十噸) シヤルンホルスト(一萬一千四百二十噸) ステツチン(三千三百九十六噸) ニユルンベルク(同)	ブリューヘル(一萬四千七噸) フォンデルタン(一萬八千七百噸) ドレンステン(三千三百九十六噸) コルンベルク(三千七百四十噸)	一隻(一萬八千七百噸) 一隻(不日竣工)	一隻(三千五百四十四噸)
小巡洋艦	スチユットガルト(同)	マインツ(同)	二隻(四千二百噸)	
六百七十噸の航洋驅逐艦十二隻 潜航艇數隻 河川用砲艦一隻 清國派遣の豫定起工せられたり				

従前獨國に於ける戦艦建造は其進水に至る迄に少くも十四ヶ月を要したりしに新戦艦ナツソーが起工後七ヶ月半にして進水するを得たるは同國造船業の一大進歩なりとして當事者の誇示する所なるか如し又戦艦以下各種の艦船は其勢力に於て優に列強と匹敵せしむべき理想を以て其建造を畫したるを見れども獨

り潜航艇に於ては其着手大に列強に譲りたる所あるは一奇なり
▲現時の海軍力

- 戦艦 二十七隻 三十七萬三千二百四十二噸
- 老戦艦 四隻 三萬九千四百九十六噸
- 一等巡洋艦 十一隻 十三萬七百四十五噸
- 二等巡洋艦 六隻 三萬四千二百四十五噸
- 三等巡洋艦 三十隻 九萬七千三百四十七噸
- 驅逐艦 九十三隻(内十二隻建造中)
- 水雷艇 四十七隻
- 潜航艇 四隻

第五節 佛國

▲最近海軍力異動 一と度ひは歐洲海上に雄飛したる佛國海軍も近年は其氣勢甚た振はす遂に米獨兩國の飛躍に遭ひて世界の第四位に降り其威容亦昔日の觀なきか如し殊に一時海軍政策の錯誤よりして水雷艦艇の多數を以て隣國の大艦

政策に當らんとするの經濟方針を執りたる爲め近來大艦船の建造敏速なるを得ず現時は再び大艦主用政策に復したりと雖ども創痍未だ癒へず其他各部の軋轢艦船の椿事屢々發生する等兎角活氣を缺くの憾あり此際に於て奮勵一番革新的大斧鉞を用ひざる可らずとは同國の當路者並に議會の齊しく認むる所なりと云ふ最近に於ける建艦狀況を觀るに千九百年計畫の戰艦バトリー型各艦はヴェリテの一隻を除くの外悉く竣工せるを重なる増艦とし千九百六年計畫の戰艦ダントン型六隻は尙ほ建造中に在り其他海軍力の最近異動左の如し

裝甲巡洋艦	竣工		進水後の工事中		起工及建造中	
	戦艦	艦	戦艦	艦	戦艦	艦
レナングムベツタ(同右)	バトリー(一萬四千六百三十五噸) レビエブリーク(同右) デモクラチー(同右) ジュスチス(同右) リベルテ(同右)	ヴェリア(一萬四千六百三十五噸) ヴァルテール(一萬七千七百十噸) ヴェルギヨ(同右) シテロー(同右) コンドルセー(同右) ミラゴ(同右)	エカールキネ(一萬三千七百八十噸) ワルアツクルソー(同右)	ダントン(一萬七千七百十噸) ヴェルギヨ(同右) シテロー(同右) コンドルセー(同右) ミラゴ(同右)		
ヴェイクトルユーゴ(同右)	ジュールフェリー(一萬二千三百五十二噸)					
レナングムベツタ(同右)	ヴェイクトルユーゴ(同右)					

昨年中驅逐艦十一隻竣工八隻進水十五隻起工し、百噸水雷艇は昨年に於て數多竣工し潜航艇の一昨年來進水及起工せるもの亦多し

戰艦は昨年(千九百八年)起工せられたるもの一隻もなく今年には二萬噸のもの六隻起工せらるべく裝甲巡洋艦及巡洋艦亦昨年起工せられたるもの無し一昨年來亡失したる艦船は爆破したる戰艦イエナ(一萬一千噸)東洋に於て難破したる裝甲巡洋艦シャンジ(四千七百三十六噸)亞非利加に於て難破したる防護巡洋艦ジャンパールの三隻にして又老朽艦の除籍せられたるものは大小十五隻あり潜航艇の研究には多大の苦心を凝らしつゝあり其建造概況左の如し

昨年に於ける潜航艇狀況			
進	水		本年(一九〇九年)竣工すべき潜航艇
	起工又は建造中	竣工	
四隻	四隻	四隻	二隻 各四百噸
		六隻	六隻 各三百九十八噸

五十一隻建造中	計	八 百 十 噸
潜航艇の建造も其數多きに拘はらず進捗概して遅々たり	一	七 百 三 十 五 噸
	一	六 百 二 十 八 噸
	一	四 百 二 十 七 噸
	計	十 二 隻

▲現時の海軍力

戰艦	十五隻	二十三萬三千八百八十九噸
老戰艦	九隻	九萬九千六百六十五噸
一等巡洋艦	十五隻	十六萬九千二十七噸
二等巡洋艦	十二隻	七萬八千五百四十噸
三等巡洋艦	二十一隻	六萬六千七百七十三噸
驅逐艦	七十六隻(内二十一隻建造中)	
水雷艇	三百三十一隻(内航洋四十一隻)	
大潜航艇	六十一隻	
小潜航艇	三十九隻	

第六節 露 國

▲最近海軍力異動 日露戰役に於て黒海艦隊を除くの外有力なる艦船の殆んど全部を亡なひたるの觀あり當局者は爾來再興大計畫に腐心しつつあれども其數隻が一昨年來竣工若は進水せるに止まり未だ具體的新建造計畫を確立し之を實行するの時機に達せず今海軍力の最近異動を左に掲ぐ

	竣 工	進水後の工事中	起工及建造中
戰艦		パウエル一世(一萬七千二百噸) アンドレーヘルグナズアニー(同) 右	
裝甲巡洋艦	リユーリツク(一萬五千七百七十噸) アドミラルマカロフ(七千九百噸) バルラダ(同) 右	パヤン(七千九百噸)	
小巡洋艦			二隻(四千五百噸)
砲艦	コレーツ(八百七十五噸) ギリヤック(同) 右	シガーチ(八百七十噸)	ホーブル(八百七十五噸)
(一) 驅逐艦二隻竣工			

- (二) 潜航艇五隻進水一隻建造中にして獨逸國於て製造したる三隻は竣工せり
- (三) 黒海艦隊に属すべき驅逐艦十隻一兩年中に起工せらるべく七百噸の二隻は進水せり

目下戰艦二隻起工の準備中にあり戰役中多大の損害を受けたる裝甲巡洋艦グロモボイ(一萬二千三百三十六噸)及ロシア(一萬二千三百三十噸)並に巡洋艦オレーグ(六千六百七十五噸)ダイアナ(六千六百三十噸)オーロラ(六千七百三十一噸)は復舊大修理中にありしが殆んど竣工せりと云ふ戰艦(黒海艦隊)二隻及巡洋艦一隻は老朽の結果艦籍より除かれ西伯利亞艦隊に属する砲艦七隻火災の爲め破壊せられ又一昨年バルチック工廠の一部火災を蒙りたる節砲艦二隻損傷せられたり

▲現時の海軍力

- 戰艦 七隻 九萬七千六百三十四噸
- 老戰艦 五隻 五萬一千九十一噸
- 一等巡洋艦 六隻 六萬三千百六十六噸

- 二等巡洋艦 八隻 五萬二千六百十噸
- 三等巡洋艦 二隻 六千三百九十一噸
- 驅逐艦 八十隻 黒海驅逐艦十七隻
- 水雷艇 五十五隻 黒海水雷艇十五隻
- 潜航艇 三十五隻

第七節 伊 國

▲最近海軍力異動 常に地中海の狀勢に鑑み相當の海軍力を維持し艦船其他の進歩を圖りつゝあるを認む然れども財政の關係より艦船の建造甚遅緩にして左表諸戰艦の如きも其設計より竣工に至る迄に八年以上を費やすを例とせり

戰艦	竣工	進水後の工事中	起工及建造中
サキツトリアエマニユエル三世			一隻(一萬八千噸)
レギナエレナ(同)	右		一隻(同)
ローマ(同)	右		
ナホリ(同)	右		

第一編 列強海軍力比較 第一章 列強海軍力

裝甲巡洋艦	ビ アマ ル フ キ (同 右)	ザ (九千八百三十二噸) サン ギ オ ル ギ オ (九千八百 三十二噸 右)	一 隻
小巡洋艦			
湖上砲艦二隻 潜航艇一隻 起工			

昨年起工の戦艦を合し約四隻の一萬八千噸艦建造の計畫なるか如し、戦艦二隻、三等巡洋艦一隻及數隻の小艦は老朽の爲め艦籍より除かれたり、潜航艇に付ては比較的進歩せるものありと云ふ

▲現時の海軍力

- 戦艦 八隻 十一萬二千百二十八噸
- 老戦艦 六隻 七萬七百十七噸
- 一等巡洋艦 七隻 六萬一千二百十噸
- 二等巡洋艦 三隻 一萬七千三百三噸
- 三等巡洋艦 十四隻 四萬二百八十九噸
- 驅逐艦 二十九隻(内十隻建造中)

- 水雷艇 百十隻
- 潜航艇 十三隻

第八節 埃匈國

▲最近海軍力異動 列強海軍に比し格別の特色なしと雖とも相當の海軍力を維持し艦船其他の進歩を圖りつゝあるを認むるに足る

	竣	工	進水後の工事中	起	工
戦艦	三隻(萬四千三百三噸)	一	一隻(一萬四千五百噸)	一隻(一萬四千五百噸)	一隻(同 右)
小巡洋艦				一隻(二千五百噸)	艦名スバウナ?
驅逐艦	六隻			六隻	
水雷艇	十四隻			十隻	
潜航艇				八隻	

二萬噸の戦艦三隻計畫中なるが本年中に起工せらるゝものあるべし

▲現時の海軍力

裝甲艦	十五隻	十三萬四千五百八噸
他の諸艦	十六隻	二萬六千九百四十七噸
驅逐艦	十二隻	
水雷艇	五十四隻	
潜航艇	建造中のもの八隻	

第九節 他の諸國

▲清國 日清戰役に於て清國海軍の中樞たりし北洋艦隊が全滅の悲運に陥りたる以來は事實上海軍力と稱すべき程のもの無く其再興計畫は數年來屢々唱道せらるゝ所なれども未だ實際に新艦建造に着手するの時機に達せず隨て日本國に於て製造したる六隻の砲艦七百五十二噸及小砲艦二十三節の水雷艇四隻の外最近に建造せられたるものを見ず

現時海軍力の主要なるものは巡洋艦海圻四千三百噸を首とし海容海籌海琛各三千噸及小巡洋艦三隻並に水雷砲艦飛鷹八百五十噸外十三四隻の砲艦あるのみ

▲暹羅國 近時海軍の設備に銳意し又一皇族を兵學校長に任し有爲の青年士官を養成すると共に多數の水兵をも訓練しつゝありと云ふ

曩に神戸川崎造船所に於て建造したる驅逐艦二隻一等水雷艇三隻は本國に回航せられたるが昨年秋季更に砲艦二隻水雷艇一隻を川崎造船所に注文せりと傳ふ現在する艦船左の如し

巡洋艦	一隻	二千五百噸
砲艦	九隻	

▲西班牙國 嘗て世界海上に雄飛したる西國海軍も漸次衰退の運命に在りしが米西戰爭の結果として殆んど無海軍に齊しき劣勢に陥るに至れり然るに一昨年來海軍再興計畫の熟するを見れば今後は着々建艦事業の進捗を來すことならん而して造艦は悉く内地に於て施行するの方針を執りフェロル、カジズ兩軍港の設備其他各艦廠等も之と同時に設備せん事を期するが如し千九百年に進水したる裝甲巡洋艦カタルナ六千八百八十九噸及ひ巡洋艦レイナレセント五千二百八十七噸が最近に竣工せる外近時著るしき異動なし

現時の海軍力は

装甲艦 五隻 三萬九千八百一噸

他の諸艦 十二隻 一萬九千三百三十八噸

驅逐艦 五隻

水雷艇 九隻

▲瑞典國 一昨年委員を設けて調査したる造艦計畫ありて本年より着手せられんとす最近の造艦状況を見るに海防艦オスカル二世(四千二百三噸)装甲巡洋艦フキルシア(四千百噸)竣工、驅逐艦二隻水雷艇十一隻建造中、驅逐艦一隻水雷艇四隻起工せられたり

本年起工せらるへき新計畫の戦艦は二隻にして七千五百噸なりと云ふ

現時の海軍力は

装甲艦 十五隻 六萬六十八噸

他の軍艦 六隻 四千四百八十四噸

驅逐艦 六隻

水雷艇 五十一隻

▲和蘭國 六千五百噸の一艦昨年起工せられたり現時の海軍力は

装甲艦 九隻 三萬八千三百三十噸

他の諸艦 八隻 三萬噸

砲艦 二十六隻

水雷艇 四十八隻

潜航艇 一隻

▲ブラジル國 約二萬噸の戦艦三隻英艦ドレットノートと同型及三千噸の偵察巡洋艦二隻英國に於て建造中なりしが内ミナスセラエス及サヲポロの二隻二萬噸の戦艦は既に進水せり其他英國にて建造したる水雷艇(百五十噸)及河用砲艦は受領せられ驅逐艦十隻の内四隻は進水せり(偵察巡洋艦二隻も不日竣工)現時の海軍力は

装甲艦 九隻 七萬六千三百十三噸

他の諸艦 十三隻 二萬六千二百三十一噸

驅逐艦 十隻
水雷艇 十四隻

▲アルゼンタイン國 千九百六年に發表したる海軍擴張案は其後中止の狀態にあり日露戰役の初め伊太利に於て建造しつゝありたる二裝甲巡洋艦春日日進を日本國に賣却したる以來は格別の造艦實施を見ず僅かに英國にて建造中の砲艦(千噸)二隻あるのみなりしに昨年(一九〇八年九月)に於て再び海軍擴張費として一千一百万磅を議決したりとの報あり

現時の海軍力は

裝甲艦 七隻 三萬七千二百八十六噸
他の諸艦 八隻 一萬六千五百九十九噸
驅逐艦 四隻
水雷艇 八隻

▲丁抹國 水雷艇一隻新造せらたる外海防艦一隻及砲艦六隻の改造せられたるものあるのみ

現時の海軍力は

裝甲艦 五隻 一萬五千五百六十八噸
他の諸艦 四隻 六千六百三十四噸
水雷艇 二十四隻

▲智利國

裝甲艦 三隻 二萬一千五百一噸
他の諸艦 八隻 一萬九千八百八十噸
驅逐艦 六隻

水雷艇 十四隻

▲ノルウェー國

裝甲艦 四隻 一萬四千八百六噸
他の軍艦 六隻 四千八百九噸
驅逐艦 二隻
水雷艇 二十九隻

▲ポルチユガル國

- 装甲艦 一隻 二千九百七十二噸
- 他の諸艦 十二隻 一萬五千六百二噸
- 驅逐艦 三隻
- 水雷艇 十隻

▲土耳其國 昨年より海軍の革新計畫に着手したるが未だ詳ならず
現時の海軍力は

- 装甲艦 二隻 一萬三千七百三十三噸
- 他の諸艦 十隻 一萬四千八百七十五噸
- 水雷艇 三十八隻

▲希臘國

- 装甲艦 三隻 一萬四千四百二十四噸
- 他の艦船 四隻 二千二百六十噸
- 水雷艇 なし

▲ルーマニア國

- 軍艦 九隻
- 水雷艇 二十七隻

▲ベリユ一國

- 軍艦 六隻
- 水雷艇 なし

▲メキシコ國

- 艦船 五隻あるのみ

▲ブルゲリア國 佛國に於て建造せられたる二十六節水雷艇三隻竣工せり
現時の海軍力は

- 小艦 五隻
- 水雷艇 六隻

六大海軍國戰艦巡洋艦一覽表(日英米獨佛露)

(日本國軍艦の類別等級も他と比較の便宜上第一章第一節に掲げたる標準に依れり)

日本國戰艦		英國戰艦	
艦名	排水量、噸	艦名	排水量、噸
攝河	二〇八〇〇	ネプチューン	二〇〇〇
安内	一九八〇〇	コーリングヘッド	一九二五〇
薩摩	一九三〇〇	シント、ヴェインセント	
鹿島	一六四〇〇	ヴァンガード	
香取	一五九五〇	メルロフオン	
石見	一三五一六	テメレーア	一八六〇〇
肥前	一二七〇〇	シユベリア	一七九〇〇
三朝	一五二〇〇	ドレッドノート	一六五〇〇
敷島	一四八五〇	ロードネルソン	
島根	一五二〇〇	アガメノン	
模範	一八九八	エドワード七世	
防衛	一九〇〇	コムモンウェルス	
士	一八九六	ドミニオン	
		ヒンダスタン	
		ニューイラン	
		アフリカ	
		ブリタニア	
		ハイバーニア	

第一編 列強海軍力比較 第一章 列強海軍力

スウィフトシュニア	一一八〇〇	一九〇三
トライアムフ		一九〇三
クイーン		一九〇二
プリンスチフウエールス	一五〇〇〇	一九〇二
アルペマール		一九〇一
コーンウォリス		一九〇一
ダンカン		一九〇一
エキスマス	一四〇〇〇	一九〇一
ラッセル		一九〇一
フォームガアル		一九〇一
イレシスチアル		一八九八
イムブラケアル		一八九八
ロンドン	一五〇〇〇	一八九九
ヴェネラアル		一八九九
アルヴァーク		一八九九
カノパス		一八九九
グロリー		一八九七
アルピオン		一八九九
ゴライアス	一二九五〇	一八九八
オーシヨン		一八九八
ヴェンシアン		一八九九

佛 國 老 戰 艦		露 國 老 戰 艦	
艦 名	排水量、噸	艦 名	排水量、噸
アイナツ	一三三四〇	プランテンブルク	九八七四
インシアナ	一〇二八八	キユルフェルストフリ	一八九一
マサチユイセツ		ワイセンブルク	一八九一
オレン		ウエールト	一八九二
四隻 四萬二千二百四噸		四隻 三萬九千四百九十六噸	
サノルイ	一一〇九〇	ツリアスグイアチテリア	一八九三
ゴロア	一一〇〇五	ゲオルギボビエドノセツ	一八九二
シヤールマギーユ	一一〇〇八	シノーブ	一八九七
シヨールギベリ	一一六三七	ロスチスラウ	一八九六
シヤイルマルテル	一一六九三	ワグエナツトアボスト	一八九〇
カルター	一一九五四	ロフ	
フランニユ	一一一九〇		
ゴイシユ	一〇五八一		
アンリ四世	八八〇七		
九隻 九萬九千六百六十五噸		五隻 五萬九千九十一噸	
進水年	一八九六 一八九六 一八九五 一八九三 一八九三 一八九四 一八九一 一八九六 一八九九	進水年	一八九三 一八九三 一八九三 一八九三 一八九三

日 本 國 一 等 巡 洋 艦		英 國 一 等 巡 洋 艦	
艦 名	排水量、噸	艦 名	排水量、噸
波 吹	一三七五〇	インデアチガアル	一九〇〇
吹 馬	一四六二〇	インゲインシアル	一九〇七
日 蘇	七七二六	インフレキシアル	一九〇七
進 日	七七二六	インドミタアル	一九〇七
雲 手	七七〇〇	ミノトール	一九〇七
雲 手	七七〇〇	シヤンソ	一九〇七
雲 手	七七〇〇	デフェンス	一九〇七
雲 手	七七〇〇	シュエークオフェンバ	一九〇七
雲 手	七七〇〇	アラックプリンス	一九〇七
雲 手	七七〇〇	アチールス	一九〇七
雲 手	七七〇〇	コクレイン	一九〇七
雲 手	七七〇〇	ナタル	一九〇七
雲 手	七七〇〇	ブーリオル	一九〇七
雲 手	七七〇〇	デヴォンシャイア	一九〇七
雲 手	七七〇〇	アンツリム	一九〇七
雲 手	七七〇〇	アッシュ	一九〇七
雲 手	七七〇〇	カーナヴォン	一九〇七
雲 手	七七〇〇	ハムプシャイア	一九〇七
九隻 九萬九千六百六十五噸		五隻 五萬九千九十一噸	
進水年	一九〇六 一九〇五 一九〇七 一九〇七 一九〇七 一九〇七 一九〇七 一九〇七 一九〇七 一九〇七 一九〇七 一九〇七 一九〇七 一九〇七 一九〇七 一九〇七 一九〇七 一九〇七 一九〇七	進水年	一九〇三 一九〇三 一九〇三 一九〇三 一九〇三

第一編 列強海軍力比較 第一章 列強海軍力

佛國一等巡洋艦				露國一等巡洋艦			
艦名	速力	排水量、噸	進水年	艦名	速力	排水量、噸	進水年
ミルウォーキー	二三		一九〇四	ルーン	二二	九三五〇	一九〇三
ウエストヴァージニア	二三		一九〇三	ヨルク	二一		一九〇四
カリフォルニア	二三		一九〇四	プリンツアダルベルト	二〇半	八八五八	一九〇〇
コロラド	二三	一三六八〇	一九〇三	フリードリッヒカール	二〇半	八七五九	一九〇二
マリイランド	二三		一九〇三	プリンツハインドリッヒ	二〇半		一九〇〇
ペンシルヴァニア	二三		一九〇三	フュルストビスマルク	一九	一〇五七〇	一八九七
サウスダコタ	二三		一九〇四				
ニューヨーク	二二	八二〇〇	一八九一				
ブルークリン	二一	九二二五	一八九五				
十五隻 十八萬六千五百九十五噸				十一隻 十三萬七百四十五噸			
エガールキネー	二三	一三七八〇	一九〇七	リニョリツク	二二	一五〇〇〇	一九〇六
アルテックルソー	二三		一九〇八	アドミラルマカロフ	二三		一九〇六
エルネールナン	二三	一三四二七	一九〇六	バヤン	二二	七九〇〇	一九〇七
ジョーリスシユン	二三	一二三七〇	一九〇六	ブラダ	二二		一九〇六
レオングムメツダ	二二		一九〇一	クロモボイ	二〇	一二三三六	一八九九
ジョールフェリー	二二	一二三五二	一九〇三	ロシア	二〇	一二一三〇	一八九六
ヴァイクトルユーゴ	二二		一九〇四				

日本國二等巡洋艦				英國二等巡洋艦			
艦名	速力	排水量、噸	進水年	艦名	速力	排水量、噸	進水年
コンデ	二二		一九〇二	クレツセント	一九・八	七七〇〇	
クロアール	二二		一九〇〇	エツガー	二〇	七三五〇	
マルセーエーズ	二二	九八五六	一九〇〇	エンシミアン	二〇	七三五〇	
アマラルオーア	二二		一九〇二	シアラルター	一九・八	七三五〇	
ゲイドン	二二		一九〇二	クラフトン	二〇	七三五〇	
モントカーム	二二	九三六七	一九〇〇	ホーク	二〇	七三五〇	
ジュブチートナール	二二		一九〇一	ローヤルアーサー	一九・八	七三五〇	
ジャンダルク	二二	一一〇九二	一八九九	セシユース	二〇	七三五〇	
十五隻 十六萬九千二十七噸				六隻 六萬三千百六十六噸			
津宗笠千	二二	四七六〇					
輕谷置鏡	二三	五四一六					
	二〇	六五〇〇					
		六六三〇					

四隻 二萬三千三百六噸	米國二等巡洋艦	ガイアナ	一九半	五六〇〇
		ガイド	一九半	
二十六隻 十六萬千八百十噸	獨逸國二等巡洋艦	ドーリス	一九半	五七五〇
		エクリプス	一九半	
		アイシス	一九半	
		シュエノ	一九半	
		ミナーヴァ	一九半	
		タルボット	一九半	
		ヴァイナス	一九半	
		アロガント	一九半	
		フューリアス	一九半	
		クラジエーター	一九半	
		ヴァインジクチーヴ	一九半	
		ハームス	一九半	
ハイフライアー	一九半			
ハイアシンス	一九半			
チャレンジャー	一九半			
エンカワンター	一九半			
五八八〇				

三隻 二萬六百二十噸	佛國二等巡洋艦	コロンビア	二二・八	七三七五			
		ミリアポリス	二三				
六隻 三萬四千二百四十五噸	露國二等巡洋艦	オリムピア	二一牛	五八七〇			
		カイセリンアウグスタ	二一				
		フライヤ	一九半				
		ヘルタ	一九半				
		ヴァイクトリアリユイス	一九半				
		ハンサ	一九半				
		ヴァイネタ	一九半				
		五七九一					
		三隻 二萬六百二十噸	佛國二等巡洋艦		ズセー	二二	七五七八
					ツノブレ	二二	
					クレベル	二二	
					ジュベニイドローム	二〇	
ダントルカスト	一九						
ギシヤン	二三						
シヤアートルノール	二三						
アリユイ	一八						
六六七六							
六隻 三萬四千二百四十五噸	露國二等巡洋艦			バムヤットアツヴァ	一八	六七三四	
				オーロラ	二〇		
				ツアナ	二〇		
		アスכולド	二三				
		ボガツール	二三				
		カガル	二三				
		オツチヤコフ	二三				
		オレク	二三				
		六六四一					
		六隻 三萬四千二百四十五噸	露國二等巡洋艦	パムヤットアツヴァ	一八		六七三四
				オーロラ	二〇		
				ツアナ	二〇		
アスכולド	二三						
ボガツール	二三						
カガル	二三						
オツチヤコフ	二三						
オレク	二三						
六六四一							

船名	速力	排水量、噸	船名	速力	排水量、噸
シヤルネー	一八	四七〇二	新艦六隻	二五	三五〇〇
ラツトシユツレザイル	一八	四六八一	ボイシシア	二三	三三〇〇
ボチエオー	一九	五三七四	ダイアモンド	二三	三〇〇〇
シュリアンドラクラワイ	二三	五五九五	サツファイア	二二	
エール			トパーズ	二二	
十二隻 七萬八千五百四十一噸			アストレーア	一九半	
日本國三等巡洋艦			カムリアン	一九半	
石磨泉洲田立島速穂高島羽	二〇	二六五七	チヤリアジス	一九半	四三六〇
叫須和秋千禧殿浪新高對音	二〇	二九五〇	フロラ	一九半	
津代千	一八	二九五〇	フォールト	一九半	
	一九	三一五〇	フォックス	一九半	
	一七	二四五〇			
	一七	四二七七			
	一七	三七〇〇			
	一八半	三〇〇〇			
	一八半	三三六五			
	二〇	三〇〇〇			
	二〇	三〇〇〇			
	二〇	三〇〇〇			
	二〇	三〇〇〇			

五〇

船名	速力	排水量、噸	船名	速力	排水量、噸
利鈴	二五	三〇八〇	ハルミオン	一九半	
根谷	二三	四〇三五	エオラス	一九八	
十四隻 四萬六千六百十三噸			アリアント	一九八	
			インデファチガアル	一九八	
			イワイゼニア	一九八	三六〇〇
			ラトリーナ	二〇	
			サツフォ	二〇	三四〇〇
			スシラ	二〇	
			シリウス	一九八	三六〇〇
			タープシチョーア	二〇	三四〇〇
			フィロメル	一九	二五七五
			ペロラス	二〇半	
			プロサーバイン	二〇	
			ペガサス	二〇	
			パーシユース	二〇	二二三五
			プロメシユース	二〇	
			ピラミユス	二〇	
			パンドラ	二〇	
			パイオニア	二〇	二二〇〇
			サイチ	二〇	
			サイチ	二〇	
三十七隻 十一萬四百五噸					

第一編 列強海軍力比較 第一章 列強海軍力

五一

米國三等巡洋艦				獨逸國三等巡洋艦			
艦名	速力	排水量、噸	艦名	速力	排水量、噸	艦名	速力
アトロイト	一八半	二〇八九	グファイオン	二〇	三七二二	ライプツヒ	二二
マイアルヘッド	一八半		イレネ	二〇		ダンツヒ	二二
モントゴメリー	一八半		プリンチエスウィルヘルム	一九	四二三三	コエニグスベルグ	二二
アルバニー	二〇	三四八七	ガチエレ	二二		スチュットガルト	二二
ニューオレルアンズ	二〇	三四一三	ニオベ	二二		ニルヌベルグ	二二
メルチモア	二〇	四四一三	メジュサ	二二		ステツチン	二二
シカゴ	一八	五二七三	ニムフェ	二二		フアイル(代)	二四
ニューヨーク	一九	四〇九八	アマゾネ	二二		ドレスタン	二四
サンフランシスコ	一九半		アリアドネ	二二		コルベルグ	二五
シンシナチ	一九	三二一三	テチス	二二		マインツ	二五
ラレー	一九		フラウエンロツプ	二二		新艦二隻	
パーミンガム	二四		アルコナ	二二			
チエスター	二四	三七五〇	ウンジネ	二二			
サレム	二四		アンメン	二二			
			ハムブルグ	二二			
			ベルリン	二二			
			ミュンヘン	二二			
			リユベツク	二二			

佛國三等巡洋艦				露國三等巡洋艦			
艦名	速力	排水量、噸	艦名	速力	排水量、噸	艦名	速力
ダウー	二〇	三〇三一	ライプツヒ	二二	三三四六	ライプツヒ	二二
イノアー	二〇	二三〇八	ダンツヒ	二二	三三四六	ダンツヒ	二二
ガリレ	二〇	二三一八	コエニグスベルグ	二二	三三九六	コエニグスベルグ	二二
ラヴェアツエー	二〇	二二八五	スチュットガルト	二二	三五四四	スチュットガルト	二二
ダストレー	二〇半	二四二一	ニルヌベルグ	二二	三七四〇	ニルヌベルグ	二二
			ステツチン	二二		ステツチン	二二
			フアイル(代)	二四		フアイル(代)	二四
			ドレスタン	二四		ドレスタン	二四
			コルベルグ	二五		コルベルグ	二五
			マインツ	二五		マインツ	二五
			新艦二隻		四二〇〇	新艦二隻	

第一編 列強海軍力比較 第一章 列強海軍力

インフェルネー	二〇年	二四三五		
アルゼー	一九	四三一三		
イスリ	一九	四四〇六		
シヤッスルーローパー	一九三	三八二四		
フリアン	一九三	三八八二		
バスカル	一九三	三九五二		
デーカルト	一九	三九七〇		
カツサール	一九	三八九〇		
グッサー	一九	三九六二		
ジュンヤイフ	一九	三八九〇		
カチナー	一九	四〇四八		
プロター	一九	四〇〇一		
コスモオ	二〇年			
フォルパン	二〇年			
ラランド	二〇年			
シエルグー	二〇年			
二十一隻 六萬六千七百七十三噸			二隻 六千三百九十一噸	

第二章 海軍々備の標準

▲軍備益々強大なれば國威を振張し國家の意志を遂行するに益々便宜なるへきは論を待たず然れとも現世の如き高價なる軍備は之を無限に施設し且つ之を維持すること富力の甚大なる邦國と雖とも決して能くする所に非るのみならず軍備の過大なるは却つて他の點より禍害を醸すの源たらずんはあらず是に於て一國の軍備は凡そ一定の限界内に施設せらるゝの要あり而して侵略主義を以て軍備の標準を定むるは現世列國の敢てせざる所にして何れも其標準を國防より割り出すを例とするを見る但し國防の範圍も其見解により廣狹大小あるを免れざるが故に歐洲に於ける或る國の如き其軍備を畫するに當り國防の範圍内に於て大程度に其標準を定むる者もあれとも列國中國家經濟の關係より或は政略上の關係より其程度を最小ならしめん事を圖る者亦尠なからず帝國海軍々備の標準の如き國家の目的よりして頂らく此の後者に屬すへきを知らざるへからず抑々一國が止むを得ずして外國を敵とせざるへからざる場合に於て其國土及領地を

防衛保全すべき事は動かす可らざる國防の原則なるに併せて其國威國權を擁護し又國利民福を保護せんか爲に平和を速かに克復する事は國防の目的上絶對的必要なるか故に之を成すに耐ふべき強力なかる可らす而かも瀕海の國に在ては海上の交通貿易其他海上事業を防衛するの事亦上述國防の目的を達すべき重大事項中に屬する一要素たるべきなり左れば或る一國が國防を目的とする最小程度の軍備を施設するの義を約言すれば防護せらるべき要點の價値と敵とすべき兵力とを考量して定めたる最低標準に適合する如く施設するにあり(上述最低標準の軍備が其國の富力の範圍に於て施設せらるべきを得ば幸ひなりと雖とも萬一富力の許るざる場合に於て國債其他の方法に依らざる可らざる種類の研究は本書の趣旨以外に渉るを以て爰に贅せず)

〔備考〕一英國は其國防の大計として最強二國海軍方に匹敵するに足るべき程度の勢力を維持するを其海軍々備の標準とす同國は四面環海の島國たる關係よりして其海上貿易の保護(海外より受くる食料品の供給を杜絶せらるゝ如きは殊に絶大の痛苦を感すべき打撃なるか故に之が保護は死

活的問題たり)が國防上極めて重大視せらるゝ事は世人の知る所なるが近時獨逸國の海軍擴張決行に對し英國も今や新たに建艦計畫を定めざる可らざるに臨みタイムス紙上建艦費と海上貿易額の關係を論じたる一篇あり左に掲げて軍備に依り防護せらるべき一要點の價値に關する參考に供せんとす

吾等は實に莫大なる海軍費支出の至難を認めざるにはあらざれど一たび英國が其驚くべく多數なる船舶と巨額の海上貿易とを保護せんが爲め優越なる海上權力に俟たざるべからざることを念へば如何なる苦痛をも固より忍ばざるべからず英國の海上權力が一朝にして劣勢を示すの時は即ち歐洲の平和が擾亂せらるゝの時機たるべし此時に立ち至らば如上無數の船舶が直ちに敵巡洋艦の好餌となり且莫大の海上貿易が容易に破壊せらるべきは既往歴史の證明する所にして之を避くべき唯一の手段が即ち海軍の新計畫にこれ存すとせば該關係の方面よりして新計畫費の費額をば課税なる名稱の下に進んで寄附するが寧しる至當

たるべし頃日精査の上に發表せられたる一昨年度の輸出入が總計拾億萬磅なるとを知らば該總額の一パーセントを分つて海軍費に充用するとするも一箇年壹千萬磅(約壹億萬圓)を得べきにあらずや此外尙ほ留意すべきは英國が使用する船舶の總價格及び内國の沿岸貿易額即ち是れなり此額は前記の輸出入額中には全然算入せられざるものにして而かもなか／＼に巨額なるは明確なるが故に之を合算するときは課稅率も亦一パーセントよりは更らに遙かに減少すべきを疑はず要するに爰に論題とせる課稅をば如何なる形體と名目とを以て實行すべきやは當局者の考究すべき任務にして吾等の容喙する限りにあらざれとも吾等は之を以て海軍の新計畫に對する最も適良の財源たりと信すると共に如何なる課稅と雖ども之が創定の際には多少の苦情を免かれざるを例とするが故に一時の惡評に避易して之が決行を躊躇するは固より智者の事に非ずと謂はざるべからず一昨年之の海軍大演習に際して僅々三日間に二百餘隻の船舶が劣勢なる侵入艦隊の爲にすら直ちに捕獲せられたる

の事實は吾等英國民をして最も戰慄せしめたる所に非ずや云々

二、我日本帝國に至ては戊申の詔書に於て諭させ玉ふ如く神聖なる祖宗の御遺訓と光輝ある國史の成跡とは炳として日星の如きものあり乃ち軍備に依り防衛せざる可らざる眞價は極めて重大にして諸外國の比に非るを覺るべきなり

▲帝國海軍は由來國防を目的とする最低標準を定め之が充實に腐心しつゝありたるも未だ能く其終點に達せざる内に不幸にも國交の破裂を來すを例とせり願るに日清日露の兩戰役は我將卒の忠誠勇武と技倆拔群とに依り空前の大捷を制したること論を待たざれども對手國海軍の戰略著るしく拙なりし事が軍備未充實の我海軍をして攻勢的國防戰に成效せしめ其結果は海陸大進撃に轉するの機會を與へ始めて完全なる國防の目的を達するを得せしめたる一大因にして至幸中の至幸なるを感せしむると同時に國防の好例鑑を最近に世界に供給せり即ち國防の目的を達すへき最小程度を標準とする軍備とは決して守勢防禦を意味するものに非ず何となれば守勢防禦を以てしては國防の目的を達する事不可能な

る場合最も多ければなり殊に我邦に在ては其地勢と清韓兩國の關係とよりして必らず攻勢防禦を大方針とせざれば到底國防を完ふする能はざるを知るへし若し日清日露の兩戰役に於て我邦海軍が攻勢防禦に出る事能はさりせば則ち奈何換言すれば我は守勢防禦を執りて我軍港に據り敵國艦隊が攻勢防禦に出て、其戰線を進め朝鮮海峡を扼すると同時に其陸軍は南下して韓國を占領するに至らば果して奈何縦令ひ帝國の國土は保全せられたりとするも國威國權は如何にして擁護せらるべきや海上の交通貿易を防衛し國利民福を保護するの事は何等の狀況に立到るべきや况して我海軍が守勢に在るに乘し敵國が其陸軍を帝國の一島地若は本土の一部を選ひて上陸せしめ二千五百有餘年神聖にして犯すべからざりし帝國國土の邊陲なりとも彼れが馬蹄に蹂躪せらるゝに至る事もあらは當に其地住民の慘狀絶大なるものあるに止まらず國防の本義は既に毀壞せらるべきに於てをや彼の蒲潮艦隊が執りたる不敏活なる太平洋岸の威赫的小行動すらも沿岸の民心を如何に畏怖せしめたるやに想到せば思ひ半はに過るものあらん是に於てか帝國々防は最小程度とするも攻勢防禦を執り得べき海軍軍備を有す

るに非れば之を完ふするを得ざるを知るべきと同時に將來敵たるべき海軍がいつも前例の如く拙劣なる戰略を執るへしと期待するは謂はれなき事なるに深く思ひを致さざる可らず

攻勢防禦なる語は矛盾したる兩語の聯結より成り意義不明瞭の感なきに非れとも之を換言すれば國防の前線を進めて我沿岸との間隔を時の形勢に應し必要の程度に遠からしむるの謂ひなりと解釋せば則ち可なり國防前線の退縮は即ち守勢防禦にして國土保全の事のみは或は得らるゝ事ありと雖とも完全なる國防の目的は到底達すべからざるなり
帝國國防を完ふせんか爲め攻勢防禦を執り得べき海軍軍備を算定し其最低標準を明確ならしむる事の如きは敢て本書の趣旨とする所に非されとも尙ほ第六章東洋の海上勢力比較の部に於ては更に本件に關し論及する所あり

第三章 列強海軍の競争及擴張の趨勢

第一節 日本帝國海軍建艦の豫想

今や帝國は上下一致して戦後の經營に努力しつゝあり而して其主眼とする所は國運の平和的發展を期するに在るを以て歐洲の一部に現はるゝか如き海軍競争等の事は帝國國民の夢想だもせざる所にして要は唯だ前章縷述せるが如く海軍の軍備をして國防を目的とする最小程度に達せしむるの必要を感ずるに止まる、但し今日迄之に對する特種新計畫の發表せられたるものを見ざるも従前存在する建艦費其他の繼續費豫算より推算して艦船建造の状況を豫想するに左の如し(從來官報新聞紙等に於て發表せられたるもの及齋藤海相が本年衆議院豫算分科會に於て説明したるものに基く)

(一)第三期海軍擴張費九千九百餘萬圓の内にて明治三十六年以後既に建造せられたる軍艦

戰艦鹿島(一萬六千四百噸)及香取(一萬五千九百五十噸)

裝甲巡洋艦伊吹(一萬四千六百二十噸)四十二年度竣工

右擴張費殘額を以て將來建造せらるへしと豫想する軍艦

戰艦(二萬餘噸)一隻

裝甲巡洋艦(一萬七八千噸)一隻

小艦二隻

右擴張費は當初明治四十六年度迄の豫定なりしも前年經費繰延の結果として明治四十九年度迄繼續する事となれり

(二)艦艇補足費一億二千三百餘萬圓の内にて明治三十七年服役中より既に建造せられたる軍艦

戰艦薩摩(一萬九千三百五十噸)四十三年度竣工及安藝(二萬九千八百噸)四十四年度竣工

裝甲巡洋艦筑波(一萬三千七百五十噸)生駒同上及鞍馬(一萬四千六百二十噸)四十四年度竣工)巡洋艦利根四千噸四十二年度竣工

右補足費の殘額を以て將來建造せらるべしと豫想する軍艦

裝甲巡洋艦一隻(一萬七八千噸)

小艦二、三隻驅逐艦潛航艇等若干

經費繰延の結果四十七年度迄繼續する事となれり

(三) 補充艦艇費七千六百餘萬圓を以て四十六年度迄繼續事業として建造せらるべき軍艦豫想

戰艦一號及ロ號(二萬餘噸)攝津及河内と命名せらるべきもの

裝甲巡洋艦一隻

小艦二、三隻驅逐艦數隻潛航艇若干

要するに帝國海軍が今日以來明治四十九年度末迄に増加すべしと豫想し得べき軍艦は大戦艦三隻、大裝甲巡洋艦三隻と小艦數隻驅逐艦潛航艇共各數隻なりとす、今後更に新建艦計畫を定むる事に依り始めて國防を目的とする最小程度の軍備標準に達すべき事は第四章列強艦隊の將來及第六章東洋の海上勢力の部に於て論及する所あり建艦以外の主要なる事業は第三編第一章豫算の部に詳なり

第二節 列強建艦計畫の競争

近來歐米各國中其國防上の見地より若くは海上貿易保護の必要より銳意海軍の増勢に力むる者尠ならず某國が戰艦一隻を起工すれば隣國は二隻を造らんとするが如き競争的狀態は屢々實現する所なり殊に獨逸國の躍起的態度と米國が突飛して一大優勢を維持せんとする覺悟とは共に一偉觀たるを失はず又清國が西班牙が期せずして東西同時に海軍再興を企圖すれば英獨其他の強國が之を請負はんとして激甚なる競争的手腕を示すあり土耳其國亦海軍増勢の仲間入をなさんとし恰もバルカン半島風雲の急なるものあるが爲に一層世人の注意を惹きたるが如く露國は海軍の再興を圖り造艦を急かんとして國會の紛議を招ける等なか／＼に斯界の活氣を認むべきなり而して就中競争の著るしきものを英獨兩國の其れとなす

第三節 英國と獨逸國との建艦計畫競争

由來海上に於ては優に列強を壓伏するに足るべき大勢力を有する英國が今後も常に強勢なる海軍を維持して海上王たるの實を保持する事は立國の上より絶對的必要なりとして擧國一致する所なり左れば前きに率先して巨艦ドレッドノートを建造し以て軍艦の型種に一新面目を開きたる如きは同國の大に誇りとする所なるが如上の進歩を來せると同時に軍艦建造費亦莫大の額に上らんとするの一事が自ら之に伴ふは免れざる數にして流石の英國も近時海軍費輕減の方法に苦慮すること一方ならざるは一昨年平和會議に提出したる軍備制限案及び昨年傳へられたる藏相の建艦制限案(獨逸國と協商して互ひに建艦を制限せんとする案)其他の輿論に徴し最も明白なるを覺ゆ然るに如上提案はいつも獨逸國の主張の爲に其目的を達せざるのみならず獨逸國は先年其大方針として殖民政策の發展を畫し海上雄飛政策を宣してより海上通商は日一日に増進して著しき巨額に達せんとすると共に海軍力の勃興目醒ましきものある事が將來何等かの形に於て英國の國利を傷くるに至るべしとの感念を英人に興ふるが爲め今や却つて英國の競争を促し建艦新計畫に従事するの結果を來せり尤も獨逸皇帝は自國の海

軍擴張を以て單純に帝國沿岸の防禦と海外に於ける同國の利益を保護せんが爲に外ならずと辯じ決して英國海軍に拮抗し又は英國に向つて攻撃的態度を採らんとするの意志なきを表明するに力められつゝあれども獨逸國の眞意が果して爰に在ると否とを問はず其擴張計畫が豫定の如く實行せらるゝに於ては英國に取つて其北海を隔て二十四時間航程以内に一大新銳海軍の隆起を見る次第なれば萬一にも英國海上權が此種強力の爲に脅迫せられ得べき自然の成行きに放任するを得ずと爲すは理の當に然るべき所なり蓋し英國の海上權が一朝失墜する時は即ち英國の無數船舶が果敢なくも敵巡洋艦の鋭牙に罹り世界に冠絶せる海上貿易が苦もなく破壊せらるべき危機なるが故に英國が莫大なる海軍費の出處に慚なからざる頭痛を感じながらも決然として更に大々的新計畫を立つる事を最近に内定せる所以ならずんばあらず扱て獨逸國既定の計畫は千九百二十年明治五十三年迄に戰艦三十八隻裝甲巡洋艦二十隻巡洋艦以下三十八隻水雷艦艇百四十四隻の北海艦隊を有するに在りて英國は之に對し同年迄に戰艦七十六隻裝甲巡洋艦四十隻巡洋艦多數水雷艦艇二百八十八隻の北海艦隊を編成せざる可ら

ずとの論者を見る等萬障を排しても優勢海軍力を維持せんとして他を顧みざるの意氣込ある蓋し偶然にあらざるを察すべきなり

第四節 英國建艦計畫

英國は海軍に關するあらゆる設備宏大にして殊に造艦力に至ては寧ろ驚嘆を値ひすへきものあり左れば他國の如く何年計畫と稱せらるゝ如き氣長き擴張計畫は同國の執らざる所にして時勢の須要に應じ年々新計畫を定め短時日を以て速かに之を進水竣工せしむるを最も得意とし又國民は常に政府を促して決して必要の標準に後れさらん事に極めて熱心なるは年々議會場裏に於ける名士の言論に依り明白なるを見る第一章英國海軍力最近異動の部に記述したる如く昨年千九百八年起工の艦船を以て現存建艦計畫を終了せるが故に更に本年より新計畫に着手するに決定せる由にして其艦數等は未だ詳ならざるも獨逸國に於て實行中の擴張計畫に對し殆んど二倍すへき程度を以て短期計畫を定むべきや疑を容れざるなり左に掲ぐるものは同國新聞紙の傳ふる風説なるが參考の爲め附記す

る事とせり(最近報に依るに政府は本年度の爲め戰艦四隻防務艦六隻驅逐艦六隻の準備を爲さんとすの案を提出せるが如し)

英國製艦計畫(起工)	戰艦	裝甲巡洋艦	小巡洋艦	驅逐艦
千九百九年(本年)	六隻	一隻	三隻	二十四隻
千九百十年	六隻	一隻	三隻	二十四隻
千九百十一年	六隻	二隻	三隻	二十四隻
千九百十二年	六隻	二隻	三隻	二十四隻
合 計	二十四隻	六隻	十二隻	九十六隻

又建艦以外の事業中ロジス根據地の設備(十年計畫)の如きは其主要なるものなり

第五節 米國建艦計畫

米國は近年急激なる海軍力の飛躍を示し其擴張に一段落を告げ大艦隊新編制の結果一昨年來太平洋艦隊を太平洋に回航するの壯舉を演したる次第なるが世界の趨勢と同國政策の大綱は更に益々海軍擴張の必要を感せしめ一昨年起工せる

二隻のデラウエア型二萬噸艦に續ひて昨年(千九百八年)も更に戦艦四隻偵察巡洋艦四隻驅逐艦十隻潜航艇四隻軍需供給船一隻工作船一隻水雷敷設船二隻給炭船四隻を起工せんとするの豫算案を議會に提出したるが審査の結果戦艦二隻驅逐艦十隻潜航艇八隻の建造に着手するに決し尙ほ戦艦二隻或は以上は毎年起工するの方針なるが如し建艦以外主要なる事業として國防委員會議の提案はマニラ及比律賓島諸港の防備の爲二百萬磅を支出しマニラ灣には十四吋砲六門十吋砲一門六吋砲四門三吋砲八門十二吋臼砲八門を備へんとしスピッグ灣には十吋砲二門六吋砲四門三吋砲八門を又ベアル港には十四吋砲二門十二吋砲二門三吋砲四門十二吋臼砲十六門を又ガンタマモには十二吋砲六門六吋砲四門三吋砲八門十二吋臼砲八門を裝備するに在りと云ふ又最近(本年一月)に傳ふる所に依れば新海軍卿ニューベリー氏は大西洋艦隊世界巡航の結果將來米國海軍の改良すべき點につき意見を發表したる由にして其大要左の如し

一、米國戦艦中にて最近の建造にかゝる八隻の主要武器たる十二吋砲につきては其穿甲力につき種々の非難ありたるも今之を列國海軍の使用にかゝる艦砲に

比すれば却て有力なり

二、米國海軍は列國の司令長官との權衡上新に海軍中將の官位を設くるの必要あり

三、布哇パール港内に建造せらるべき海軍船渠は一時に二隻以上の戦艦を入渠せしめ得るやう八百五十呎より千百四十呎の長さに延長するの必要あり

四、紐育費府、ノースウォルフ、ピュゼットサウンド及びメーヤアイルランド軍港の造船所は及ぶだけの擴張するの必要あり

五、桑港に於て買収若くは建造により新に一船渠を設くるの必要あり

六、政府は議會に對し戦艦四隻巡洋艦四隻驅逐艦十隻潜航艇四隻石炭運送船三隻工作船一隻彈藥運送船一隻水雷敷設船二隻の建造を要求すべし

又下院は右の如く政府より要求せる戦艦の數を二隻各二萬五六千噸に減し其他を約半減して可決したりとの報あれども未だ詳ならず

第六節 獨逸國建艦計畫

獨逸國の政策と近時歐洲外交の推移とが同國をして益々海上勢力の擴張を強行せしむるに至れるは既に續述せる如くにして前に千九百年に決定し更に千九百六年に修正したる海軍擴張の法律は左記第一案の如くなるが一昨年(千九百七年)に於て戰艦の艦齡に關する從來の規定(二十五年)を二十年に減縮したる結果昨千九百八年より左記新案の如く變更せられたり

第一案(千九百年に決定し更に千九百六年に修正したるもの)

起	工 隻 數		
	戰艦	大巡洋艦	小巡洋艦
千九百八年	二	二	二
千九百九年	二	二	二
千九百十年	二	二	二
千九百十一年	二	二	二
千九百十二年	二	二	二
千九百十三年	二	二	二
千九百十四年	二	二	二

新案千九百八年修正せられたるもの

起	工 隻 數		
	戰艦	大巡洋艦	小巡洋艦
千九百十五年	二	一	二
千九百十六年	一	一	二
千九百十七年	二	一	二
計	十四	十	二十

起	工 隻 數		
	戰艦	大巡洋艦	小巡洋艦
千九百八年	三	一	二
千九百九年	三	一	二
千九百十年	三	一	二
千九百十一年	三	一	二
千九百十二年	三	一	二
千九百十三年	三	一	二
千九百十四年	三	一	二
千九百十五年	三	一	二

	千九百十六年	一	一	二
	千九百十七年	一	一	二
計		十八	十	二十

而して擴張費の目的は千九百二十年(明治五十三年迄)に戦艦三十八隻、大巡洋艦二十隻、小巡洋艦三十八隻、水雷艦艇百四十四隻を有する大艦隊を編成せんとするにあり。建艦以外の事業中ウキルヘルムスハーフェン、キール、ヘリゴランド等の設備は其主要なるものとす。又最近報道は千九百九年分の戦艦を已に昨年に起工したるを傳へ、其他前記計畫中の装甲巡洋艦を順次起工する事をなさず、先づ六隻を速かに着手するの案を議會に提出せんとすと傳ふれとも、信偽確實ならず。

第七節 佛國建艦計畫

先年一時潜航艇、水雷艦艇の如き種類のものをも多數建造するの方針を執り、以て隣強と對峙するの策を講じたるが、近年は該方針を改めて大艦政策に復歸するに至

り。一昨年の議會に於て當局者は左の如き提案をなし、之が通過に多大の力を盡したるを見たり。

千九百二十年(明治五十三年迄)に其海軍力を増加して戦艦三十八隻、装甲巡洋艦二十隻、偵察艦六隻、驅逐艦百九隻、水雷艇百七十隻、潜航艇百三十隻と爲す事。右は全然隣國たる獨逸國の擴張計畫に對するものなる事明らかなるが、同案並に年度割計畫は其後確定の運びには至らざりしも、兎に角千九百二十年迄に大戦艦を幹部となす大艦隊を編成するに非れば、歐洲に於ける其地位を維持し難しとの結論に付ては、舉國異議なきものゝ如く、最近に新海軍卿ピカール氏の宣言せる所に依るも、同政府は毎年二乃至三隻の大戦艦起工案を議會に提出せんとするを知るべきなり。又大方針としては千九百二十年迄に三十八隻の大戦艦を有すへき案を決定するならんと傳ふ而して、今後の竣工艦を豫想するに千九百六年(明治三十一年)計畫の戦艦六隻(即ちダントン型)一萬七千七百十噸の中二隻は千九百十年(明治四十三年)に、四隻は千九百十一年に竣工すべく、昨千九百八年には起工の戦艦無く千九百九年(本年)及十年には二萬噸艦六隻起工せらるへき豫定なるが如し。又建

艦以外には軍港根據地設備の改良整備等の外大なるものなし

第八節 露國建艦計畫

曩きに千九百四年より七ヶ年計畫を以て七億五千萬留を支出し戦艦十隻装甲巡洋艦十二隻小巡洋艦十二隻驅逐艦水雷艇若干を建造するの議を決し装甲巡洋艦リューリック、アドミラルマカロフ、バラダ、バーヤンの四隻を千九百五年に起工したるが千九百六年に至り同案は撤回せられ更に九ヶ年計畫を立て一九一四年迄に三億八千萬留を支出し戦艦十二隻(内黒海の分三隻)装甲巡洋艦十一隻(内黒海の分七隻)小巡洋艦四隻(黒海の分)驅逐艦四十六隻(内黒海の分二十八隻)水雷艇十八隻潜航艇十隻砲艦七隻其他を建造する事に變更せられたるが同案に依り千九百六年に起工の豫定なる戦艦二隻は其後延期せられ驅逐艦潜航艇は着手せらるゝを見たり然るに昨千九百八年(明治四十一年)に至り右計畫も更に變更せられ當局者は左の二案を審査したる上後者たる四ヶ年計畫を議會に提出したり

(一)十年繼續を以て二十一億五千七百萬留を支出し艦船建造其他の設備を施行

すへき計畫案

(二)四年繼續を以て四億五千萬留を支出し戦艦四隻其他を建造し且つ根據地修築を行ふへき計畫案

右兩案は討議の結果海軍の腐敗を刷新するに非れば建艦の事を議する能はずとの理由を以て下院の協賛を得ざりしが上下兩院の協議不調の結果前年度の豫算を用ひ得る規定に依り前に起工の等なる戦艦二隻千九百六年案に基くものにて今迄延期中の二隻(なり)の建造に着手すべしとは専ら外間に傳へられたる所なり〔備考〕蓋し建艦に對する反對者も敢て海軍の再興を絶對に不必要とするには非ず要は先づ海軍の改革を實行して軍制上の組織と人物の養成法とを改善せんとするに在り即ち艦船の建造は第二段とするの趣意に外ならず昨年の國民議會は全然戦艦の建造費を否決したるも其後參議院は新戦艦建造費千百萬留を復活可決したるが如き以つて艦船建造に關する議論の如何に紛糾せるやを察し得べきなり或極端論者は評して曰く露國海軍は病膏盲に入りて到底救ふべからざるが故に幾萬噸の大戦艦を建造するも國防

上何等價値を高むるを得ずと然れども今暫く海軍の腐敗云々を別問題とし同國現下の國情と周圍の狀勢とに鑑み果して大戰艦の建造を急ぐの必要を認むべきや否やに關し參議院に於ける一有力者の演説の要領を掲げんに近時歐洲外交の推移が海上權力の中心をして地中海より轉じて北海に移動せしめたるは極めて明白の事なりとす而して露國のポールチック海は直に北海と通ずるが故に國防上大戰艦隊を要すべしとの説は一見理由あるが如くなれども仔細に其地勢を察すればポールチック海は入口が瑞典那威と丁抹とに狹まれたる囊狀海にして同海の長さ實に五百裡に餘り其奥に長さ三百裡の芬蘭灣あり首府聖彼得堡は此の芬蘭灣の最奥に位置するは地圖の明示する所なり左れば假りに英國若しくは獨國の如き強海軍國の大艦隊が原速力を以て勇往直進して露國を攻撃するとせんか其囊狀海口に入りてより尙ほポールチック海に一晝夜半芬蘭灣に一晝夜を費やさざる可からず夜間は驅逐艦の蟻集的襲撃を受け大害を蒙るや必然なるのみならず晝間と雖も潜航艇の鋭牙に罹るなきを保す可からず况ん

や同海灣内は暗礁淺灘散點して布設水雷の効果と水雷艦艇の懸引とに至大の便宜あるに於てをや是れ露國は天惠的防禦をポールチック方面に有するものにして多數の驅逐隊潛航艇隊とスカウト種の艦船とを備へて護りとせば優に列強の大戰艦隊を沮止するを得べく最も經濟的方針なりとして喜はざるべからず其他には陸軍を以て獨逸方面よりの侵入に備ふるを要するのみ驟つて東洋を觀るに其軍港なる浦鹽港は露國が依て以て東洋に勢威を振はんとする唯一策源地たること明かにして將來是非とも大戰艦隊を備へて同港を根據とせざる可からず然れども同港の性質は全く西比利亞に於ける輸送機關の大成に依り始めて其能力を發揮すべきものなると共に冬季間結氷の天然的大障害を有するが故に碎氷に關する大々的設備を行ふに非ざれば完全なる根據地たること能はず加ふるに大戰艦隊を收容して一朝事あるに臨み遺憾なく行動せしめんと欲せば浦鹽方面其他に於ける百般の設備に着手するの要あるを知るべきなり故に東洋に大艦隊を遊弋せしめて國威を發展し國利を増進するの希望を滿たすには

如上三大事業を經營せんが爲に莫大の國費を投ずることを先決問題となさざる可からず然も尙ほ且つ少なからざる年月を要するや論を待たず是れ露國に取り容易ならざる負擔なるに一方に於て今よりポツ／＼大戦艦を建造するとせば上記三大事業完成の曉に至り是等戦艦は已に舊式老型の遺物と化すべきは輓近世界造艦術進歩の急激なるに徴し火を賭るよりも明かなり即ち知る露國たるもの先づ致々として如上大設備の完成に力め前途に奏効の光明を充分に認るに至りて始めて大戦艦を建造すること策の最も得たる所なるを然るに事茲に出でず今より一二隻の戦艦建造を急がんとするは體面を脩飾するの外に斷じて何等實益なきを疑はす云々要するに當局者の熱心に首唱しつゝある海軍再興計畫の事は未だ緒に就きたるものなく建艦以外に浦潮斯德海防案其他部分的設備の若干が議決着手せらるゝに止まるが如し

第九節 伊國建艦計畫

先年來財政上の關係よりして海軍擴張計畫は一時中止せられありしが地中海方面の大勢に鑑み最近に戦艦四隻建造の計畫を定め既に二隻を起工したり而して何れも一萬八九千噸の排水量を有せしむべしと云ふ

第十節 清國海軍再興計畫

清國海軍の再興問題は先年來屢々傳へられ且ついつも立消ゆるを例としたるが今や遠からず事實として現はるべき趨勢あり最近に計畫せられたる所に依れば全海軍を北洋南洋廣東の三艦隊に別ち各艦隊は戦艦一隻、一等巡洋艦一、二隻二等巡洋艦四、五隻三等巡洋艦五、六隻より成らしめ驅逐艦若干、水雷艇隊及び潜航艇を附し軍港は象山浦舟山島附近を中樞として北清及廣東附近にも夫々根據地を選定する事勿論なるべく海軍行政府に關しては其創設の準備中にあるか如し又海軍新設に要する經費に付ては内債を募りて創立費に充て鹽及茶に課税して經常費に充てんとするものと、恊くして時機を失するの虞あるか故に先づ外債に依り創設せんとするの二説ありと傳ふ又乗員の養成に付ては海軍學堂を復興して之

に充つる外留學生を外國に派遣せんとするの議あるが如し左れば列國は其海軍建設を請負はんとして運動に著手し或る國の如きは海軍編成に關する費用をも供給せんと申込みたる由なれども詳細に至ては未だ何等確定せるものなし

第十一節 西班牙國海軍再興計畫

往昔海軍の隆盛を以て歐洲に雄視したる同國も今は殆んど無海軍に齊しき落窶を極めつゝあるが昨年來世界の氣勢に鑑み海軍の再興を計畫し先づ戰艦四隻驅逐艦三隻水雷艇二十四隻砲艦四隻の建造と軍港の乾渠其他の設備に多大の力を用ひんとすと云ふ艦船の建造に就ては英獨造船會社の熱心なる競争を見たるが西國當局者の言明せる方針に依れば艦船の建造には七八年を要すべく戰艦は速力大ならず行動圏小に而かも兵裝は大なるべき一萬五千噸の特種を選み又經費に至ては外國に注文する方遙かに廉價なるを信ずれども強て内國に於て建造する事とし以て内國諸船廠の設備をして自然整頓せしむるの利益を收むると同時に多數の内國職工を雇使して興望に副はんとするが如し尤も英國造船會社の如

きは西國船廠の要する材料の下請を爲さんとして大に企畫するのみならず或は支廠を西國內に設立せんとする者すらある由なり是れ營業上の利益に基く事勿論なれども萬一獨逸國の先んずる所ともならば延いて英國艦隊北海集中策の根本にも影響を及ぼすべきが故に英國の外交的援助も亦大なりと云ふ

第四章 列強艦隊の將來

第一節 主力艦隊の區別

前章叙述せる列強海軍擴張計畫に基き列強艦隊の主力が毎年順次に變化すべき情勢を考査し以て各海面に於ける海軍勢力の比較に便せんとす抑々艦隊の主力は戦艦及装甲巡洋艦の編制に俟つべきは方今の原則なりと雖とも輓近の如く艦船の構造兵器並に其装置法及装甲板等の進歩發達日に新たなるものあるに於ては今日其堅牢無比を誇りたる戦艦装甲巡洋艦も數年ならして已に第二流となり第三流となり更に數年の後にはいつの間にか艦隊の主力に陥ひする能はざるに至る事決して珍らしからず其戦闘能力に差違を生ずる有様は洵とに驚くべきものあるに留意せざる可らず左れば既記擴張計畫に依り今後新造せらるべき列強の戦艦装甲巡洋艦を擧げて之を今日現在の戦艦装甲巡洋艦の數に加算し以て擴張終期に於ける艦隊主力なりと豫想する如きは甚しき誤謬にして眞實の主力即ち實力を比較せんと欲せば頂らく各艦が年々勢力を減耗する程度に鑑み其進水

後適當の年限を経たるとき先づ之を艦隊の主力より除きたる後に於てせざるべからず例へば相撲界に於て赫々たる偉績を現はし向ふ所敵なき横綱大關も兩三年を経れば漸く其他位を保つ事能はず遂に力衰へて年寄の位置に轉じ人をして往年の勢威を偲はしむるの常態に異ならざるなり軍艦と云ひ相撲と云ひ元と是れ實際の力量を以て闘ふの意義に於ては相齊しきが故に爰には軍艦の實力的等級を相撲の等級に譬ふるの便宜なるを認め左の如き區別を立てんとす

艦隊を編成する軍艦	艦隊の等級假稱	實例
多數巨砲を備ふる一萬七千噸以上の新式戦艦 主砲として十二吋砲を有する一萬二千噸以上の新式装甲巡洋艦	横綱大關艦隊	(帝國軍艦薩摩、英艦ドレッドノート)の如し (帝國軍艦筑波、英艦インドミタブル)の如し
右以下の戦艦 右以下の装甲巡洋艦	大關艦隊	(帝國軍艦三笠、敷島の如し) (帝國軍艦出雲、磐手の如し)

- (一) 右表に掲ぐる二種の艦隊を便宜上大關艦隊と總稱せんとす
- (二) 大關艦隊に屬する諸艦も年々其勢力減耗するが故に一定の年限を超ふる時

は其時代の新式同種艦と齡ひする能はざるに至る事、前已に説けるが如し、此種老齡諸艦は大關艦隊より除き來て之に年寄艦隊の假稱を與へんとす

(三) 大關艦隊に編入し能はざるも之を補佐すべき有力なる艦船即ち快速力一、二等巡洋艦の如きは之を關脇艦隊と稱すべきなり

要するに大關艦隊こそ艦隊の主力にして勢力比較の中心たるべく年寄艦隊に至ては尙ほ戰艦若は裝甲巡洋艦の名を保ち得べきも勢力比較の幹部たる能力なきを意味せんとす精言すれば或二國主戰艦隊の勢力を比較するに當り兩者とも艦隊の戰術各艦の操縱射撃の技倆同等なりとすれば所謂大關艦隊に非ざれば時勢が要求する戰鬪距離に於て戰鬪能力を完全に發揮し能はず即ち年寄艦隊の如きは主戰艦隊司令長官の選ぶ距離に於て或は發射彈の利き目甚弱小なるを感じ或は敵彈に對する防禦薄弱なるを示し或は速力遲緩にして到底主力に伴ふて陣形を保つ能はざる等不如意勝ちを免れずして各種の點に於て繩の弛みたる遺憾あるは當然なるが故に畢竟大關艦隊に伍して有力なる交戰に從ひ能はざるなり是に於て戰艦が進水後何年を経過すれば勢力を著るしく減耗し其地位を保つ事

備はず遂に大關艦隊より落伍して年寄艦隊に編入せらるべきやを査定せんが爲め帝國軍艦中に就き左に一二の例を示す

帝國最舊戰艦扶桑は其建造の當時は帝國唯一の甲鐵戰艦として雄名隠れなき軍艦なりしも明治二十五年松島嚴島二艦の就役せる頃には已に勢力減耗して艦隊主力に伍する事能はざりし然るに艦數不足の故を以て二十七年の日清戰役中は止むを得ず本隊に屬せしめられたりと雖とも黄海々戰に於ては其速力遲緩の爲め本隊の行動に伴ふ能はざりしは明らかなる事實なり即ち明治二十五年(進水後第十五年には當然主力より除かるべき位置にありき)又戰艦鎮遠を見るに日清戰役中は清國艦隊の主力たりしが帝國艦籍に入りたる後富士八島の到著せる明治三十一年には已に主力より除かるべき位置にありき(此時進水後第十五年以上標準を以てすれば戰艦富士は進水後十五年たるべき明治四十四年には前記扶桑鎮遠と齊しく大關艦隊に伍するの實力を缺くに至り年寄艦隊に編入せらるべき順序にして實際上斯くある事の適當なるを認むるなり(外國に於ては進水後十二年にして已に主力より除くの例あり)

次に巡洋艦は松島嚴島等の實際に徴し進水後第十三年には落伍して年寄艦隊に編入するものと認め得へきか故に淺間常磐の二裝甲巡洋艦は進水後第十三年たる明治四十四年には落伍すへき順序にして是亦實際上適當なるを認むへきなり又戦闘に於て非常なる損害を受け或は沈没したる軍艦は其年限を二箇年短縮せるものと看做さんとす

注意 艦艇補充基金法の規定には裝甲艦の年限を二十五年と定めあれとも之は老朽して殆んど任務に耐へざる程度に達するの年限を示すものにして前述年寄艦隊に編入するものとは意味を異にす

第二節 列強主力艦隊毎年の變化豫想

今列強海軍擴張計畫に基く増艦と前述定限年齢に依る落伍艦とを加減し以て毎年順次に變化すへき列強艦隊の主力を計算するに左の如し

▲帝國艦隊の將來(戦闘に於て大破壊を蒙り又は沈没したるものは定限年齢を二箇年短縮す)

年	千明九治百五十二年	千明九治百五十一年	千明九治百五十年	千明九治百四十九年	千明九治百四十八年	千明九治百四十七年	千明九治百四十六年	千明九治百四十五年	千明九治百四十四年	千明九治百四十三年	千明九治百四十二年
戰艦				石見春日。日進	朝日	三敷島。肥前。磐手			富士。相模。阿蘇。常磐。		
裝甲巡洋艦	生駒	筑波									
戰艦				三隻							
裝甲巡洋艦				三隻							
戰艦	七隻	七隻	七隻	七隻						十二隻	十三隻
裝甲巡洋艦	七隻	七隻	七隻	七隻							
大關艦隊(主力)艦數	七隻	七隻	七隻	七隻							

第一編 列強海軍力比較 第四章 列強艦隊の將來



年	大關艦隊	寄艦	戰艦	裝甲巡洋艦
千九百二十年	不詳	不詳	不詳	八隻
明治五十三年	不詳	不詳	不詳	十二隻?
明治四十九年	不詳	不詳	九隻	十隻
千九百十六年	不詳	不詳	不詳	不詳

計	千九百二十三年	千九百二十九年	千九百三十八年	千九百四十七年
戰艦	一	二	一	一
裝甲巡洋艦	一	一	一	一
總計	二隻	三隻	二隻	二隻
其他	二十八隻?	十二隻?		

明治四十九年列強主力艦隊艦數比較圖

日本十四隻

英國七十八隻

米國三十八隻

獨國四十隻

佛國不詳

明治五十三年列強主力艦隊艦數比較圖

日本八隻

英國七十四隻

米國二十六隻

獨國三十七隻

佛國四十隻

第五章 列強海軍政策の概要

第一節 日本帝國

海軍力充實の速かなるを欲するや固より切なりと雖とも國家財政の按排を強ひ能はざる事情の存したる爲め一昨四十年以來海軍費の繰延を決行したるものなるを疑はず換言すれば財政の許るす範圍に於て出來得る限り海軍力充實の進行を講しつゝあるを知るべきなり

戦勝は人に存すとの箴言が最近戦役の益々克く證明せる所なるに鑑み之に對する用意と教育訓練の進歩とに關し當局者の最も銳意しつゝある事は一昨年來行はれたる各種教育法の整頓特命檢閲その他各種檢閲の屬行昨年四十年に於ける大演習其他諸種演習の實行等に徴し明瞭なるのみならず各人を適所に配し其能力を發揮せしむると共に之が獎勵鼓舞を圖らんとするの實跡より察知するに足る

又軍器の獨立に關係ある民間資源の開発及國民海軍思想の發展等にも尠なから

す助力する所あると同時に列國との親交を最も良好に保持せんとする帝國の方針を體し多大の力を盡しつゝあるは遣外艦隊の發差外國艦隊の迎接其他外交上の儀式禮式に海軍の參加頻々たる實例に依り推知するを得べきなり

第二節 英國

近時海軍經費の無限に増大するの趨勢を憂ひ之か節約に掛からず努力するを見れども國防の大計としては其第一線たる海軍をして最強二國海軍力を標準とする勢力を保持せしめんとすること終始一貫敢て渝はるところなし左れば米獨兩國の如き急劇的海軍擴張者の現はるゝに際しても英國は必らず二國標準を下らざる範圍に於て出來得る限りの經濟的方策を講しつゝ海軍力補足に留意し實行するを一定の政策となすを知るなり而かも他國の如く多年間に渉る繼續費を以て建艦を計畫するの策は同國の執らざる所にして時々須要に應じ建艦計畫を立て其絶倫なる造船技術を鼓して神速に之を竣成するの大手腕を示す事其最も得意とする所なるのみならず軍器の改良教育訓練の進歩を首めとし苟くも海軍

に關する一切の事に付き世の先導者たらんとするの意氣は同國海軍政策の常に示しつゝある偉觀なりとす

〔備考〕昨年十一月英國首相アスキス氏は下院に於て、政府が抱ける二國標準の定義は英國に次ぐ二箇の最強海軍國の重なる軍艦を合併したるものよりも猶一割の優勢を占むるにありと言明し大に一般の喝采を博したり

又同月倫敦市長の饗宴に於て首相の演說中英國は決して他國に對し報復的態度に出づるを悦び或は利己的なる利益を伸長せんとするものにあらず善意と誠實の心を披瀝する國に對しては喜んで握手せんことを欲するものなりと最も熱心に斷言し又海軍に關しては英國は絶對的優越の位置を維持すべし是れ侵略的冒險の爲にあらすして英帝國を保護し其商工業を擁護すべき最も根本的なる義務を履行せんがためなり海軍本部が計畫しつゝある成案は明年(即明治四十二年)の春季迄之を秘せざるべからず左れば英國國民が暫く今日の儘にて満足せんことを求むと述べて其演說を終れり

第三節 米國

ルーズヴェルト大統領が議會に宣明せる要領に曰く、海牙平和會議の一議案たりし軍備制限が何等實際的効果を奏し能はざりしは甚た遺憾とする所なると共に予等の適當なりと信じたる戦艦の大きさを制限する案の如きも遂に問題たるを得ざりし大勢に鑑みる時は獨り米國のみ軍備の完成を遠慮するは謂はれなき事にして國利民福を増進シモンロー主義を保持する所以にあらず是れ予が大戦艦建造案を提出せる次第なるが艦船の活用は實に乗員の養成兵器の完備と相俟つにあらざれば望むべからざると同時に船渠の築造需品供給船及び各根據地の設備亦軍備の運用に缺くべからざるや論を俟たず而して太西太平洋兩岸は如上の準備に於て其程度を齊ふせざるべからざるか故にパナマ運河の竣成せざる間は大陸艦隊を時々東西兩洋面へ交互行動せしむるの方針を執る事一朝有事の際に想到する時は極めて緊要ならずんばあらずと之れ同國のモンロー主義は轉一轉して今や帝國主義に接近したるを説明するものにして國運の發展は海上勢力の大發

展に俟たざる可らすとの觀念よりして偉大なる海軍擴張を企圖するの政策を現出する所以なり而して其急劇なる擴張に際しても造艦事業は主として之を民間船廠に委したる如き亦同國政策の一異彩なりとす

第四節 獨 國

海軍大臣ナルピッツ將軍が議會に於てなしたる演述の要領に曰く、列強の海軍政策は我獨逸をして戰鬪艦隊の一大改新を行はしむべく促迫しつゝあり海軍勢力を適當に維持するにあらざれば帝國は天下の政界より驅逐せらるゝの非運に陥らずんばあらず顧みるに近來獨逸に於て戰艦の建造に要する年月が是迄よりも短縮するに至れるは欣喜に堪へざる所なれども尙銳意勵精すべき最要點は英國のそれに劣らざるやう迅速なる建造力を發展せしむるにあると同時に留意すべき事あり即ち從來建艦事業の進捗を妨けたるものは主として裝甲板及大砲供給の困難に歸すべきの點なりと以て現時海軍政策の概要を察すへきなり之を要するに先年皇帝の宣せられたる獨逸國の將來は海に在りとの海上雄飛政策が同國を

驅て専ら大艦隊の完成に熱中せしむる所以にして往々世人をして獨逸國は英國と鋭を競ふを主眼とするかの感を抱かしむるも亦之に基くに外ならず慙くて急劇なる海軍擴張計畫の餘響として私立船廠の能力を促進せる事一方ならず國內の全私立船廠を合し毎年十三、四隻の大戦艦を起工し二三年間に之を竣工せしめ(有事の日には二年)得るの程度に達せしめたるは近時政策の一發現と謂ふべきなり

〔備考〕昨年十一月英國新聞紙デーリーテレグラフ紙上に獨逸皇帝の談話として現はれたるもの左の如し、足下亦或は言はん、獨逸の海軍擴張は果して何の爲めぞや、是れ必ず英國を脅すものなり、英國を外にして何國の爲めに此の如き艦隊の必要あらんや、強雄なる艦隊を作らんとする者の心中に畫く敵は英國なり、然らざれば何故に獨逸は新税の重荷に重ぬるに重荷を以てせんや、と之に對する余の答は明瞭なり、獨逸は年少しにて成長しつゝある帝國なり、獨逸の商業上の利益は世界の各方面に於て迅速に膨脹し、國を愛する獨逸人の正當なる向上心は、之に如何なる制限をも加ふるを好まず、故

に獨逸は優勢なる艦隊を以て此の通商と最も遠隔せる海上にまでも及べる獨逸の利益とを保護せざる可からず、獨逸の利益は絶へず發展しつゝあるが故に、地球の各方面に於て之が爲めに勇らしく争ふの用意なかる可らず。獨逸の將來を見れば眼界は茫洋として遠く廣がれり、極東に於て何事が起るとも吾人は之に處するの覺悟なかるべからず。近々太平洋岸に一大事件の起るなきは何人か之を保證するを得んや、餘り遠き未來の事に非ざるべしと或る者は言へり、何れにしても歐洲列強は皆之に處するの用意なかるべからず、太平洋岸に於ける問題の如何に重大なるかを正當に判斷せんと欲せば、請ふ既に成功したる日本の勃興と、或は成功せんとする清國の覺醒とを見よ、一旦太平洋の將來を決定すべき秋に至れば、大海軍を有する國にして始めて尊敬を以て己の意見を聞かしむることを得べし。獨り此理由を以てして、他に何等の理由なきも、獨逸は大海軍を有せざるべからず、若し獨逸と英吉利とが同側に立ちて討論せざるべからざる秋に至らば、英吉利は恐らく獨逸が大海軍を有するを喜ぶならん。

右皇帝の談話は著るしく物議を惹起し、獨逸帝國議會に於て議員よりの質問及之に對する宰相の答辨あり、其中極東問題に關する演説の要領左の如し。

パツエルマン氏(國民自由黨の一領袖)曰く、獨逸艦隊を以て大平洋方面の事變に備るものと爲す皇帝の言は大に日米清三國の世論を聳動し、特に日本の諸新聞紙は擧て憤慨せざるはなし、之が爲、輓近漸く親善に向へる日本との關係は茲に一頓挫を來し、殆ど根底を攪亂せられむとするの狀あり、是海外に在て列國の競争と中傷に當る獨逸國民の地位に顧み益々遺憾の念を深からしむる所以なり、我艦隊の目的を以て大平洋に於る世界政策を行ふに在りと云ふが如きは斷じて之を非認せざるを得ず、曩に艦船建造法の議決せらるるに方り議員中絶えて斯の如き考案を抱きたる者なく、我艦隊を備ふるは全く當國沿岸の防禦に充てむが爲なること、茲に本員の嚴肅に明言する所なり。

帝國宰相の演説に曰く

皇帝の太平洋に言及せられたる所を以て日本に對し敵意を表せられたる

ものと解するは其の當を得ず獨逸の絶東方面に於ける意圖は専ら商業上の利益を増進せむとするに外ならず我艦隊を備ふるは歐洲に對しても又東洋に對しても何等侵略の目的に出でたるものに非ず日本人が其の活動と能力とに依り得たる重要な政治上の地位は皇帝も本大臣も共に等しく認識する所にして我國の政策は日本人が其の既得の利益を保持開發するを阻止せむとするが如き目的を有するものに非ざるなり

又同年十二月軍備制限に關し帝國議會に於て獨逸國宰相の演説したる要領左の如し

「軍備制限は望まじきことなり然かも之を遂行するの困難は著しく加ふるに獨逸は軍器上世界中に於て最も不利なる地位にあり外國の形勢は一瞬時にして險惡となることなしと云ふ可らず若し獨逸の軍備にして歐羅巴の形勢の要求する標準以下にあらんか平和は著しく脅威せらるゝことある可し

第五節 佛 國

佛國海軍の政策は屢動搖を見るを例とし確乎不拔の定見を缺くの憾なきに非ず一時水雷艇潜航艇等の多數を以て隣強に對せんとするの方針を執りしも今は漸次大艦政策に復しつゝあるの類なり一昨年(明治四十年)戰艦イエナの爆發以來諸戰艦の火災を續發するに至れる不秩序と砲術部に關する忌むべき軋轢並に海軍々政上に於ける組織の缺陷と軍人精神の弛類とは同政府の最も悲む所なると同時に甚しく國民を刺戟したる者の如く其他製艦遅延の實況も亦列國の大勢に鑑みるときは寒心に値ひすべしとして議會の二問題となりしを見る左れば近年結ばれたる英佛協約の餘惠時期を利用し先づ海軍々制を改革整理し且人員の訓育涵養に力め傍ら戰艦隊の充實を圖らんとする事現時海軍政策の大要なるべし

第六節 露 國

海軍再興を目的とし之に伴ふ組織の改革と教育法の刷新を期するを現時海軍政

策の大綱なりとす近時發布の敕令に依り同國の要する軍艦の類別を戰艦裝甲巡洋艦巡洋艦驅逐艦航洋水雷艇水雷艇と定め又政府は各軍港の設備を鞏固にすると同時に前記各種艦船の製造に着手すべき大計畫案を提出したるも國民議會の協賛を得ざりき蓋し同國の輿論は軍制及軍人養成法等の改善を先とし艦船建造は之を後にせんとするにあり然れども當局者は多少の程度に於て建艦の實行を進歩せしめんとして盡瘁しつゝあるを認むるなり

第六章 東洋の海上勢力比較

第一節 東洋現在の列強海軍力

▲帝國に付ては第一章に掲げたる海軍力の全部を以て東洋海上勢力と看做し得べきが故に之を略す

〔備考〕重要な根據地として韓國鎮海灣の價值（伊藤統監の演説）

韓帝御巡幸中伊藤統監が馬山の日韓協同歡迎會に於て鎮海灣の價值に關する意見を述べたる事あり其概要を左に掲げて參考に供せんとす

韓皇陛下が地方民情視察として特に當地に風駕を枉げられたる理由は諸君に於ても自ら了解せらるゝ事と信ずれども尙ほ本官が將來の關係上諸君の熟知するを希望する所なるを以て一言其理由を説明すべし韓國の鎮海灣は世界各國に於て有數なる港灣なり或は有數と云はんよりも寧ろ比較す可からざるの要港と稱して然るべきか特に日韓兩國の關係に於て當港は國防上殆ど缺く可からざる位置を占め若し此港を其掌中に收むる者

あらば日韓兩國は殆ど其制御の下に居らざる可からざるの場所なり。最近海軍の發達は殆ど言語を以て名狀するの難きは此席に列せらるゝ海軍武官諸君の熟知せらるゝ所にして本官が専門的に之を陳ぶる次第にはあらざれども當港は此の如き良灣にして而かも日韓兩國相對峙せる中間の日本海を防禦する海軍の設備上當港を失へば殆ど他に頼るべき天然の地形を發見する能はず固より國內各國の廣き其海岸に於て艦隊を碇泊せしめ海軍の設備を行ふに適當の場所尠なからざるべきも其國に於て之を必要とせざれば所謂無用の長物なり然るに當港は日韓兩國の防禦上に於て唯一の必要なる場所たるは何人も了解し易き所なりと信ず此港灣は現に最近の戰爭に於て如何なる用を爲しやは本官の説明を要せず諸君の感知せらるゝ所なり尙ほ將來に於て地球の約三分の二以上四分の三は海水を以て形成する事に顧みれば國家の防禦上海軍に重きを措くべきは論を待たず况んや日韓兩國の如きは其中間に在る海水を以て國家防衛上の城壁とも見るべきものなれば此城壁を破壊せられざらんと欲せば此の如き要港

は之を他人の掌中に歸せしむるを許さず然り而して此要港は今日如何なる状態にあるやを熟知するは當地に於て商工業に従事する人の各々其業務上必要の事と信ずるに付特に一言之に言及すべし本官は當職を奉ずるに當り韓國政府と協議を盡し此地を韓國の軍港と定め而して韓國は海軍の設備全く缺くる爲に之を韓國政府より日本政府に全然讓與し日本海軍は此讓與委託に基き當港を支配する事と爲したり將來日本海のあらん限り我海軍に於て充分此に設備を施し兩國の山河を防禦するの要衝たらしめんとす故に此地に住居する者は其韓國人たると日本人たるを問はず當港の兩國防禦の目的に使用せらるゝ事を考慮し且つ其目的の變改す可からざる事前條の如くなるを了解せば其趣旨に悖らずして農商工業の計畫を立てられんか各々其目的を誤らざるに庶幾からん何故に本官は此の如き事を言ふやと云へば當港にして若し軍事上の設備と何等關係を有せざる商港ならば商業の爲めを專一となすべきも當港は決して然らざるが故に其事情を諸君に了解せしめ諸君をして各々其目的を謬らしめざらん事

を望むが爲めなり然しながら當地及接近の地方に住居する日韓兩國の諸君が各々前陳の範圍内に於て農事の改良又は各種の商工業を發達せしめられん事は固より兩國政府の希望する所なり韓皇陛下が特に當地に風潮を枉げさせられたるは此の如き要港なるが爲めに南方御巡幸に際し地方民情の視察と同時に前陳國防上の必要を感せられたるが爲めなり尙附言して以て克く諸君の御了解を希望する事は我天皇陛下は韓皇陛下南方御巡視に就き海軍の二艦隊を派遣せられ兩國防禦上最も必要なる此軍港に於て韓皇陛下の親閱に供へられたる事なり電氣の煌々として此宴席の樓層を照らすは決して一場の遊戯の爲めに非ず諸君の盛宴を張られたる厚意に對し當地の商工業又は教育に就て愚見を述ぶるは冒頭に陳べたる如く到着勿々早計たるを免れず之に就ては却て諸君より當港の状況を詳かにしたる後に致したし蓋し日本人たると韓人たるに係らず本官は到る所に重複して談話を試みると雖も今日日韓兩皇室に於ては日に益々交誼親密を加へられ協同一致の方針を採り力を合し以て極東に於ける兩國の位

置を保たんと欲せらるゝ事は今回韓皇陛下當地方御巡幸に際し我天皇陛下より御發送の御親電に據るも明かなり云々

▲英國(支那海鎮) 重要根據地……………香港威海衛

裝甲巡洋艦 キングアルフレッド(一萬四千百噸)ベッドフォード(九千八百噸)ケン
ト(同上)モンマス(同上)

巡洋艦 アストリヤ(四千三百六十噸)

通報艦 アラクリチー(千七百噸)

驅逐艦 オッター外七隻(合計噸數二千五百十五噸)

砲艦 ブリッドマード外六隻(合計噸數六千三百噸)

河用砲艦 ウードコック外七隻(合計噸數千噸)

▲英國(東印度海鎮) 重要根據地……………アデン、コロムボ、ポートルイス

巡洋艦 ハイアシンス(五千六百噸)ハイフライアー(同上)バーシユース(二千三百噸)プロサーバイン(同上)

▲英國(濠洲海鎮) 重要根據地……………シドニー

巡洋艦 パワーフル(一萬四千二百噸)チャレンジャー(五千八百八十噸)エンカ
ウンター(同上)キヤムブリアン(四千三百六十噸)ベガシユス(二千百三
十五噸)プロメシユース(同上)ピラミユス(同上)サイチユ(二千二百噸)バ
イオニリア(同上)

▲米國(太平洋) 重要根據地……………桑港(メーヤア일랜드)比律賓(カウキテ、オロン
ガボ)布哇

裝甲巡洋艦 ウェストヴァージニア(一萬三千六百八十噸)ペンシルヴァニア(同上)
マリイラント(同上)コロラド(同上)カリフォルニア(同上)サウスダコタ
(同上)テンネツシー(一萬四千五百噸)ワシントン(同上)

巡洋艦 チャーレニントン(九千七百噸)ミルウォォーキー(同上)セントルイス(同上)
アルバニー(三千四百八十七噸)チャッタヌーガ(三千二百噸)ガルヴェ
ストン(同上)デンヴァー(同上)クリイヴランド(同上)レインボー(同上)

海防艦 モンテレー(四千八十四噸)モナドノック(三千九百九十噸)
驅逐艦 パーソナー外六隻(合計噸數二千九百四十噸)

砲艦 ……レナ外五隻(合計噸數五千三百六十噸)

▲獨國 重要根據地……………膠州灣

裝甲巡洋艦 シヤルンホルスト(一萬四千四百二十噸)

巡洋艦 ライプチヒ(三千二百噸)アルコナ(二千六百五十七噸)ニオベ(二千六百
三噸)

砲艦 チーゲル外三隻(合計噸數三千五百九十六噸)

河用砲艦 チンタウ外二隻(合計噸數五百九十八噸)

▲佛國 重要根據地……………柴棍

巡洋艦 ブルイー(四千七百五十噸)ダントルカスト(七千九百九十五噸)アル
ゼー(四千三百十三噸)

驅逐艦 ムスケー外三隻(合計噸數千五百五十噸)

砲艦 六隻(合計噸數六千二百三十六噸)但し内一隻(コメット)は近日武裝を
解く筈

河用砲艦 ビジラント外二隻(合計噸數四百八十噸)

▲露國 重要根據地……浦潮斯德
 巡洋艦 アスコリッド(五千九百五噸)ゼムチューグ(三千百六噸)
 砲艦 マンジウール(千四百三十七噸)
 驅逐艦 プライウイ外十五隻(四千八百八十三噸)
 ▲伊國
 巡洋艦 ヴェスヴィオ(三千三百七十三噸)歸國の等)ピグリア(二千四百九十八噸)
 ▲埃匈國
 巡洋艦 カイゼリンエリサベス(四千噸)レオボード(千五百六噸)
 ▲清國
 巡洋艦 海圻(四千三百噸)海容(二千九百五十噸)海籌(同上)海琛(同上)外兩三隻あり
 砲艦 飛鷹外數隻
 ▲蘭國

戰艦 コニンギンレゼンド(四千九百五十噸)ドルイテル(同上)ヘルトグヘン
 巡洋艦 ドリック(同上)
 巡洋艦 ゼーランド(三千九百五十噸)トロムブ(五千二百一十一噸)シボガ(七百七十八噸)コニンギンウイヘルミナデルニールランデン(四千六百噸)コニングデルニールランデン()
 砲艦 三隻
 ▲ポルチユガル國
 海防艦 ヴァスコダガマ 砲艦 リオリマバトリア
 ▲列強東洋艦隊の指揮官左の如し
 英國 支那艦隊司令長官 海軍中將 サイ、ヘッドウヲリス、ラムプトン
 米國 太平洋艦隊司令長官 海軍少將 ウイリアム、チー、スウィンバーン 第三艦隊司令長官(在比律賓)海軍少將 ジー、ビー、ハーバー
 獨國 巡洋艦隊司令官心得 海軍少將 インゲノール
 佛國 東洋艦隊司令長官 海軍少將 ペルラン
 露國 太平洋海軍都督 海軍少將 ウスペンスキ
 清國 南北洋水師總統 薩鎮冰

第一編 列強海軍力比較 第六章 東洋の海上勢力比較

第二節 將來東洋に於ける日本帝國海上勢力

帝國平時の艦隊は第一第二第三の常備艦隊と四鎮守府に屬する豫備艦隊より成れども戰時には總艦船を若干の特殊艦隊に區分すること日露戰役の例に依り明らかにして如上大艦隊の策源地としては清韓露方面に對し佐世保舞鶴の二軍港あり北清方面に對し旅順軍港あり朝鮮海峽の要地としては鎮海灣あり南部根據地として馬公要港(澎湖島)北部根據地としては大湊要港あり艦船造修兵器製作の資源地は横須賀及吳軍港を以て之に充て一朝有事の日には軍令一下立どころに全艦隊は應戰準備を完整するの用意目覺しきものあるを疑はす是に於て前節列強海軍力の配置を通覽するときは帝國海軍こそ東洋の主人として名實兩ツながら完く同洋面の風雲何時急を告ぐる事あるも我は優に全海面を制し得べきの觀あり然れども如上概觀が果して適當の判斷なりや否や又此種危機に際し列強の海軍力配置は如何に變動を示すべきやの研究は即ち本章の要求する主問題なり

とす

或論者は現時東洋に對する諸外國海軍力配置の餘りに薄弱に過ぐるを見て列強は日露戰役の結果に鑑み東洋を擧げて日本の双肩に委ぬるを當然なりと爲し殊に日英同盟は磐石の如きものあるが故に寧ろ東洋海上權力なる事項より手を引く方觸らぬ神に崇りなし主義に適するものと思惟せるならんと推測し將來彼等に關し軍事上には格別の顧慮を要せずと斷定する者あるが如し然れども是れ固より識者の一笑にだも値ひせざる謬見にして列強が平時東洋に極めて薄弱なる海軍力を駐むるの一事こそ寧ろ其底意の尋常ならざる悽味あるを念はざる可らず

(一) 歐洲の一國が平時より相當の勢力ある艦隊を東洋に駐むる時は一朝帝國と利害を異にする大問題發生し事を干戈に訴ふるの止むを得ざるに至れるに際し該東洋艦隊が先づ帝國艦隊の爲に撃破せられ本國より派遣する第二艦隊が更に別個に撃破せらるゝ事露國が先づ太平洋艦隊を殄滅せられ次に第二第三艦隊亦同一の悲運に陥りたるに徴し極めて明瞭なる事

(二) 近時軍艦構造發達の結果として有事の日に於て堂々たる大艦隊に充分なる軍需品運送船を附する時は萬里の遠航も左程の困難に遭はずして遂行し得べき事曩きに露國第二第三艦隊波羅的艦隊の東航に依り現實に證明せられ又米國太平洋艦隊の太平洋回航が一層進歩したる状態を以て甚容易に成效を示したると同時に大艦船の速力が日一日に増進を來すが故に海軍眼に映すべき世界の海上距離は日一日に短縮するに異ならず換言すれば全世界の列國は互ひに接近しつゝありと謂ひ得べき事

(三) 莫大の經費を支出し得べき富力ある國が帝國艦隊に倍したる優勢の主戰艦隊を擁し之に無限の軍需を供給する準備を整へて派遣するは實行し得べき事に於て之れ良根據地を有せざる艦隊は縱令ひ優勢なりとも何等爲す所なしとの従前の原則を或る程度迄蹂躪し得る機會ある事

上記三項を玩味せば列強か平時其爪牙を藏め特に劣弱なる海軍力を東洋に駐むる所以を察し得べきと共に一朝重大なる利害の衝突を生ずるに臨み列強が唯々として帝國の主張を諾すべしなどは三歳の童子と雖とも想像し能はざるを覺

り得べきなり是に於て必要に應じ列強が遠く東洋に派遣し得べき艦隊の主力に付左に順次考究する所あらんとす

第三節 將來に於ける列強遣東艦隊主力

▲清國 東洋に於ける利害の問題は多少の程度に於て常に清國に關係すと謂ふも不可なし然れども同國の海軍力は未だ之を計上する迄に具體的の編制を見るの時機に達せざるが故に之を論ぜず

▲露國 露國は其領土の關係より東洋に直接の利害を有するが故に將來は其要害たる浦鹽方面に大艦隊を駐むるか或は一朝有事の日に大艦隊を婆羅的方面より派遣して其利權を擁護せんとするや疑を容れず但し浦鹽は其港灣の大さ充分ならざると冬季結氷の缺點ある事が將來同方面に於ける大設備を必要とするのみならず帝國の要害たる宗谷津輕の兩海峽と朝鮮海峽に包圍せられたる偏北の地勢は露國が其勢威を逞ふせんとするに際し遺憾を感ぜしむる事尠なからざれども將來浦鹽の價値は西伯利亞に於ける交通機關の整備に伴ひ漸次發揮せらる

べきが故に露國は暫く翼を收め遠大の望を他日に期せんとするや當然なり露國は前きに帝國と協約を結ひたる善隣にして日に其友誼親睦を加へつゝあるを以て兩者國交の破裂の如きは固より之無きを信すれども將來萬一の場合に利害を異にすべき大問題發生するの絶無を保し難きは古來世界歴史の例鑑に徴し考慮せざる可らず之れと齊しく國防眼よりは同盟國以外總ての外國を各々目標として論ぜざる可らざるは有理の事にして獨米伊佛等の諸國に對し皆然らざるを得ず要するに爰に吾人の知らんと欲する所のものは一朝有事の場合に際し露國が東洋に派遣し得べき海軍力如何に存する次第なるが其黒海艦隊はダーダネルス海峽を通過するの自由を有せざるを以て之を別とし婆羅的海に於ける艦隊は其有力なる艦船の全部を擧げて東洋に派遣し得るを知る之れ同海方面は淺灘暗礁曠布する長大なる内海に類し之が守勢防禦には敢て主戰艦隊の有力なるものを要せず已に日露戰役中世人の豫想せざりし老弱艦までも遣東艦隊に編入して能く其遠航を成功したるに徴し極めて明白なればなり

然れども同國は目下海軍再興の計畫時機に屬し未だ何等具體的方案の確定を見

ざるにより將來戰艦及裝甲巡洋艦より成る何隻の艦隊主力を東洋に派遣し得べきやの想定を爲し難し故に露國海上勢力の比較は暫らく之を論ぜざる事とし他日再興計畫確定の曉に待たんとす

▲英國 次に東洋に最大の利害關係あるものは英國にして日露戰役前に在ては平時よりなか／＼に強力なる戰艦及裝甲巡洋艦より成る東洋艦隊を備へたるに徴するも如何に東洋の關係を重視するやを察すべきなり然れども今や日英同盟に一段の進歩を來したると露國海軍の甚しく衰退したる結果として悉く其戰艦を引上げ僅かに裝甲巡洋艦を駐むるに至りし消息は世人の熟知する所なり蓋英國が其光榮ある年來の孤立を破りて帝國と提携するに至れるは幾多の苦辛慘憺より成る歴史の上に收め得たる東洋に於ける利益を増進し且つ其金穴たる東印度を保護せんとするに忠實なる政策と一切の利害に關する所見が帝國と能く一致するの事實とが然らしめたる所なるが故に日英同盟は長へに其鞏固なるを察し得べきなり唯た爰には東洋海上勢力比較の爲め英國が幾隻の主戰艦隊を遣東し得べきやを想定せんに由來東洋への航路に當るあらゆる要害を悉く其手裡に

掌握する英國は如何なる大艦隊の東航も極めて容易ならしむるを得べしと雖ども、蹶つて其本國に就て顧慮せざる可らざる重大事あり即ち英國が其出來得る限りの全力を盡し絶大の海軍力を東洋に派遣せざる可らざる大事ありと假定するも其本國を空虚にして全艦隊を遣外するは其島帝國たる地勢と豫想敵國が其本國對岸に羅列する關係より不可能の事たるを知るべく殊に英國は主として其食料品を海外に仰ぐを以て若し不慮の外交的變動が歐洲に敵國を生ぜしめ其迅雷的行動の爲に一たび海上權を敵手に委する時は倫敦市の如き僅かに五週間すらも支へ難きは同國の最も憂慮すべき事實なりとす是に於て英國は如上不慮の事變に備へんが爲に少くも他の一強海軍國の勢力に齊しき艦隊を本國附近に留めざる可らず然るに英國の海軍力は二大海軍國を標準とせるものなるが故に前記の場合には其一半を本國附近に留め他の一半を東洋に派遣し得べきは想像するに難からず之を前章列強艦隊の將來の部に照らすに

本國附近に留むる勢力は獨逸國海軍力と凡そ同等のものとするれば即ち英國海軍力の半數にして他の半數を東洋に派遣し得る事左表の如し

年	大關艦隊(主力)		年	寄艦隊	
	戰艦	裝甲巡洋艦		戰艦	裝甲巡洋艦
千九百二十年	二十六隻?	十四隻?	十五年	五隻	九隻
千九百二十三年	二十四隻?	十三隻?	十六年	六隻	十隻

▲米國 次に東洋に大關係ある者は米國なるが同國は帝國と準協約國とも稱すべく其利害に於て終始我と所見を同一にするを以て將來帝國と衝突を來す如きは吾人の豫想せざる所なれども其領土及殖民地に關する利益を保護し且つ東洋に於て日一日に増進する商業上の地位を保護せんが爲に勢ひ比律賓及布哇の防備を整頓し其大艦隊の完全なる根據地を準備するの必要を感ずる事自然の數なるが故に漸次之が實行を圖らんとするは勿論なりとす恁くて萬一米國が其出來得る限りの全力を盡して優勢艦隊を東洋に派遣せざる可らざる大事を生ずるに至らば其海軍力の幾何を遣東し得べきやを一考せんに同國は幸ひにも西半球に獨立するの地勢よりして英國の如く其對岸に不慮の敵國を生ずるが如き懸念なきの利あると共に若し歐洲の一國が不意に敵對の動作を執るの變態を生ずる事

あるも有力なる根據地の準備なき懸軍長驅の歐洲艦隊が遠く米大陸に肉薄せんとする如きは其力量縦令ひ優勢なるものありとも已に海戦の原則上至難中の至難なりとして躊躇するは勿論なるが故に米國は其本國に海防艦及び水雷艦艇の如き沿岸防禦を備ふるの外多大の顧慮を用ひずして其主力艦隊の全部を遣東し得るを疑はず之を前章列強艦隊の將來の部に照らすに左表の如し

年	大關艦隊(主力)		年寄艦隊	
	戰艦	裝甲巡洋艦	戰艦	裝甲巡洋艦
明治四十九年	二十九隻	九隻	十二隻	四隻
明治五十二年	二十六隻	不詳	二十隻	十三隻

▲獨國 近時外交の推移が獨逸國をして孤立の狀態に陥らしめたるの觀ありて其結果同國は頻りに巧妙なる畫策を案し外には獨逸伊の三角同盟を改進すると共に好を米に通し露に結び小利だも維れ逸せざらんとするが如く内には海軍擴張に銳意して自然英國と海上反目の度を高むるの狀あるは世人の知る所なるが由來同國の海軍大擴張は口を國防及通商の保護に籍ると雖とも其實世界海面に

於て大々的雄飛を試みんとするを目的とするが故に萬一東洋に於ける重大なる利害關係が要する時は大艦隊を驅りて東洋の角逐場裏に其勢威を振はんとするや固より明らかかなり驟つて同國の地勢を按ずるに其沿岸は北海方面と云ひ婆羅的方面と云ひ何れも淺灘の擴布若は河口の關係よりして若干の海防艦多數水雷艇布設水雷等を配して守勢防禦に力むる時は一朝敵國大艦隊の急襲に接するも英國の如く國防上の大危難を來すの虞なきのみならずキール運河の竣成は防備上絶大の利便あるが故に若し全力を以て輸贏を東洋に争はんとする如き大事を生ずる時は前記國防上の便宜と歐洲内に強敵を生ぜしめざる外交的手腕を恃みとして其主力艦隊を悉く東航するの舉に出づべきは勢の然らしむる所ならん之れ露國が太平洋第二第三艦隊を續發せるに徴するも推知し得べきなり爰に於て一朝有事の日に獨國が東洋に派遣し得べき海軍力を前章列強艦隊の將來の部に照らすに

本國には萬一外交上の急變動ありて近隣の強國より急襲を受けたる場合の守勢防禦の爲め多數水雷艦艇の外年寄艦隊の全部を留むる事とし大關艦隊の全

部を東洋に派遣し得る事左表の如し

千明 九治 百五 二十三 年年	千明 九治 百四 十九 年年	大關艦隊(主力)	戰艦	裝甲巡洋艦	年寄艦	裝甲巡洋艦
		二十四隻	十三隻	〇	〇	〇
		二十八隻	十二隻	〇	〇	〇

▲佛國 佛國も亦帝國との協約國にして東洋の利害關係に於て兩者の一致する所なれども萬一佛國が全力を用ひざる可らざる大事の發生せる場合に東洋に派遣し得べき海軍力を一考するに、抑も同國が其本國の國防上大なる海軍力を要するは地勢の然らしむる所なれども近時英佛の親和接近は此の點に於て絶大の便宜あるが上に、若し東洋に於ける全力行動中に不意に歐洲強國海軍の襲撃を受ける如き外交の急變ありたる場合には已むを得ず純然たる守勢防禦を執り其殘存海軍力を堅く軍港内に據らしめ海上の戰は同國得意の多數水雷艦艇潜航艇等に任せんとするの方針を豫定し兎に角全力を東洋に用ふるを努むべきは察するに難からず而して其間に歐洲國交には急變を來さざらしめんとして外交的必死の

手腕を盡すべきは固より疑を容れざる所なり今前章列強艦隊の將來の部に照らすに

本國には歐洲の大海軍國として將た地中海の主人として海上の保安と應急の準備の爲め小巡洋艦多數水雷艦艇と潜航艇隊の外に年寄艦隊の全部を留むる事とし大關艦隊の全部を東洋に派遣し得る事左表の如し

千明 九治 百五 二十三 年年	千明 九治 百四 十九 年年	大關艦隊(主力)	戰艦	裝甲巡洋艦	年寄艦	裝甲巡洋艦
		二十八隻?	十二隻?	〇	〇	〇
		不詳	不詳	〇	〇	〇

第四節 將來に於ける日本帝國艦隊主力と列強遣東艦隊主力の比較

上來叙述せる所に依り一朝有事の日に於て列強が東洋に派遣し得べき海軍力と帝國海軍力とを一表に掲ぐれば左の如し

露	佛	獨	米	英	日	露	佛	獨	米	英	日	大關艦隊(主力)	
												戰艦	裝甲巡洋艦
不詳	二十八隻?	二十四隻	二十六隻	二十四隻?	五隻	不詳	不詳	二十八隻	二十九隻	二十六隻?	七隻	七隻	七隻
不詳	十二隻?	十三隻	不詳	十三隻?	三隻	不詳	不詳	十二隻	九隻	十四隻?	七隻	九隻	九隻
不詳	○	○	二十隻	十六隻	十隻	不詳	○	○	十二隻	十五隻	九隻	九隻	九隻
不詳	○	○	十三隻	十六隻	六隻	不詳	○	○	四隻	九隻	九隻	九隻	九隻

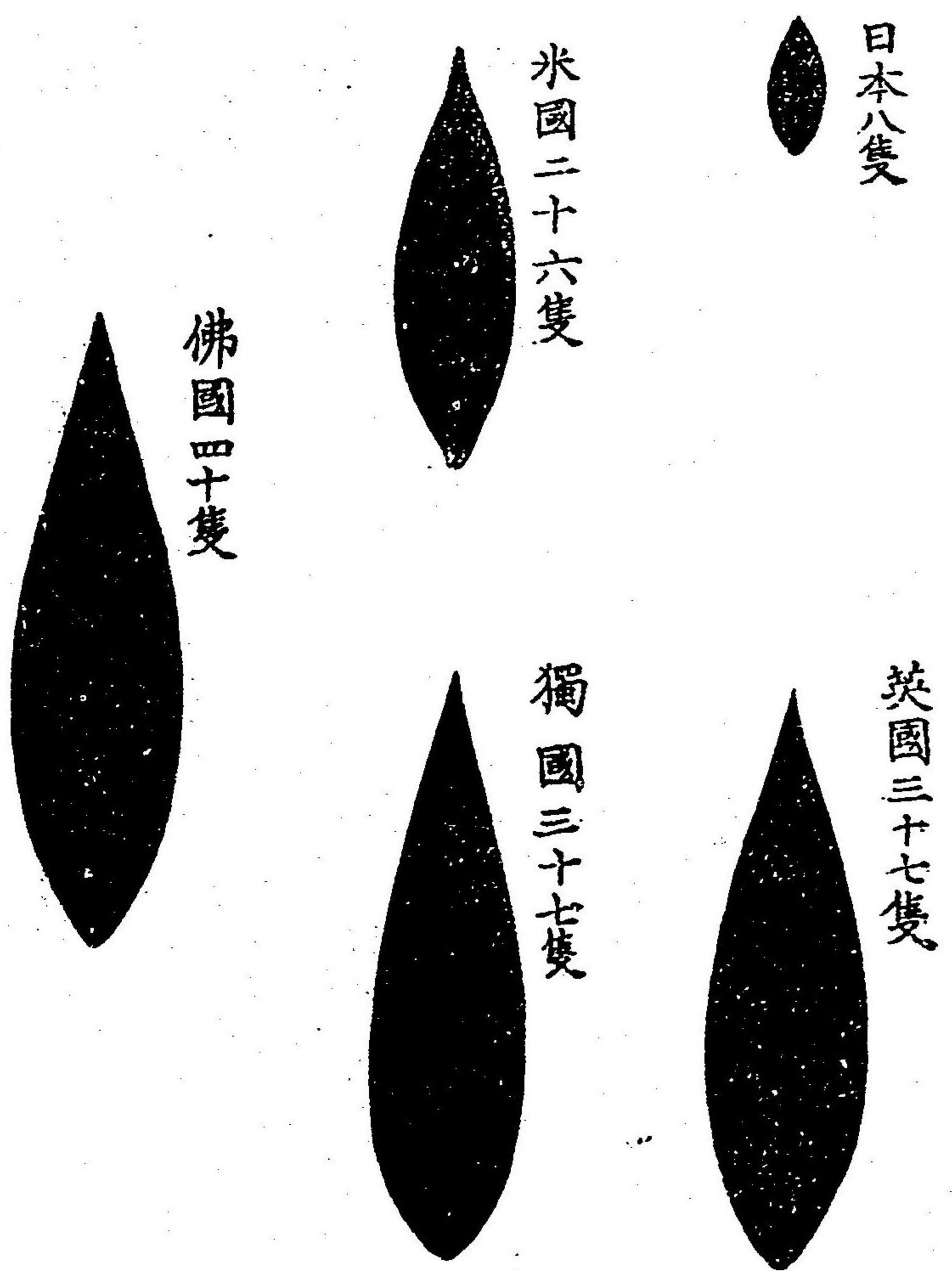
一三四

明治四十九年列強遣東艦隊主力艦數比較圖

(船體の長さを以て艦數を示す以下同し)



明治五十三年列強遣東艦隊主力艦數比較圖



右表中英國は同盟國なるを以て之を除き他の諸國海軍力と帝國海軍力を比較する事左の如し
 但し年寄艦隊は其戰鬥力が大關艦隊の四分の一に減衰せるものと看做し比較の便に供す

明治四十九年は帝國に於ける現在海軍建艦計畫の最終年なるが同年に於て帝國艦隊主力は戰艦九隻裝甲巡洋艦九隻に相當するが故に
 米國の戰艦卅二隻裝甲巡洋艦十隻に對し戰艦廿三隻裝甲巡洋艦一隻を不足し獨國の戰艦二十八隻裝甲巡洋艦十二隻に對し戰艦十九隻裝甲巡洋艦三隻を不足し

佛國に對しては數字不詳なるも獨國に對するものに近かるべし
 露國に對しては比較をなすの時機に達せず露國海軍再興計畫未定に付
 明治五十三年は獨逸國擴張計畫に係る艦船の竣工最終年なると共に佛國亦此年を以て一大艦隊を備へんとする次第なるが同年に於て帝國艦隊主力は戰艦七隻裝甲巡洋艦四隻に相當するが故に

米國の戰艦三十一隻裝甲巡洋艦三隻に對し戰艦二十四隻を不足し裝甲巡洋艦一隻多し

獨國の戰艦二十四隻裝甲巡洋艦十三隻に對し戰艦十七隻裝甲巡洋艦九隻を不足し

佛國の戰艦二十八隻裝甲巡洋艦十二隻に對し戰艦二十一隻裝甲巡洋艦八隻を不足す

露國に對しては比較を爲すの時機に達せず

今日に於ける帝國と列強との海軍力の比較關係は漸次其狀勢を變轉し明治四十九年に至り五十三年に至れば帝國が列強に對し甚しき劣勢力に陥る事實に右の如し

抑々戰爭は豫報ありてより充分に準備し得るの餘裕ありて來る性質のものに非ざるは智者を待たずして知るべく而かも國際の關係が常に安定なりとなすは痴人の夢と一般にして其利害關係は一日も靜止する事なきを例とす吾人は敢て何れの國が將來帝國の敵たるべしと豫定する事を好まず又帝國が國防上萬難を排し

ても海軍の軍備を到達せしめざる可らざる最低標準を爰に算定論結する事を爲さず之れ本書の主意に非るを以てなり然れども唯誠實なる眼を以て上述の海軍力比較に注がんと我同胞に促さざるを得ざると同時に上來攻究したる所に基き東洋海上勢力の趨く所を察し凡そ萬般の事に於て勝利は準備周到なる者の掌裏に歸すべしとの格言に想到せん事を切望せずんばあらざるなり

或は曰く帝國及列強の海軍力比較は洵に然るべしと雖ども吾人の最も慶すべき日英同盟の嚴然として存するあり東洋の風雲一朝急を告ぐるの不幸に際會せば帝國は英國艦隊の合同を期し得べきが故に我艦隊の勢力敵國の其れに劣ること甚しきものありとも敢て恐るゝに足らざるなりと然れども論者は

(一) 帝國が優に一強國に對し得べき海軍力を有してこそ始めて日英同盟の鞏固なる持續を期し得べき事

(二) 帝國を擁護すべき自衛の方法たる絶對的緊要事業に付き同盟國に恃む所斯の如く大にして然かも開戦の場合に當り同盟國に止むを得ざる何等かの理由ありて萬一豫期したる程度に實際上の援助を受け能はざるか若は援助遅

延せば果して帝國が如何の境遇に陥るべきやに想到するときは洵に寒心すべき極なる事

(三) 國交の破裂の如き其原因種々にして決して一樣ならず(或は同盟條約の範圍外に渉る事もあらん)總ての場合に於て必らず同盟國と其意見一致し協同動作を爲し得べしと信ずるは餘りに早計なる事

(四) 若し同盟國と意見の一致を見充分なる援助を得べしとするも凡そ戰の大局は機先を制するに依て定まるの例頗る多し然るに二國協同動作の如き場合に果してよく迅雷耳を掩ふに遑あらざる底の打撃を最も敏活に且つ秘密に

決行し得るものなるやに付き考慮を要する事
右の諸項に思を致す事の不足よりして國防の大事に關し慙かる無責任の意見を抱持するに非るなきを得んや換言すれば帝國々防の第一線たる海軍の軍備を輕んじ其最低標準に達するの緊要をも覺らざる如きは神聖なる祖宗の御遺訓と二千五百餘年來光輝ある國史の成跡を汚すを顧みざるの罪極めて重且大なりと同時同盟國に對しても其義務を重んぜざるものにして偶々以て其の離縁を招か

んとするに異ならざるを熟慮せざる可らず况んや軍備は戰はんが爲に修むるに非ず萬一に蒞み戦ふに足るべき軍備を整ふるは則ち他の強暴壓迫を防ぎ戰を避け光輝ある平和を維持する最良唯一の手段なるに於てをや

第七章 他海面海上勢力觀

第一節 米大陸兩側洋面の勢力

將來發現すべき巴拿馬運河の開通が早や既に英國民をして加奈陀西岸の艦隊増備を云々せしむる程に其神經を過敏ならしむると同時に爾餘の歐洲列強をして漸く米國太平洋岸に敏眸を注がしむるに至れり言ふまでもなく該運河に依りて米國は其大艦隊を任意の時機に極めて神速に東西兩岸に移動し得るの一大便宜を得る次第にして是れ即ち大西洋乃至歐洲と東洋の距離を著るしく接近せしむる如き世界地圖の大變動なりと謂ふべく是に於て米國は軍事通商兩者に於て益々全世界の重鎮たるに至るを疑はざるなり而して西印度及加奈陀方面に有力なる根據地を有する英國が其重大の關係ある東洋の最近航路たる該運河の通航に對し或種の特權を獲んと試むる如きは今より英國の輿論に激し推するを得べく兎に角世界列國中克く米大陸に肉薄し之に對抗し得る兵力及前進根據地の準備あるもの英國を措ては他に之を見る可らず蓋し有力なる根據地の準備なき懸軍

長驅の艦隊は其力量非常なる優勢を保ち且つ驚くべき多數軍需供給の準備完成しある上に極めて神速に占領し得べき前進根據地の目算を有するに非れば或る時日の間に個々部分的に防禦軍の奇襲を蒙り遂には殆んど全敗に瀕すべき事近世戰略の明示する所なればなり米國が他の大海軍國に對する國防の方針亦實に是に重きを置くを見る由來米國の方針が平和的に國力の發展を圖るに在る事は建國以來終始渝はる事なしと雖ども南北戰爭並に米西戰爭は延ひて南北諸州統一方を増進せる結果内部の凝結は爰に終りを告げ今や其國利民福の保護並増進上モンロー主義に一層の發展を來し將來多く豫期し得べき左記の時機に際しては決然世界大海軍國を對手とするを辭せざるの準備あるに至れり

(一) 米大陸及附近の島嶼其他海外の領土並に海上に於て他の邦國と利益の衝突を來す時

(二) 全世界に瀰蔓せる商業界に於ける米國の地位が日に増進するの結果反抗を來すべき他の邦國と利益の衝突を來す時

要するに現時米大陸兩側洋面に於ては米國海上勢力(海軍力は既記の如し)の勃興

目醒しきものありて決して他の容隊を許るざるの概あるを知るなり

第二節 地中海々上勢力

英國は數世紀間歴史の實例に鑑み地中海を以て國防上の必要なる前進地域と認めモルタを中樞としジブラルターを後詰として大艦隊を備ふるを例としたるが近年佛國との接近、獨逸國海軍擴張等の狀勢に促されて一昨年(千九百七年)に於て大勢力を北海附近に移すの一變動を來せり爰に於て地中海は佛國海上勢力を推して主人公たらしむるの實を示し佛國は爲に英海峽方面の勢力を薄ふするに至り將來歐洲外交の變動を來すに非れば此の大勢を維持するを疑はざるなり

現時地中海主要の勢力

英國戰艦隊	六	隻
佛國戰艦隊(常備)	六	隻
同 (豫備)	六	隻
伊國戰艦隊(常備)	五	隻

同 (豫備)	五	隻
奧國戰艦隊(常備)	三	隻
同 (豫備)	三	隻

第三節 歐洲北海々上勢力

日露戰役の終局と共に絶東艦隊の戰艦を擧げて召還したる英國が又多年其粹を集めたる地中海艦隊を割きて本國に集合せしめ海軍活動の中心を北海に轉じたるは固より著明なる理由ありて存す、佛國との接近、獨逸との反目即ち是なり而して最近に傳はれる西班牙國の海軍再興に關し英國が援助を與ふべしとの一事は英國艦隊配備變更策の實行に資する所決して尠なからざるを信すべきと共に近時獨逸國がポルトガル沖の一島を買求せんとする風評の如き其關係や皆一に出づるを思はしむ抑々戰時に於て英國は其海上大勢力を用ひて敵國艦隊を海の一隅に壓迫し其本國根據地に遁竄せしめたる後は所謂封鎖戰と根據地攻撃戰に轉ずべきと同時に敵國海上貿易を杜絶することが由來英國戰略の要點なり獨逸皇

帝が同國の將來は海上に在りと宣したる當初の意氣込を以て舉國の精力を鼓舞し國是の遂行に努めたる結果、海上貿易は年々著るしき進歩を示し今や世界經濟界の重鎮を形成せる獨逸海陸全通商の七割を占むるに至れりと云ふ左ればにや永年大西洋を獨歩したる英國商船界も近年は動もすれば獨逸の後へに墮若たる氣味なきに非ずキユナード會社のルシタニア及びマルタニアの二大タービン船が漸く英國の聲位を恢復し得たりとして一と安心せんとするや獨逸船廠が逸早くも更に巨大なる汽船の建造に着手せりとの報道あるに徴するも獨逸の態度を推知するに難からず殊に其海軍擴張に至りては頗る目覺しきものなりとして斷えず英國の注目を惹く所なり然も英國は數年前迄は露獨の二海軍を標準として作戰を講じつゝ更に佛國に對し大なる顧慮を要したりしに今は一轉して英佛接近の好調の大變革を來せると露國海軍大敗の時運に遭ひたるを機とし莞爾として其戰略目標を更定したる結果、其艦隊配備の大變更を畫し地中海の事は一に佛國に託するの方針を執りて多年絶大の重きを置きたる同方面の艦隊を割きて本國艦隊に併合し爰に海軍勢力の中心を北海に移動したる其真意は列國の齊しく

首肯したる所なりき

此際北海に於ける兩國戰鬥主力を觀察するに獨逸は其戰艦十六隻を擧げて二艦隊を編制し英國は海峽艦隊の戰艦十四隻及び本國艦隊の常備戰艦六隻を以て北海に對する直接戰鬥力とし本國艦隊の豫備戰艦六隻及び大西洋艦隊の戰艦六隻を以て援隊となすを見る之を一括すれば

現時北海主要の勢力

英國海峽艦隊	戰艦	十四隻
本國艦隊	常備戰艦	六隻
大西洋艦隊	戰艦	六隻
獨逸國北海艦隊	常備戰艦	三十六隻
	豫備戰艦	三隻

上來敘述せる所に依り兩國戰鬥力の比較は其數字に於て非常の懸隔を存すると明らかなるが故に其優劣に就ては局外者の眼よりは敢て評言の餘地なきを知ると同時に獨逸國海軍機關が其艦隊増大の爲に全速力を出しつゝあるに拘はらず尙ほ政略上の壓迫催促の盛んなるを認むるに足る、加ふるに獨逸が近時外交上

に於て孤立に陥らんとする狀況が一入の物淋しさを感ぜしむるに際し偶々米國が其偉大なる海軍の銳進に依り實に世界の第二位に達し優に一方の重鎮たるを認め獨逸が百方手を盡して秋波を米國に送らんとするの觀ある蓋し自然の勢ならんか是れ或は獨逸艦隊の米國訪問を傳へ或は獨逸艦隊を以て米國艦隊援助の流説迄も産ましめたる所以ならん英獨皇帝の會見は北海の邊りに霽々たる瑞雲を棚引かして觀呼喝采の聲鳴りも止まざりしに裏面に於ける兩國海軍の暗闘と獨逸國の躍起的内容洵に好觀たるを値ひすと謂ふべく近々英國の北海艦隊を創設せんとするが如きは益々同方面の形勢を説明するものなり

第四節 南洋方面の勢力

濠洲方面に至ては英本國の重威を以て之を援助するあり又地勢上到底他強の嘴を容るゝ能はざる所ならん顧るに現時南大洋に其領地を有する者は英國の外僅に獨蘭の二國なれども獨逸國たる者果して同洋に英國と争ふの餘力あるやは深く考慮を預ひずして知るを得べく和蘭國に至ては固より論なきのみ然れども米

國艦隊の濠洲來訪が同國に於ける國防論沸騰の動機となりたるの觀あり前總督スコート卿の如きも其告別に臨み北部濠洲の沿岸は最も警戒を要すべく之が爲には北海岸唯一の港たるポート、ダービンの守備を嚴にするを要すと説くに至れりと云ふ

今濠洲海軍の勢力を觀るに

千九百一年に英本國と締結したる協約に依る濠洲防備艦隊は巡洋艦五隻、水雷艇二隻より成りしも千九百三年に締結したる協約は同艦隊を増勢して一等巡洋艦一隻、二等巡洋艦二隻、三等巡洋艦四隻及帆艦四隻となし經費年額の一半を濠洲の負擔とせり(更に六分の五を濠洲聯邦に於て、六分の一を新西蘭に於て分擔す)

此千九百三年の協約は國防に一進歩を來したるものなるが近時喧傳せらるゝものは更に著るしき増進を示さんとするのみならず或は英本國より獨立したる海軍を建設せん事をすら唱道するものあるが如し

(備考)有名なるシドニー、メルボルン兩港は東海岸にあり

然れども艦隊強大にして兵器精銳を増すに随ひ益々物資の無限なる供給を要する事は日露戦役に徴し極めて明らかにして同戦役に於ける我海軍の全勝は其完全なる根據地と莫大の資源を有する本國が甚手近かなりし一事最も與りて力あるは兵家の決して否む能はざる所なれば將來の大艦隊に在ては益々然らざるを得ず故に南洋に何等根據を有せざる國の艦隊が一舉にして濠州を攻略せんとする如きは驚くべき巨額の費用を投し偉大なる準備を爲すに非れば行ひ難き事にして況して海上王の稱ある英本國の援助あるに頓着せず恁かる遠征を敢てせんとする如きは殆んど夢想に過ぎずと謂はんのみ蓋し濠州の輿論が近時國防を絶叫するは近き將來に想定敵を定めたるが爲には非ずして自衛は國家の講ずべき第一着歩たるの理を自覺せるの致す所ならずんばあらず

第二編 艦艇及軍器の進歩

第一章 艦艇

第一節 總論

帝國現海軍創設の當時は歐米先進國の軍艦も未だ幼稚の域を脱せず其制式現今のものとは大に趣を異にせり即ち攻撃主力たる砲煩の裝備せられたる甲板の段數に應じラインオフパツトルシップ、ブリゲイト、コルヴェット等の區別ありしのみならず帆檣帆桁の裝置に依りフルリッグドシップ、バーク、ブリッグ等の如く其名稱を異にし又蒸汽機關を備ふるものに在ても外輪船、暗車船の二種あるを見たり而して帝國海軍初期の軍艦は悉く幕府其他諸藩より引繼ぎたるものに係り著大なる衝角を有せる浮砲臺的軍艦あり又帆裝を主とし蒸汽機關を副とせるものあり其他各艦の型式種々一様ならざりしが要するに當時の海軍は帆裝を主とし蒸汽機關を副とする木製軍艦より編成せられたりと謂ふべきと同時に蒸汽機關

が疑々として其發達を示しつゝある時代に際したりき其後横須賀に於て建造したる數隻の軍艦もありたれども何れも大なる進歩を認むべきものなかりしが明治十一年英國より回航せる軍艦扶桑(三千七百噸)は我邦に採用せられたる近世式甲鐵戰艦の嚆矢にして帝國海軍の花と謳はれ同じく英國の建造に係る鐵骨木皮艦金剛比叡の二艦(各二千三百噸)と共に常に艦隊の幹部を成せり然るに明治十八年に至り防護巡洋艦浪速高千穂船體は總て鋼鐵にて製し木材を用ひず而して舷側には甲鐵の裝備なく稍厚き鋼鐵製甲板^{デッキ}を以て要部を防護せるものを防護巡洋艦と稱す非裝甲艦の部類に屬するなり二艦とも三千七百噸の英國にて新造せらるるに及び速力十八節の大を示せると共に船體の構造砲煩の配置其他各般の設備に顯著なる進歩を來し次て明治二十四年英國にて建造せられたる小裝甲巡洋艦千代田(二千四百五十噸)は始めて速射砲を搭載するの異彩を放ち又二十五年防護巡洋艦嚴島松島の佛國より回航せられたると横須賀にて新造せる同型艦橋立及英國製造の快速力防護巡洋艦吉野とに依り益々帝國軍艦の能力を高め前三艦は何れも四千三百噸吉野は四千二百噸其後日清戰役を經過し明治二十九年英國

にて建造せられたる富士八島(一萬二千三百噸)の二戰艦は帝國海軍力銳進の楷段たりしと同時に現代式戰艦の元祖と云ふべきなり是より先き海上王の名ある英國海軍は軍艦制式の改良進歩に銳意したる結果我浪速高千穂の如き型式を甲鐵戰艦に應用して各種の戰艦を構造し主砲として十六吋或は十三吋半の口徑を有する巨砲を裝するものを製し次て砲煩の改良に伴ひ戰艦の主砲を十吋砲砲身の長さ三十口徑に改め遂に千八百九十五年(明治二十八年)には十二吋砲(三十五口徑)を主砲とせるマゼスチック型諸戰艦一萬五千噸を製し他の歐洲各國も亦此時代に於て戰艦の新紀元を劃せると共に列強巡洋艦以下に在ても著大なる進歩を示し遂に今日の如き隆勢を呈するの源を爲せり現時の帝國艦艇の類別左の如し

軍艦類別標準		計 畫 排 水 量
類別	等級	
戰艦	一等	七千噸以上

巡洋艦	二 等	七千噸未滿三千五百噸以上
海防艦	一 二 三等	七千噸以上 七千噸未滿三千五百噸以上 三千五百噸未滿
砲艦	一 二 等	千噸以上 千噸未滿
通報艦		
水雷母艦		

驅逐艦は類別等級なし

水雷艇類別標準		計	畫	排	水	量
類別	等級	百二十噸以上				
一等	一等					

水雷艇		二 等	百二十噸未滿七十噸以上
		三 等	七十噸未滿二十噸以上
		四 等	二十噸未滿

潜水艇は類別等級なし

〔備考〕艦砲々身の長さは其口径の倍數を以て算す例へば三十口径の十吋砲とは砲身の長さが十吋の三十倍なるを示すなり而して砲身の長さもの即ち口径の倍數大なる砲身を有する砲は進歩したるものと知るべし以下同じ

第二節 戰艦

我海軍が富士八島に次ぎ一萬五千噸の敷島型戰艦を建造英國會社に註文したる以來帝國は其海軍力に於て歐米列強と比肩するの地位に進みたるが愆くて十數年來一萬五千噸の戰艦に無上の満足を表するの觀ありたる列強海軍が今や則ち一躍して二萬噸の大戦艦を浮ぶるに至れるは日露戰役以後の新現象にして同戰役時代(千九百四五年の頃)は世界海軍に更に著明なる進歩を促したるを知るべ